

平成 26（2014）年度

文部科学省スポーツ・青少年局委託事業

青少年国際交流推進事業

日独青少年指導者セミナー B 3（芸術分野）

「博物館における青少年教育」に関する 日独交流事業報告書2014

平成 27 年 3 月

公益財団法人 日本博物館協会

はじめに

日本博物館協会では平成24年度より、文部科学省スポーツ・青少年局より委託を受けて「青少年国際交流推進事業／日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業」を実施してきた。本冊子は、3年目となった平成26年度の同事業に関する報告書である。

日独間の国際交流事業は、次世代を担う青少年の相互交流を図ることを目的として、両国の政府間合意に基づいて昭和47年から実施されてきた。同事業の一つである「日独青少年指導者セミナー」は、主として、青少年の教育指導者の資質の向上と青少年育成の発展を目指して、日本では文部科学省が、ドイツではドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省が、対象となる指導者の活動分野に応じて、各団体に事業を委託して交流を行うものである。「日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）」については、平成26年度も「博物館における青少年教育」をテーマとして実施されることとなり、文部科学省による企画公募を経て、日本博物館協会が受託・実施した。

10月に実施したドイツへの派遣事業では、7名の日本人のために、ケルンとミュンヘンを中心に約2週間のプログラムがドイツ連邦博物館教育連盟によって提供され、博物館の視察や意見交換が行われた。翌11月には7名のドイツ人を日本で受け入れ、2週間にわたって様々な博物館を訪問し、教育普及活動の現状を視察した。ドイツと日本では、博物館の成り立ちや制度、政治や社会の仕組みが大きく異なっているが、共有できる課題も多く、また、専門家同士お互いに共感できる部分も多かったようである。残念ながら、「博物館における青少年教育」についての文部科学省による事業は本年度をもって終了することとなるが、ドイツとの交流や博物館教育に関する国際的な研究・研修といったことについては、何らかの形で継続していきたいと考えている。

なお、本報告書には、資料編として、『博物館教育普及活動に関する品質規準』の日本語訳を収録している。ドイツ博物館協会とドイツ連邦博物館教育連盟によって2008年に出版されたものであるが、いまだ他国では類を見ないものであり、大変興味深い内容となっている。3年間の交流事業による成果の一つとして、本編と併せてご一読いただければ幸いである。

平成27年3月

公益財団法人日本博物館協会

目 次

はじめに

第1章 平成26年度事業の概要

- 1. 平成26年度における日独交流事業の概要 1
- 2. 関係者名簿 3
- 3. 協力機関・団体等 4

第2章 ドイツへの派遣事業

- 1. 派遣事業の概要 5
- 2. ドイツでの行程 9
- 3. 行動地図 10
- 4. 行動記録 11

第3章 日本での受入事業

- 1. 受入事業の概要 19
- 2. 日本での行程 21
- 3. 行動記録 22

第4章 ドイツ派遣者のレポート

- 1. ドイツの博物館における青少年教育
～平成26年度ドイツ派遣事業に参加して 寺島洋子 29
- 2. ドイツ連邦博物館教育連盟について 大木真徳 32
- 3. ドイツ連邦博物館教育連盟の
『博物館教育普及活動に関する品質規準』について ... 大木真徳 36
- 4. ドイツで訪問した施設等について
岩本二郎／加古川茉莉恵／朴 鈴子／
町田恵美／古川順子／寺島洋子／大木真徳 39

第5章 資料編

- 『博物館教育普及活動に関する品質規準』日本語訳の公開にあたって 85
- 『博物館教育普及活動に関する品質規準』 87

付録

- 1. 平成26年度「青少年国際交流推進事業」実施に関する公募要領 115
- 2. ドイツ派遣事業参加者募集要項 119

第 1 章 平成 2 6 年度事業の概要

1. 平成26年度における日独交流事業の概要

公益財団法人日本博物館協会では、平成26年度も、文部科学省からの委託による「青少年国際交流推進事業／日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業」を実施した。事業のテーマは「博物館における青少年教育」である。平成24年度から毎年、同じテーマで企画公募が行われたが、結果として、当協会が連続して受託・実施するに至った。

事業の実施にあたっては、事業検討委員会を設置して、社会教育や博物館教育の専門家や過年度のドイツ派遣者から助言をいただき、事業の円滑かつ効果的な実施に努めた。また、ドイツ側のカウンターパートであるドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP; Bundesverband Museumspädagogik e.V.）との連絡・調整を密に行いながら、派遣および受入の準備を進めた。派遣事業に関しては、全国の博物館に広く派遣者の募集を行い、事業検討委員会での選考を経て派遣者7名を決定し、事前研修の機会を設けたうえで、10月に14日間の派遣を行った。受入事業に関しては、11月に14日間、ドイツ連邦博物館教育連盟の関係者7名を受け入れ、優れた教育活動を行っている我が国の博物館を訪問し、活動の見学や教育担当者との意見交換などを行った。また、異文化体験の観点から、派遣及び受入の両事業において、1泊だけであるがホームステイも行われた。

事業の流れは以下の通りである。派遣と受入の各事業の詳細については、第2章と第3章を、また、ドイツの博物館や教育プログラム等については派遣者のレポート（第4章）を、それぞれ参照いただきたい。

■ドイツ派遣事業参加者の募集

事前に事業検討委員に諮り、前年度と同様の方法で募集を行うこととした。平成26年6月6日付けで、全国約1,100館の博物館に、ドイツ派遣事業参加者の募集要項を送付した。応募の期限は7月18日とし、参加申込書（応募理由の記入欄あり）に館長の推薦書を添付する形で、募集を行った。募集期間をやや長めに設定したこともあって、12名の応募者があった。

■事業検討委員会の開催（第1回）とドイツ派遣者の決定

平成26年7月24日に検討委員会を開催し、今年度の交流事業の趣旨や、派遣および受入のスケジュールを確認するとともに、ドイツへの派遣者7名の選考と事前研修会の内容についての検討を行った。派遣事業については、ドイツ側の希望で10月に実施することとなった。

派遣者については、うち1名を事業検討委員から出すこととし、本人の希望もあって、寺島洋子委員にお願いすることとなった。

事業検討委員会による選考結果をもとに、本人の意向を確認し、7名の派遣者を決定した。派遣者については、所属長への派遣依頼を行った。

■事前研修会の実施

ドイツ派遣予定の7名を対象として、平成26年9月8日（午後）と9日（午前）に事前研修会を実施した。講義はドイツの博物館に関することを中心として構成し、加えて、旅行代理店による渡航関係の説明や、派遣者間での話し合いの時間などを設けた。ドイツの教育制度やドイツ語の基礎知識に関する講義は、今年度は実施しなかった。

■ドイツへの派遣

日本からの派遣団7名は、平成26年10月1日から10月14日までの14日間の日程で、ケルン、エッセイ、ボン、ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン、ミュンヘンを歴訪し、周辺の博物館等を視察訪問した。滞在中のすべてのプログラムは、ドイツ連邦博物館教育連盟（B VMP）によって準備され実施された。

■日本での受入

11月にはドイツから博物館教育関係者7名を日本で受け入れた。期間は平成26年11月2日から11月16日までの14日間（ドイツ発着日を含めると15日間）である。日本でのプログラムは公益財団法人日本博物館協会事務局が主体となって企画・実施した。

■事業検討委員会の開催（第2回）

今年度の派遣および受入の両事業に関する報告を主な議題として、平成26年12月16日に第2回目の会合を持った。派遣事業については、団長として参加した寺島委員より報告いただき、受入事業については事務局が報告を行った。また、今年度をもって文部科学省からの委託という形での事業は終了することになるため、3年間の事業の成果を改めて確認するとともに、今後のドイツとの交流のあり方等について議論が行われた。

2. 関係者名簿（敬称略）

■「博物館における青少年教育」事業検討委員会委員

主 査	鈴木 眞理	青山学院大学教育人間科学部教授
委 員	可児 光生	美濃加茂市民ミュージアム館長
	後藤 文子	慶應義塾大学文学部准教授
	寺島 洋子	国立西洋美術館学芸課教育・普及室主任研究員
	半田 昌之	公益財団法人日本博物館協会専務理事
事務局	下田 重敬	公益財団法人日本博物館協会事務局長
	守井 典子	公益財団法人日本博物館協会主任研究員

■派遣事業参加者（日本からの派遣団）

寺島 洋子	国立西洋美術館主任研究員	【団 長】
古川 順子	山梨県立文学館主任教育主事	【副団長】
岩本 二郎	和歌山県立自然博物館 学芸課学芸員	
町田 恵美	沖縄県立博物館・美術館教育普及担当学芸員	
加古川茉莉恵	北方文化博物館総務係長・学芸員	
朴 鈴子	京都国立近代美術館研究補佐員	
大木 真徳	日本博物館協会特別研究員	【事務局】

■受入事業参加者（ドイツからの派遣団）

Ms. Nicole Scheda	ゾーリンゲン産業博物館	【団長兼事務局】
Mr. Uwe Rautenberg	ツェレ市立ボーマン博物館	
Ms. Anka Bolduan	ユーパーゼー民族学博物館	
Mr. Dr. Matthias Hamann	ケルン市博物館サービス	
Ms. Anne Marr	ヴィラ・シュトゥック近代美術館	
Ms. Dr. Simone Mergen	ドイツ連邦共和国歴史博物館	
Ms. Tanja Petersen	ドイツ連邦共和国ユダヤ博物館	

3. 協力機関・団体等

平成26年度日独交流事業の実施に当たっては、当協会会員をはじめとする以下の関係諸機関・団体等の方々より多大なご支援・ご協力を賜った。ここに記して深く感謝申し上げる次第である。

大國魂神社
九州国立博物館
国立西洋美術館
東京国立近代美術館
東京国立近代美術館 工芸館
東京国立博物館
トヨタ博物館
日本科学未来館
広島県立歴史博物館
広島平和記念資料館
府中市郷土の森博物館
美濃加茂市民ミュージアム
目黒区美術館
森美術館

(五十音順)

第2章 ドイツへの派遣事業

1. 派遣事業の概要

ドイツへの派遣事業は、派遣者の選定と事前研修会の実施を日本博物館協会が、ドイツ滞在中のプログラムの企画および実施はドイツ連邦博物館教育連盟が、それぞれ担当した。

■実施期間：平成26年10月1日（水）～10月14日（火）（14日間）

上記は日本発着日による。ドイツ滞在は10月13日までの13日間。

■受入担当団体について：

ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP；Bundesverbandes Museumspädagogik e.V.）は、博物館教育関係者によって組織された連邦レベルの社団法人である。ドイツ連邦青少年文化教育連合会（BKJ；Bundesvereinigung Kulturelle Jugendbildung e.V.）の傘下にある。平成24（2012）年度から実施してきた「博物館における青少年教育」をテーマとする日独交流事業で、ドイツ側のカウンターパートを務める。組織や事業等について、平成25年度の事業報告書においてもドイツ派遣者が詳述しているが、本報告書でも第4章にレポートを掲載しているので、参照いただきたい。

■連絡担当者および通訳

（連絡担当者）

ドイツ連邦博物館教育連盟

・Ms. Nicole Scheda / ゴーリンゲン産業博物館

（日本語通訳）

・Ms. Dr. Heike Patzschke

■日本からの派遣者：

寺島 洋子	国立西洋美術館主任研究員	【団 長】
古川 順子	山梨県立文学館主任教育主事	【副団長】
岩本 二郎	和歌山県立自然博物館学芸員	
町田 恵美	沖縄県立博物館・美術館教育普及担当学芸員	
加古川茉莉恵	北方文化博物館総務係長・学芸員	
朴 鈴子	京都国立近代美術館研究補佐員	
大木 真徳	日本博物館協会特別研究員	【事務局】

■事前研修会の実施

ドイツ派遣予定者7名を対象として、9月8日、9日の2日間にわたって事前研修会を実施した。本事業も3年目になることから、過去2回の派遣者による講義を主軸に構成し、ドイツ語の基礎や、ドイツの教育制度等についての講義は省略した。プログラムについては、次頁のとおりである。



平成26年度日独青少年指導者セミナー「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業

事前研修会 プログラム

日時：平成26年9月8日(月)13:30～9月9日(火)12:30

会場：商工会館7階会議室（所在地:東京都千代田区霞が関 3-4-2）

時間	プログラム
【9月8日】	
13:30	開会 挨拶 公益財団法人日本博物館協会専務理事 半田昌之
13:40～ (10分)	派遣事業参加者の紹介
13:50～ (10分)	事業説明 公益財団法人日本博物館協会主任研究員 守井典子
14:00～ (1時間30分)	講義①「ドイツの博物館について」 慶應義塾大学文学部准教授 後藤文子氏
15:30～ (1時間30分)	講義②「平成25年度のドイツ派遣事業に参加して」 山種美術館学芸部長 高橋美奈子氏
17:00～ (30分)	参加者間の打ち合わせ * 帰国後のレポート作成について
【9月9日】	
9:30～ (30分)	渡航に当たってのインフォメーション トップツアー(株) 国際旅行事業部ストリームライン新宿支店 * ドイツの気候、電圧、電話のかけ方、旅行中の安全等について * 航空機への液体物持ち込み制限、スーツケースの重量制限等
10:00～ (1時間30分)	講義③「平成24年度のドイツ派遣事業に参加して」 美濃加茂市民ミュージアム館長 可児光生氏
11:30～ (1時間)	参加者間の打ち合わせ * 訪問先での質問事項等について
12:30	閉会

■ドイツでの行程：

ドイツでは、12泊13日の滞在となった。最初の滞在地はケルンで、エッセンやボンへの訪問を含め、同地に5泊した。後半はミュンヘンに5泊したが、ケルンからミュンヘンまで南下する途中で、シュトゥットガルト近くの小都市ビューティッヒハイム＝ビッシンゲンに2泊した。ミュンヘン訪問については、平成24年度の第1回交流事業で来日したハンネローレ・クンツオット女史の強い希望によって、また、ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン訪問については、平成25年度の第2回交流事業で来日した同市の博物館長レギーナ・イルコップ氏の招請により実現したものである。詳細については、後掲の行程表と行動地図、日々の行動記録、及び、第4章のドイツ派遣者によるレポートを参照いただきたい。

■ドイツでの宿泊先：

- ・ケルン、10/1～10/5

“Motel one Köln Waidmarkt”, Tel-Aviv-Str. 6, 50676, Köln

- ・ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン、10/6～10/7

“Reinhardts Hotel Garni”, Farbstr. 9, 74321 Bietigheim, Baden-Württemberg

- ・ミュンヘン、10/8～10/12

“Motel One München - Deutsches Museum”, Rablstr. 2, Munich

■ホームステイについて：

ケルンでの週末（10/4～10/5）を利用して、1泊のホームステイが行われた。ホストを務めていただいたのは以下の方々である。ほとんどの方が今年度の交流事業で来日され、日本で再会することとなった。

＜ホームステイ協力者＞ 【 】内はゲストとなった日本団員

- | | |
|--|----------|
| ・Ms. Nicole Scheda（2012年・2014年来日） | 【寺島洋子】 |
| ・Dr. Simone Mergen（2014年来日） | 【古川順子】 |
| ・Mr. Peter Mesenhöller（2013年来日） | 【岩本二郎】 |
| ・Ms. Dorothee Dennert | 【町田恵美】 |
| ・Ms. Monika Demler | 【加古川茉莉恵】 |
| ・Ms. Monika Nordhausen | 【朴 鈴子】 |
| ・Ms. Beatrix Commandeur（2012・2013年来日）、 | |
| Dr. Matthias Hamann（2014年来日） | 【大木真徳】 |

2. ドイツでの行程

#	月／日	宿泊地(訪問先)	研修内容
1	10/1(水)	ケルン	成田発(9:45、LH711便)、フランクフルト着(14:25) フランクフルトからICEにてケルンへ(ケルン着17:05、LH3614便) ホテルにチェックインの後、ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館にて、2014年度交流事業参加者によるミーティングと夕食
2	10/2(木)	(エッセン)	列車にてエッセンへ移動 ルール博物館およびツォルフェアアイン炭鉱業遺産群を訪問 BVMP会長 ホフマン氏による講義とディスカッション 館内にて夕食の後、列車にてケルンへ
3	10/3(金)	(ボン)	列車にてボンへ移動 ドイツ連邦共和国歴史博物館を訪問 『博物館教育普及活動に関する品質基準』に関する講義 企画展開会式に参加、館内見学の後、ディスカッション等 ケルン市内にて夕食
4	10/4(土)	(ケルン)	ルートヴィヒ美術館を訪問 ケルン市博物館サービスに関する講義とディスカッション 館内にて昼食、見学の後、ローマ・ゲルマン博物館を訪問 ホストファミリーと対面し、ホームステイへ
5	10/5(日)	(ケルン)	ホームステイ(各ファミリーとの自由行動) 中央駅付近にて夕食会(ホストファミリーとの送別会)
6	10/6(月)	ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン	ホテルをチェックアウトし、ケルン市内にて自由行動 (一部団員はナチ資料館を見学) 列車にてビューティッヒハイム＝ビッシンゲンへ移動。 ホテルにチェックインの後、市長への表敬訪問と夕食
7	10/7(火)	ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン	ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン市立博物館を訪問 BVMP地方支部の活動についての講義とディスカッション 館内にて昼食の後、館内外の見学とワークショップ体験等 館長宅にて
8	10/8(水)	ミュンヘン	列車にてミュンヘンへ移動 ミュンヘン市文化部長を表敬訪問 昼食の後、ミュンヘン・ユダヤ博物館を訪問 市内見学と夕食
9	10/9(木)	ミュンヘン	ミュンヘン市立博物館を訪問 バイエルン博物館アカデミー主催の国際シンポジウムに参加 (寺島団長による発表あり) ドイツ博物館へ移動し、展示解説、昼食の後、見学と講義
10	10/10(金)	ミュンヘン	車にてシュヴァーベン地方へ移動 バイエルン王博物館を訪問 説明と見学の後、館内カフェにて昼食 ノイシュヴァンシュタイン城のガイドツアーに参加
11	10/11(土)	ミュンヘン	ノイエ・ピナコテークを訪問 (ミュンヘン博物館教育センターに関する講義を含む) ヴィラ・シュトゥック美術館を訪問、館内カフェにて昼食 展示見学、講義、ガイドツアーの後、ディスカッション 市内を見学、レジデンツ宮殿にてドイツ古典音楽を鑑賞
12	10/12(日)	ミュンヘン	プログラム評価会(会場はバイエルンにおける州立博物館以外の博物館のための州政府事務所) ビアホールにて昼食、午後は市内見学 ホテル近くのレストランにて送別会
13	10/13(月)	機内泊	ホテルをチェックアウト、ミュンヘン空港へ ミュンヘン発(11:00、LH103便)、フランクフルトへ フランクフルト発(13:55、LH710便)
14	10/14(火)		成田着(7:55)、解散

3. 行動地図



註：□内は宿泊地及び宿泊日。

4. 行動記録

2014年10月1日（水）

（日本時間）

07：45 成田空港集合。

09：45 成田空港出発（ルフトハンザ航空 LH711 便）。

（以下、ドイツ時間）

14：25 フランクフルト空港到着。

出迎え：Ms. Nicole Scheda（ゾーリングゲン産業博物館・全行程同行）

Ms. Dr. Heike Patzschke（通訳・全行程同行）

17：05 ケルン中央駅到着。

17：50 ホテル Motel One 到着。

18：15 ホテル出発。

18：40 ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館

（Rautenstrauch-Joest Museum, Köln）にて

2014年度事業参加者によるミーティング、

および、夕食。



プレゼンテーションの様子

ドイツ団からの参加者：Ms. Nicole Scheda

Mr. Uwe Rautenberg

Ms. Anka Bolduan

Mr. Dr. Matthias Hamann

Ms. Dr. Simone Mergen

Ms. Tanja Petersen

Mr. Peter Masenhöller（2013年度団員）

19：20 参加者による所属館についてのプレゼンテーション。

23：30 ホテル帰着。

2014年10月2日（木）

07：45 ホテル出発。列車にてエッセンへ移動。

ドイツ団から Mr. Reutenberg, Ms. Bolduan, Ms. Petersen が終日同行。

10:20 ルール博物館およびツォルフエアアイン炭鉱業遺産群 (Ruhr Museum; Zeche Zollverein) 到着。

対応者: Ms. Ulrike Stottrop

Ms. Angelika Wuszow

Ms. Dr. Esther Guderley

Mr. Tom Stern

10:35 Ms. Stottrop による歓迎の挨拶。

10:45 館についての講義。

対応者: Ms. Wuszow

11:30 館内の見学。

13:50 館内で昼食。

14:45 教育普及活動についての講義と全体でのディスカッション。

対応者: Ms. Wuszow, Ms. Dr. Guderley, Mr. Stern

16:15 企画展の見学。

17:30 館内にて、ドイツ連邦博物館教育連盟 (BVMP) に関する講義と全体でのディスカッション。

対応者: Ms. Anja Hoffmann による

18:50 館内カフェにて夕食。

22:45 ホテル帰着。



ルール博物館にて

2014年10月3日(金)

08:30 ホテル出発。列車にてボンヘ移動。

ドイツ団から Mr. Reutenberg, Ms. Bolduan, Ms. Petersen が終日同行。

10:20 ドイツ連邦共和国歴史博物館 (Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik) 到着。

対応者: Ms. Dr. Simone Mergen

Ms. Beatrix Commandeur (ペーパーミル産業博物館)

10:35 Ms. Dr. Mergen による当日のプログラムについて説明。

11:00 館内の見学。

12:30 博物館内のカフェにて昼食。

Mr. Masenhöller と合流。

13:40 BVMP が作成した『博物館教育普及活動に関する品質規準』

についての講義と全体でのディスカッション

対応者: Ms. Commandeur

15:00 企画展のオープニング・セレモニーに参加。

15:45 館内の自由見学。

- 17:05 教育普及活動についての講義と
全体でのディスカッション。
対応者: Ms. Dr. Mergen
- 18:30 ケルン市内のレストランにて夕食。
- 22:00 ホテル帰着。



ドイツ連邦共和国歴史博物館にて

2014年10月4日(土)

- 08:20 ホテル出発。
ドイツ団から Mr. Reutenberg, Ms. Bolduan, Ms. Petersen が昼食時まで同行。
- 09:00 ルートヴィッヒ美術館 (Museum Ludwig) 到着。
- 09:15 ケルン市の博物館についての講義と全体でのディスカッション。
対応者: Mr. Dr. Matthias Hamann
- 10:40 館内の見学。
Mr. Dr. Hamann によるワークショップの実演。
- 13:20 館内のカフェにて昼食。
- 14:25 企画展を自由見学。
- 15:15 ローマ・ゲルマン博物館 (Römisch-Germanisches Museum) の見学。
フリーランスのスタッフによるガイドツアー。
- 17:00 Ms. Scheda からホームステイについて説明。
- 17:15 ホームステイへ。日本団のうち、寺島、古川、町田、加古川はローマ・ゲルマン博物館にて、ホストファミリーと対面。
- 18:00 他メンバーは、ホテルに帰着後、ホストファミリーと対面。
それぞれホストファミリーと週末を過ごす。



ルートヴィッヒ美術館にて

2014年10月5日(日)

(ホストファミリーとの自由行動)

- 19:00 ケルン中央駅近くのブラウハウスに集合。ホストファミリーと夕食会。
- 22:00 ホテル帰着。日本団によるミーティング。

2014年10月6日（月）

- 08:50 ホテルをチェックアウト。
- 09:00 Mr. Dr. Hamann と Mr. Masenhöller によるケルン市内案内。
- 10:35 2 グループに分かれて、それぞれナチ資料館 (NS-Dokumentationszentrums) およびケルン大聖堂を見学。
ナチ資料館での対応者: Ms. Barbara Kirschbaum
- 11:45 ケルン大聖堂を全体で見学。
- 12:55 列車にて、ビューティッヒハイム=ビッシンゲンへ移動。列車内にて昼食。
- 16:00 ビューティッヒハイム=ビッシンゲン駅に到着。
出迎え: Ms. Regina Ille-Kopp (2013 年度団員)
- 16:45 ホテル Reinhardts Hotel Garni に到着。
- 17:30 ホテル出発。
- 17:50 市庁舎にて市長 Mr. Jürgen Kessing を表敬訪問。
- 18:20 Ms. Ille-Kopp による市内案内。
- 19:15 レストランにて夕食。
- 22:00 ホテル帰着。



市長表敬訪問の様子

2014年10月7日（火）

- 08:40 ホテルを出発。
- 08:50 ビューティッヒハイム=ビッシンゲン市立博物館 (Stadtmuseum Hornmoldhaus) 到着。
- 09:00 館で活動をするフリーランスのスタッフを交えての、館についての講義と全体でのディスカッション
対応者: Ms. Ille-Kopp
Ms. Maren Lippitz
- 09:45 館内の見学。途中、幼稚園・小学校による博物館利用の様子も見学。
- 11:15 BVMP の地域支部 (Verein für Museumspädagogik Baden-Württemberg) の活動についての講義と全体でのディスカッション。
対応者: Ms. Leonie Fuchs (Ludwigsburg Museum)
- 12:10 館内にて昼食。
- 13:00 館内および市内を自由見学。
- 14:00 子どもを対象としたワークショップを体験。
- 14:40 隣接するアーカイブスにて小学生を対象としたプログラムの様子を見学。



ビューティッヒハイム=ビッシンゲン市立博物館にて

- 15 : 35 教育普及活動について全体でのディスカッション。
- 17 : 30 ホテル帰着。
- 18 : 45 ホテル出発。タクシーでMs. Ille-Kopp 宅へ移動。
- 19 : 00 Ms. Ille-Kopp 宅到着。Mr & Ms. Ille-Kopp とともに伝統的な郷土料理の夕食。
- 21 : 20 Ms. Ille-Kopp 宅にて、日本への資料発送作業。
- 22 : 30 ホテル帰着。

2014年10月8日（水）

- 07 : 30 ホテルをチェックアウト。タクシーでビューティッヒハイム=ビッシンゲン駅へ移動。
- 08 : 00 ビューティッヒハイム=ビッシンゲン駅到着。列車にてミュンヘンへ。
- 11 : 45 ミュンヘン中央駅到着。タクシーでホテルMotel One へ移動。
出迎え： Ms. Dr. Hannelore Kunz-Ott（2012年度団員。以降の全行程に同行。）
- 12 : 10 ホテル到着。
- 13 : 05 ミュンヘン市文化庁事務所にて、ミュンヘン市文化部長Mr. Dr. Hans-Georg Küppers を
表敬訪問。
Ms. Anne Marr と合流。
- 13 : 30 レストランにて昼食。
- 15 : 05 ミュンヘン・ユダヤ博物館（Jüdische Museum München）に到着。
- 15 : 15 教育普及活動についての講義。
対応者：Ms. Elisabeth Schulte
- 15 : 45 館内の見学。
- 16 : 50 全体でのディスカッション。
- 18 : 10 ミュンヘン市内見学。
- 19 : 30 レストランにて夕食。
- 22 : 30 ホテル帰着。



ミュンヘン・ユダヤ博物館にて

2014年10月9日（木）

- 08 : 00 ホテルを出発。
- 08 : 45 ミュンヘン市立博物館（Münchner Stadtmuseum）到着。
Ms. Marr と合流。
- 09 : 10 バイエルン博物館アカデミー（Bavarian Museum Academy）主催の国際シンポジウムに参加。
- 10 : 30 寺島団長による発表 “Museum Education in Japanese Art Museums”
- 11 : 00 徒歩でドイツ博物館（Deutsches Museum）へ移動。

- 11:30 ドイツ博物館到着。
11:45 フリーランスのスタッフによる展示解説。
12:20 館内のカフェにて昼食。
13:30 館についての講義と、全体でのディスカッション。
対応者: 副館長 Mr. Dr. Ulrich Kernbach
14:40 館内の見学。
16:40 教育普及活動についての講義と全体でのディスカッション。
対応者: Ms. Gabriele Kramer
19:00 ホテル近くのレストランにて夕食。
21:00 ホテル帰着。



寺島団長による発表の様子

2014年10月10日(金)

- 08:15 ホテル出発。レンタカーにて、シュヴァーベン地方へ。
11:10 バイエルン王博物館 (Museum der bayerischen Könige in Hohenschwangau) に到着。
11:25 館長による歓迎の挨拶と館についての説明。
対応者: Ms. Dr. Luitgard Sofie Löw
11:35 オーディオガイドによる館内の見学。
12:30 館内のカフェにて昼食。
14:50 ノイシュヴァンシュタイン城 (Schloss Neuschwanstein) のガイドツアーに参加。
17:00 レンタカーにてホテルへ。
19:30 ホテル近くのレストランにて夕食。
22:00 ホテル帰着。



ノイエ・ピナコテークにて

2014年11月11日(土)

- 09:15 ホテル出発。
10:00 ノイエ・ピナコテーク (Neue Pinakothek) に到着。
10:10 教育普及活動についての講義とワークショップの体験。
対応者: Mr. Dr. Alfred Czech (Museumspädagogisches Zentrum)
12:55 ヴィラ・シュトゥック美術館 (Museum Villa Stuck) に到着。
対応者: Ms. Anne Marr
13:00 館長による歓迎の挨拶と館についての説明。
対応者: Mr. Michael Buhrs

- 13 : 30 館内のカフェにて昼食。
14 : 10 企画展の見学。
14 : 30 教育普及活動についての講義。
対応者 : Ms. Marr
14 : 50 Team Stuck によるガイドツアー。
16 : 00 教育普及活動についての講義と全体でのディスカッション。
17 : 20 市内を自由見学。
19 : 30 レジデンス宮殿にてドイツ古典音楽の鑑賞。
20 : 45 レストランにて夕食。
22 : 45 ホテル帰着。

2014年11月12日(日)

- 09 : 00 ホテル出発。
09 : 45 バイエルンにおける州立博物館以外の博物館
のための州政府事務所 (Landesstelle für die
nichtstaatlichen Museen in Bayern) に到着。
10 : 00 ドイツにおけるプログラムの評価会。
ドイツ団からの参加者 : Ms. Scheda



評価会の様子

Mr. Rautenberg

Ms. Marr

Ms. Dr. Kunz-Ott (2012 年度団員)

ドイツ連邦青少年文化教育連合会 (Bundesvereinigung Kulturelle Kinder- und Jugendbildung)
からの代表者 (Mr. Rolf Witte)、および、次年度から交流事業を実施するドイツ・ダンス
連盟の代表者も参加。

- 13 : 15 ビア・ホールにて昼食。
15 : 00 市内を自由見学。
19 : 45 ホテル近くのレストランにて
送別会・夕食。
22 : 00 ホテル帰着。



送別会の様子

2014年11月13日(月)

- 07 : 20 ホテルをチェックアウト。
08 : 20 ミュンヘン空港。

- 11 : 00 ミュンヘン空港出発。
 (ルフトハンザ航空 LH103 便)
- 13 : 55 フランクフルト空港にて乗り継ぎ。
 (ルフトハンザ航空 LH710 便)

(以下、日本時間)

2014 年 11 月 14 日 (火)

- 07 : 55 成田空港着。解散。



ミュンヘン空港にて

第3章 日本での受入事業

1. 受入事業の概要

日本での受入事業については、過去2回と同様に、ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP）に所属する博物館教育関係者7名を対象として、日本博物館協会が企画し実施した。今年度は、より深く日本という国と日本の博物館を理解してもらえよう、日本科学未来館のような日本の最先端技術を紹介する施設を訪問する一方で、大國魂神社への参拝と宝物殿の見学を盛り込むなどの工夫を行った。東京国立近代美術館では戦争画の鑑賞を含むガイドツアーを体験することができ、結果として、日本人の歴史観や心の問題などにも少し触れることができたのではないかと考えている。

■実施期間：平成26年11月2日（日）～11月16日（日）（15日間）

上記はドイツ発着日による。日本での滞在は11月3日から16日までの14日間である。

■ドイツからの派遣者：

- ・ニコル・シェーダ（Ms. Nicole Scheda）／ゾーリンゲン産業博物館 【団長兼事務局】
- ・ウーヴェ・ラウテンベルグ（Mr. Uwe Rautenberg）／ツェレ市立ボーマン博物館
- ・アンカ・ボルドゥアン（Ms. Anka Bolduan）／ユーバーゼー民族学博物館
- ・マティアス・ハマン（Mr. Dr. Matthias Hamann）／ケルン市博物館サービス
- ・アンネ・マール（Ms. Anne Marr）／ヴィラ・シュトゥック近代美術館
- ・ズィモーネ・メルゲン（Ms. Dr. Simone Mergen）／ドイツ連邦共和国歴史博物館
- ・ターニャ・ペーターセン（Ms. Tanja Petersen）／ドイツ連邦共和国ユダヤ博物館

■ドイツ語通訳：岡本美枝氏

■引率等：日本博物館協会の職員が分担して引率役を務めたが、訪問のサポート役として、今年度までのドイツ派遣者有志の協力を得ることができた。

■日本での滞在先：

宿泊したホテルの名称および所在地は以下のとおり。

- ・ダイヤモンドホテル（東京都千代田区麹町 1-10-3）
- ・チサンホテル広島（広島県広島市中区幟町 14-7）

- ・サンホテル福山（広島県福山市城見町 1-2-33）
- ・名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市犬山北古券 107-1）

■ホームステイについて：

今年度も、日本の生活・文化を体験することを目的として、1泊のホームステイを実施した。ホストファミリーとしてご協力いただいたのは、以下の6名の方々である。11月8日（土）の午後に目黒区美術館等でゲストと対面していただき、各家庭にご案内いただいた。11月9日（日）は終日、各ホストと過ごした後、ホテルに再集合して、ホストファミリーとの送別会を行った。

（ホームステイ協力者） 敬称略、【 】内はゲストとなったドイツ団員

- ・寺島洋子（国立西洋美術館、事業検討委員・2014年派遣者）

【ニコル・シェーダ】

- ・原嶋千榛（日本博物館協会研究補佐員）

【ウーヴェ・ラウテンベルグ】

- ・田中享生（翻訳家）

【アンカ・ボルドゥアン】

- ・竹市伸子（一級建築士）

【マティアス・ハマン】

- ・井上尚子（アーティスト）

【アンネ・マール】

- ・大木真徳（日本博物館協会特別研究員・2014年派遣者）

【ズィモーネ・メルゲン、ターニャ・ペーターセン】

2. 日本での行程

#	月日	曜	内容(訪問先)	宿泊地
1	11月2日	日	ドイツ出国	
2	11月3日	祝月	羽田着(13:05)(LH0716便) モノレールとタクシーにてホテルへ移動 チェックインの後、歓迎会	東京
3	11月4日	火	国立西洋美術館訪問 日本での受入プログラムについて説明(午前) 同館の教育普及活動について説明と体験(午後) 浅草散策	東京
4	11月5日	水	東京国立博物館訪問(日博協会長への表敬訪問を含む) 森美術館訪問 六本木ヒルズにて夕食	東京
5	11月6日	木	大國魂神社訪問(参拝と宝物館見学) 府中市郷土の森博物館訪問 歌舞伎鑑賞	東京
6	11月7日	金	日本科学未来館訪問 東京国立近代美術館(工芸館)訪問	東京
7	11月8日	土	目黒区美術館訪問 ホストファミリーとの対面(ホームステイへ)	(東京)
8	11月9日	日	ホームステイ 夕食はホテル内レストランにてホストファミリーとの送別会	東京
9	11月10日	月	飛行機にて福岡へ移動 太宰府天満宮見学の後、九州国立博物館訪問 新幹線にて広島へ移動	広島
10	11月11日	火	広島平和記念資料館訪問 新幹線にて福山へ移動 広島県立歴史博物館訪問	福山
11	11月12日	水	新幹線にて名古屋へ移動 トヨタ博物館訪問 バスにて犬山へ移動、犬山城見学	犬山
12	11月13日	木	バスにて美濃加茂へ移動 美濃加茂市民ミュージアム訪問 東京へ移動	東京
13	11月14日	金	評価会(ドイツ派遣を含め本年度交流事業の総括とディスカッション) 江戸東京博物館の自由見学 両国にて送別会	東京
14	11月15日	土	東京国立近代美術館訪問(ギャラリーツアー体験) 午後から自主研修	東京
15	11月16日	日	タクシーとモノレールで羽田空港へ 羽田発(15:20)(LH0717便にて帰国)	

3. 行動記録

2014 年 11 月 3 日 (月・祝)

午後 14 時 30 分頃、羽田空港国際線ターミナルにてドイツ団を出迎えた。しばらく休憩した後、モノレールで浜松町へ移動し、タクシーに分乗して半蔵門のダイヤモンドホテルへ向かった。チェックインと休憩の後、ホテル近くの居酒屋にて、日本博物館協会職員らによる歓迎会を行った。

2014 年 11 月 4 日 (火)

この日から受け入れプログラムが実質的にスタートした。国立西洋美術館の講堂をお借りして、ドイツ団メンバーが自己紹介を兼ねたプレゼンテーションを行い、また日本側からは、今後のプログラムについての概要説明を行った。

昼食は、上野公園内の韻松亭を訪れた。日本家屋の中で、美しく盛りつけられた和食を愉しんだ。

午後はまた国立西洋美術館に戻り、寺島洋子主任研究員から同館の教育普及活動に関する説明を受けた後、横山佐紀主任研究員の指導のもと、Tシャツ作りのワークショップを体験した。

その後、浅草へ移動して浅草寺に参拝し、仲見世界隈を散策した。



2014年11月5日（水）

この日の午前中はまた上野公園を訪れた。東京国立博物館で、日博協会長でもある銭谷館長を表敬訪問した後、新設された「教育普及スペース みどりのライオン」にて、ボランティア室長の鈴木みどり氏から同館の教育普及活動についての説明を受けた。

午後は、上野駅周辺で簡単に昼食をとり、地下鉄で六本木へ移動して森美術館を訪問した。

森美術館では、エデュケーターの白濱恵里子氏から概要説明を受けた後、チーフ・キュレーターの片岡真実氏らが加わって、英語でのディスカッションとなった。また、同館で開催中の「リー・ミンウェイとその関係展」を見学し、「参加するアート」を体験したほか、六本木ヒルズからの夜景を堪能することができた。夕食の後はドイツ団のための振り返りの時間とした。



2014年11月6日（木）

この日のプログラムのメインは府中市郷土の森博物館の見学であったが、同館の展示をより深く理解してもらうために、先に、大國魂神社に参拝し、宝物館を見学させていただいた。



府中市郷土の森博物館では、館長の小野一之氏と学芸係長の深澤靖之氏に対応いただいた。同館の訪問は昨年度も行ったが、その後、常設展示室のリニューアルがあり、10月にオープンしたばかりの新しい展示を見学することができた。屋外の、移築・復元された古い建築物も好評であった。

夜は歌舞伎座にて「義経千本桜」などを鑑賞した。



2014年11月7日（金）

この日はお台場にある日本科学未来館を訪問し、事業部プログラム開発課の安藤菜穂子氏に同館の教育プログラム等に関する話をお聞きした後、科学コミュニケーターの本田ともみ氏の案内で展示見学を行った。

午後は、国立近代美術館工芸館を訪問した。同館の「タッチ&トーク」プログラムについて、主任研究員の今井陽子氏から説明を伺った後、開催中の展覧会「青磁のいま」に関するタッチ&トークを体験させていただいた。

展覧会見学の後は、平成24年度のドイツ派遣事業に参加した一條彰子主任研究員から「国立美術館アート・カード」の紹介があり、全員でカードの使用法を体験した。



2014年11月8日（土）

この日は目黒区美術館を訪問し、学芸係長の降旗千賀子氏に同館のワークショップや「引き出し博物館」に関する話をしていただいた。同館の訪問は結果的に、平成24年度から毎年、計3回実施させていただいたことになるが、ワークショップや展示の教育的意義を再確認することができ、日本での受け入れプログラムの前半を良い形でしめくることができた。

夕方からはホームステイとなった。



2014年11月9日（日）

朝からそれぞれのホストファミリーとともに過ごしたドイツ団は、夕方、半蔵門のホテルに再集合し、ホテル内の中華レストランで、ホストファミリーとの夕食会に臨んだ。どのようなステイだったのか一人ずつ披露してもらい、体験を共有した。



2014年11月10日（月）

プログラムの後半は、福岡への飛行機移動から始まった。前年度のドイツ派遣事業に九州国立博物館主任研究員、池内一誠氏が参加したこともあり、ドイツ団からの強い要望を受けて、同館を訪問することとなった。一行は、太宰府天満宮に参拝し、九州国立博物館に向かった。同館には、体験型展示室「あじっば」を中心にした説明と見学を依頼し、ご対応いただいた。



2014年11月11日（火）

前日のうちに広島まで移動し、朝から広島平和記念資料館を訪問した。前年度のドイツ派遣事業に参加した土肥幸美学芸員の案内で、原爆ドーム等を見学した後に、同館の展示を見学させていただいた。見学の後、志賀賢治館長から概要説明を受け、意見交換等を行った。



国際会議場で昼食をとった後、新幹線で福山へ移動し、午後は広島県立歴史博物館を訪問した。前年度ドイツ派遣事業参加者の久下実主任学芸員のほか、岡田圭史館長や宇佐川秀輝副館長にもご対応いただき、概要説明の後、展示を見学した。



2014年11月12日（水）

この日は、新幹線で名古屋へ移動し、トヨタ博物館を訪問した。初年度のドイツ派遣事業に参加した学芸員の藤井麻希氏のほか、館長の布垣直昭氏らにご対応いただいた。展示室の見学と併せて、所蔵車両を走行させるデモンストレーションの様子や、新しく設置された教育普及用のスペース「TINY STUDIO」も見学させていただいた。

夕方には、犬山に移動し、犬山城を見学した後、いわゆる観光ホテルに宿泊した。大部屋での宿泊や大浴場を体験することができた。



2014年11月13日（木）

最後の訪問地は、美濃加茂市民ミュージアムだった。館長の可児光生氏には初年度のドイツ派遣事業で団長を務めていただいている。昨年に引き続き、小学校団体が博物館を利用する様子を見学することができた。また、ボランティアによって組織された「伝承料理の会」の協力で、五平餅づくりの体験をさせていただいたほか、昼食にはこの地域に伝わる郷土料理をご用意いただいた。美濃加茂市長の藤井浩人氏も駆けつけてくださり、復原されている古い民家で素晴らしい昼食会となった。



2014年11月14日（金）

この日は日本でのプログラムと、今年度の交流事業全体を振り返る「評価会」を行った。事業運営委員会からも、委員長の鈴木真理青山学院大学教授をはじめ、寺島洋子委員や後藤文子委員にご出席いただいたほか、過去3年間のドイツ派遣事業参加者にも可能な限り出席していただいた。



日本博物館協会の半田昌之専務理事の司会により、ドイツ団から一通り、日本でのプログラムに対する感想等を述べてもらった。日本側の出席者にも、本事業に関するコメントをお願いした。毎年すこしずつ新しい発見があり、3年を経過してようやくドイツと日本の違いや、共通する課題等が見えてきたなかで、来年度以降もなんらかの形で交流を継続していきたいと考える関係者が多かった。

評価会の後は、両国に移動し、東京都江戸東京博物館の自由見学の後、割烹吉葉にて、ちゃんこ鍋を囲んでの送別会となった。

2014年11月15日（土）

東京国立近代美術館の本館は11月4日から休館していたため、工芸館を訪問した際には見学できなかったが、11日から再開されたこともあり、一條彰子主任研究員のご厚意でギャラリーツアーを行っていただいた。日本の美術館で行われている対話型鑑賞教育を体験する良い機会となった。午後は各自、自主研修とした。

2014年11月16日（日）

半蔵門のホテルをチェックアウトし、タクシーに分乗して浜松町に行き、モノレールで羽田空港国際線ターミナルへ移動した。搭乗手続きの後、ターミナルビル内の日本食レストランで、日本で最後の食事をし、出国となった。

（以上）

第4章 ドイツ派遣者のレポート

1. ドイツの博物館における青少年教育 ～平成 26 年度ドイツ派遣事業に参加して～

国立西洋美術館 寺島洋子

今年度は、日本博物館協会が平成 24 年度から 26 年度の 3 年間にわたって実施した「日独青少年指導者セミナー」の最終年度となった。当初、2 年間で予定されていた本事業は、幸運にも 1 年延長された。事業検討委員会の委員のひとりとして、毎年派遣者を送り出していたが、最後に、派遣者とともに、10 月 1 日から 14 日までの 14 日間にわたり、ケルンとミュンヘンを中心に約 14 組織を視察するドイツ側のプログラムに参加する機会に恵まれた。

視察した個々の博物館や組織の概要、そこで得た知見、感想は、派遣メンバーの各報告に譲り、ここではドイツの博物館教育の大局的な印象、国が支援する青少年教育への取り組み、共感した発言について記す。

《ドイツの博物館教育—印象》

今回実見したことから、ドイツにおける博物館教育は、その歴史や制度という点で、日本と異なる部分も数多くあるが、現代社会における教育の課題を視座に据えた活動を展開しているという点で、日本を含む世界の多くの博物館と共通する要素があることが確認できた。

まず、視察した多くの博物館で耳にした「対象グループ」という言葉である。この言葉から、ドイツでは、博物館利用者の多様性を意識・尊重しており、利用者を主体とする姿勢が伝わってきた。これは、2006 年の UNESCO の提言 *Road Map for Arts Education* (芸術教育のため指針) が影響している。この提言のなかで強調されているのは、「あらゆる人々、あらゆるグループのための文化教育」で、本交流プログラムのドイツ側スタッフによれば、この提言によってドイツの博物館教育の役割は強化されたとのことだった。

そして、実見できたプログラムの多くは、対話をベースとしながら、時にゲーム、創作、実演などの体験活動を織り交ぜ、参加者自身が能動的に見て、考えることを促していた。また、過去 2 年の視察においても同様の報告があり、そこから見えてくるのは、ドイツも世界の多くの博物館と同様に、「コンピテンシー(能力)を育成すること」を重視していることであり、日本での活動とも共通する手法を散見することができた。

コンピテンシーとは、OECD の定義によれば「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力」のことで、21 世紀に必要とされている能力である。そこで重視されるのは、深く考える力、変化に対応する力、経験から学ぶ力、他者とのコミュニケーション能力などである。

テクノロジーの急速かつ継続的な「変化」、人間関係の「複雑化」、さらにグローバル化による国を超えた「相互依存」といった社会情勢のなかで、博物館教育が抱える課題は各国に共通す

る要素を含んでいる。それゆえ、今回の交流プログラムを通して、ドイツでの取り組みを実見できたことは、日本の博物館教育にとっても大いに意味のあるものであった。

《国が助成する青少年教育プログラム—Kultur macht STARK》

今回の交流事業の企画実施を委託された日本博物館協会のカウンターパートとなった、ドイツ連邦博物館教育連盟(Bundesverband Museumspädagogik e.V.、以下 BVMP)が推進しているプロジェクトの一つに、“MuseobilBOX”がある。このプロジェクトについては、すでに過去の報告書で詳細な説明がなされているので割愛するが、大分で助成金を支給しているドイツ連邦教育研究省(Bundesministerium für Bildung und Forschung、以下 BMBF)の考えと、この助成を BVMP をはじめとする各組織に仲介しているドイツ連邦青少年文化教育連盟(Bundesvereinigung Kulturelle Kinder- und Jugendbildung e.V.、以下 bkj)について補足する。

BMBF によるこの助成事業の目的は、社会的、財政的、あるいは文化的な理由で、質の高い教育を受ける機会を逸している青少年に、学校外の実施施設を通じて学習機会を提供することである。学外での活動は、青少年の教育と人格形成に重要、かつ永続的に寄与するものであり、文化は特にこの活動に有益であるとの認識から、「文化は強さをもたらす(Kultur macht STARK)」をスローガンに、BMBF は 2013 年から 2017 年の 5 年間で合計 2 億 3000 万ユーロを、文化プログラムに助成することを決定した。

そこで、BMBF の助成を仲介しているのが bkj である。bkj は、青少年を対象とする文化教育に関わる団体を束ねている法人組織で、BVMP を含む 56 の団体が所属している。bkj の仕事は、これらの団体の活動を支援することで、例えば、国からの助成金や委託事業を各団体に分配したり、あるいは所属団体のために資金調達をしたりする。bkj には、14 の地域事務所があり、私たちが参加したバイエルン博物館アカデミーの秋季講座で、この助成事業の説明をしたのは、ミュンヘンの事務所の担当者だった。

また、ドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省(Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend、BMFSFJ)が助成する今回の「日独青少年指導者セミナー」も、bkj が仲介して BVMP に事業を委託したものである。官僚国家ドイツでは、国の事業には複雑で大量の書類作成があり、bkj はそうした書類作成などもサポートしているとのことだった。

《共感した発言》

「国際交流の意義は、自分のことを振り返り、考える機会となること」

これは、最終日のフィードバックで bkj の Rolf Witta 氏が言った言葉である。人は他者との関係性において、はじめて自分の出自、帰属する社会や文化を意識し、己を知ることになる。日常の生活のなかでも起きることかもしれないが、国際交流はそれをより大きな視点から体験する機会である。それゆえ、今回のようなプログラムによって得られる組織としての成果も重要ではあるが、Witta 氏が語ったように「参加した個人にもたらされる体験の豊かさや成長」も大いに意味のあることだと感じた。さらに、氏曰く、「初回の訪問(視察)では、自分のことを説明するために自らを振

り返ることで精一杯となり、2 回目の訪問で初めて相手のことに注意を向けることができるようになるのではないか」と。であるならば、どのような形であれ、こうした交流の機会を今後も継続させることができれば幸いである。

最後に、3 年間にわたる交流プログラムの企画・実施に尽力してくださった、日本博物館協会とドイツ連邦博物館教育連盟の方々に、また、ご協力いただいた両国の博物館・美術館、プログラムの実現に携わったすべての方々に感謝申し上げます。

参考 URL:

ドイツ連邦教育研究省 <http://www.bmbf.de/>

ドイツ連邦青少年文化教育連盟(社団法人)<http://www.bkj.de/>

2. ドイツ連邦博物館教育連盟について

日本博物館協会特別研究員 大木真徳

本交流事業のドイツ側のカウンターパートであるドイツ連邦博物館教育連盟(Bundesverbandes Museumspädagogik e.V., 以下、BVMP)については、すでに本交流事業の昨年度までの報告書において詳しく報告がなされているが¹、本年度のドイツ派遣中には、改めて、BVMP の会長 Ms. Anja Hoffmann、および、ルートヴィヒスブルク博物館(Ludwigsburg Museum)の Ms. Leonie Fuchs から、BVMP の活動について講義を受ける機会を得た。特に、Ms. Fuchs の講義においては、BVMP の地域支部の活動について詳しい説明を受けた。また、それぞれの講義では、本交流事業のドイツからの参加者も加わり活発なディスカッションが行われ、実際にドイツの博物館で活動するエデュケーターたちの BVMP の活動に対する意見や評価を聞く貴重な機会となった。今回の滞在中に得た情報を中心に、改めて BVMP について報告をする。

1. BVMP の概要

BVMP は、ドイツの博物館教育の発展に寄与することを目的に、1991 年に設立された組織である。BVMP は、6 つの地域支部から構成されており、支部の多くは BVMP の設立に先行して活動を開始していた。地域支部の会員になると、自動的に BVMP の会員になる仕組みになっており、BVMP の会員は 1,000 近くになる。会員には個人会員の他に、博物館単位で入会する法人会員がある。個人会員の主体は、博物館で実



Ms. Hoffmann による講義の様子

際に教育普及活動を担うスタッフとなっており、会員の所属する博物館の館種は多岐にわたっている。また、ドイツの博物館では、一般的に、多くのフリーランスのスタッフが教育普及活動に携わっており、BVMP の会員にもフリーランスのスタッフが含まれている。

活動の主体は地域支部となり、それぞれの地域支部の会員数規模に応じて柔軟な活動が展開されている。そうした地域ごとの多様な活動を可能にするという点で、BVMP が地域支部の連合体として組織される仕組みが重要であると理解されている。具体的には、エデュケーターの養成や研修が各地域支部において活発に取り組まれている。

¹ 藤井麻希「ドイツ連邦博物館教育連盟について」『「博物館における青少年教育」に関する日独交流事業報告書』, 平成 25 年 3 月, pp. 39-40、および、加藤由以「ドイツ連邦博物館教育連盟について」『「博物館における青少年教育」に関する日独交流事業報告書 2013』, 平成 26 年 3 月, pp.45-47.

一方で、6つの地域支部が共同して、BVMPとして取り組むものとして、機関誌 *Standbein Spielbein* (『支脚と遊脚』) の発行やホームページの運用がある。また、BVMPには理事会や諮問会議が設けられており、BVMPを代表して、各省庁や外部組織との連絡調整の役割を担っている。加えて、BVMPによって設けられるワーキング・グループやプロジェクトには、地域支部が共同で参加している。

近年、最も活発に活動しているワーキング・グループには、バリアフリーおよびソーシャル・インクルージョンについてのワーキング・グループ (Fachgruppe „Barrierefreie Museen und Inklusion“) がある。このワーキング・グループは、1999年から活動をしており、博物館に限らずドイツにおける文化事業においてパイオニア的な役割を果たしてきた。また、高齢者の増加という社会的課題を背景に、60歳以上の世代への対応を考えるワーキング・グループ (Fachgruppe „Generation 60plus“) なども設置されており、社会的な時事問題に応じた取り組みが実施されている。

プロジェクトは期限を設けて実施され、本交流事業もこれにあたる。プロジェクトのなかには大規模な助成を受けて実施されるものもあり、たとえば、2013年から2017年にかけて実施されている“MuseobilBOX”プロジェクトは、ドイツ連邦教育研究省 (Bundesministerium für Bildung und Forschung) から1,000万ユーロの助成を受けている。このプロジェクトは、青少年に博物館での教育の機会を提供することを目的としたもので、ドイツ全国から100館以上が参加している。

BVMPはさまざまな組織や団体と連携をとっており、そのなかには教育研究省や家庭高齢者女性青少年省 (Bundesministerin für Familie, Senioren, Frauen und Jugend) といった中央省庁が含まれる。連邦政府が文化政策について議論をする際には、その過程に参加するようにBVMPに要請がなされる場合が多い。その他にも、文化や教育に関連する民間の組織、ならびに外国の博物館・博物館教育に関連する組織とも連携関係にあり、お互いの協力のうで活動を展開している。

2. 地域支部の位置づけ

先述したように、BVMPの活動は6つの地域支部が主体となっている。その1つである、バーデン・ヴェルテンベルグ博物館教育協会 (Verein für Museumspädagogik Baden-Württemberg e.V. 以下、VMP-BW) は、BVMPに先行して1990年に設立されている。バーデン・ヴェルテンベルグ州には博物館協会 (Museumsverbands Baden-Württemberg e.V.) も存在し、VMP-BWはその博物館協会を構成するひとつのワーキング・グループとしても位置づいている。VMP-BWの会員は、個人会員が200人程度、法人会員が100館程



BVMPの地域支部

※ BVMPのウェブサイトをもとに作成。

度となっており、BVMP の 6 つの地域支部のうち 2 番目に規模の大きい支部となっている。

VMP-BW に期待されている役割として、まず、バーデン・ヴェルテンベルグ州のエducーターの利害を代表することがあげられる。その役割を果たすために、他の地域の博物館教育に関連する連盟や協会との協力・連携の促進、また、博物館で働くエducーター以外の職員との連絡や協力の促進といったことを活動の目的としている。加えて、博物館における教育普及活動の発展を目指して、バーデン・ヴェルテンベルグ州内でのエducーターの交流の促進もはかられており、研修などの事業を通じた情報の共有や提供に取り組んでいる。情報の共有・提供という点では、BVMP の機関誌 *Standbein Spielbein* が果たしている役割は大きく、VMP-BW の取り組みや集会の情報などが随時掲載されている。

VMP-BW が実施する主な事業は研修となる。VMP-BW には、10 人で構成される理事会があり、研修の内容についても、その理事会の定期会合で検討される。研修の一般的なスタイルは、博物館を会場として、その館の教育普及活動を紹介するというものになる。研修参加者は、実際にその館のプログラムを体験することにより、教育普及活動の方法や課題について学ぶ。こうした研修のスタイルは、具体的な他館の取組



Ms. Fuchs による講義の様子

みを知る機会となるので、情報共有という点で大きな意味を持っているという。また、特定の研修テーマを設ける場合もあり、教育普及活動に関わる具体的な技術に焦点を当てた研修なども実施している。研修の場所はドイツ国内に限らず、外国でも研修を実施している。

VMP-BW は、博物館で何か問題が生じた際に、コンサルタントの役割も果たしている。問い合わせの多い内容には、例えば、フリーランスのスタッフに関わる問題などがあり、適宜、指導・助言をしている。フリーランスのスタッフの場合、雇用条件のなかで社会保険の取り扱いが問題になることが多く、そうした法律に関わるような問題についても問い合わせがあるという。

VMP-BW は、その活動を通して、バーデン・ヴェルテンベルグ州内における博物館の教育普及活動の発展に寄与しており、特に、エducーター同士の交流の場を提供する組織として大きな役割を果たしている。VMP-BW に限らず、BVMP の地域支部はそれぞれの地域で活発な活動を展開しており、その組織の規模や地域性を反映した多様な事業を実施しているという。BVMP の活動は、あくまでそうした地域支部による活動が主体となっており、BVMP はその地域支部間の連絡調整の役割を果たしている。

3. BVMP の設立の背景と今後の課題

そもそも地域支部の多くは、BVMP が設立される以前から活動を開始しており、その活動を受けてエducーターの全国的なネットワークの必要が認識されるようになったことが、BVMP が設

立されたひとつの要因であるという。

ドイツにおいて、博物館のエデュケーターという職が登場するのは 1970 年代であったが、その当時、エデュケーターの養成や研修のプログラムはなく、さまざまな背景をもった人々がエデュケーターとして活動をしていた。そうした状況から、エデュケーター同士が博物館の教育普及活動について意見交換ができる交流の場が必要とされるようになり、それぞれの地域で研修やワークショップが開催されるようになったという。そこでは、エデュケーターやキュレーターとの関係の在り方や、エデュケーターの社会的認知や評価についても議論され、そうした取り組みが地域での博物館教育の協会や連盟の設立につながるようになった。BVMP は、そうした既存の地域でのエデュケーターのネットワークを基盤に成立したものといえる。このような設立経緯は、あくまでエデュケーターの自発性を活動の基盤とする、BVMP のボランティア・ベースな組織としての特徴をよく示していると考えられる。

BVMP の 20 年にわたる活動、また、それに先行して開始された地域支部による活動の成果として、エデュケーターとキュレーターの関係や、エデュケーターの役割に対する博物館内での理解、さらには、エデュケーターの社会的認知が確かに改善・向上がされたという。一方で、エデュケーターの給与や雇用条件などに関しては、課題もまだ多く存在する。

BVMP 会長 Ms. Hoffmann によれば、現在、ドイツのエデュケーターは転換期にあるという。エデュケーターに期待される役割が変化してきており、移民や障害者、高齢者、青少年といったそれぞれのターゲット・グループに対応した文化教育の実現がエデュケーターに強く期待されるようになっている。エデュケーターという職が登場した当初は、その活動が子ども向けのプログラムの企画や運営に限定される場合も多かったが、現在は、すべての世代に対応したプログラムや社会問題に対応したプログラムの実施が求められている。そうした変化を受けて、いま、BVMP が抱える最重要の課題は、エデュケーターの定義を確立することだという。現在、エデュケーターというと、ガイドツアーの担当者から教育普及部門の管理職まで、教育普及活動に関わるあらゆるスタッフがその範疇に含まれてしまう。そうした状況を改めて、エデュケーターの職務や役割を定義し、その養成のあり方や望ましい労働条件を定めることが BVMP に求められているという。

【参考 URL】

- ・ ドイツ連邦博物館教育連盟 (Bundesverbandes Museumspädagogik e.V.) のウェブサイト:
<http://www.museumspaedagogik.org/start.html>

講義受講日

- ・ Ms. Anja Hoffmann: 2014 年 10 月 2 日 (木), ルーレ博物館にて。
- ・ Ms. Leonie Fuchs: 2014 年 10 月 7 日 (火), ビューティツヒハイム=ビッシンゲン市立博物館にて。

3. ドイツ連邦博物館教育連盟の『博物館教育普及活動に関する品質規準』について

日本博物館協会特別研究員 大木真徳

本交流事業での日本団のドイツ派遣中には、ドイツ連邦博物館教育連盟 (Bundesverbandes Museumspädagogik e.V., 以下、BVMP) を代表して、ペーパーミル産業博物館 (LVR-Industriemuseum Papiermühle Alte Dombach) の Ms. Beatrix Commandeur から、BVMP が策定した『博物館教育普及活動に関する品質規準』(“Qualitätskriterien für Museen: Bildungs- und Vermittlungsarbeit”. 以下、「品質規準」)¹について講義を受ける機会を得た。講義中のディスカッションには、本交流事業のドイツからの参加者も加わり、「品質規準」についてそれぞれの意見や評価を聞くことができた。加えて、派遣中には、この「品質規準」の編集代表を務めた、バイエルンにおける非州立博物館のための州政府事務所 (Landesstelle für die nichtstaatlichen Museen in Bayern) の Ms. Dr. Hannelore Kunz-Ott からも、その作成過程について説明を受ける機会を得た。BVMP の策定した「品質規準」について、本交流事業で得た情報を中心に報告をする。

1. 「品質基準」の概要

この「品質規準」は、BVMP により作成され、ドイツ博物館協会 (Deutscher Museumsbund e.V.) との連名で 2008 年に発行された。作成の過程では、オーストリア博物館教育文化普及者連盟 (Österreichischen Verband der KulturvermittlerInnen im Museums- und Ausstellungswesen) とメディアムス・スイス博物館教育普及専門職連盟 (Mediamus – Schweizerischer Verband der Fachleute für Bildung und Vermittlung im Museum) の協力を得ている。

「品質規準」の本文は、6 章から構成されている。1 章では、「基本方針」が示され、博物館の教育普及活動の定義や役割が述べられている。そこでは、教育普及活動が、来館者と展示・コレクションとの対話を形成する活動として位置づけられ、博物館における不可欠な要素であることが謳われている。2 章は、「博物館教育の内容」についてであり、教育普及活動においては、来館者がコレクションとつながりを築くための手助けとなるように、それぞれのコレクションにふさわしい学際的なアプロ



Ms. Commandeur の講義の様子

¹ 「品質規準」については、BVMP のウェブサイトから閲覧およびダウンロードが可能。
<http://www.museumspaedagogik.org/publikationen/leitfaeden/qualitaetskriterien.html>

一チが用いられる必要が指摘されている。3 章は、「博物館教育の対象者」について、より多くの人々に博物館での文化教育の機会を提供するために、多様なターゲット・グループへの対応の必要が述べられている。その際、実際の来館者だけではなく、非来館者の存在にも注意を払う必要が指摘されている。4 章は、「教育普及活動の方法」について、多種多様な方法が用いられることを、具体的な方法を取り上げながら説明をしている。その際、いずれの方法においても、来館者の自発性や自主性を尊重することが求められている。5 章では、「教育普及担当職員に求められるスキル」について述べられている。エデュケーターには、自然史や歴史学といった、それぞれの学術的な専攻に加え、教育学や博物館学に関する知識が求められること、また、そうした知識のみだけでなく、人とのコミュニケーション能力や、教育普及活動にやりがいや楽しみを見いだせるような姿勢も求められることが説明されている。6 章では、エデュケーターが教育普及活動を実施するうえでの「パートナー」について、博物館内部、および、外部の関係者に言及しながら、連携・協力関係の構築の必要が指摘されている。

6 章の後には、「博物館教育普及活動に必要な諸条件」として、理想的な教育普及活動を実施するために必要とされるインフラ、物的・人的・財的資源、理念が具体的に列挙されている。そうした「諸条件」に加え、各章においても、チェックリストが掲載されるといった配慮がなされており、「品質規準」全体を通して、具体的、かつ、実用的なものになるような工夫が施されている。

2. 「品質規準」の作成過程

「品質規準」は、その内容のみならず、作成過程にも重要な意味があったという。先述したように、「品質規準」はドイツ博物館協会との連名での発行となっているが、実際の作成は BVMP によって実施された。その作成で中心的な役割を担ったのが、Ms. Dr. Hannelore Kunz-Ott であった。Ms. Dr. Kunz-Ott の指揮のもと、作成にあたっては、2 年をかけてワークショップが実施された。ワークショップには、BVMP の会員、博物館職員だけでなく、研究者や専門家の参加も適宜要請した。ワークショップでは、複数の小グループが設けられ、それぞれに議題が割り当てられた。



Ms. Dr. Kunz-Ott

ワークショップの結果に基づいて、草稿が仕上がった後にも、議論が継続しておこなわれ、各章に対応したワーキンググループが組織された。そこでは、BVMP の会員、博物館職員、研究者、フリーランスのスタッフといった人々が参加して、内容の確認がおこなわれ、評価やコメントが各章の執筆担当者にフィードバックされた。これを受けて、執筆担当者が修正を随時実施した。作成の最終段階では、会議が開催され、全体での討論が実施された。

このような作成過程からは、BVMP の会員をはじめ、博物館の教育普及活動の関係者の意見を、「品質規準」に着実に反映させるための十分な配慮がうかがえる。この作成過程自体が、博

博物館における教育普及活動の意義や役割、および、エデュケーターの職務や専門性に関する共通理解を形成するためのひとつの場として機能したと捉えることができよう。BVMP は、各地域におけるエデュケーターの自主的・自発的な活動を基盤とする、ボランティア・ベースな組織としての性格を強く持つといえるが、この「品質規準」の作成過程においても、そうした性格がよく反映されていたといえる。

3. 「品質規準」に対する評価

「品質規準」が策定されてから、6 年以上が経過するが、この間、ドイツ国内だけでなく国外からも大きな関心が寄せられており、その内容が高く評価されているという。そうした反響を受けて、外国語への翻訳も実施されている。

ドイツ国内では、博物館において教育普及活動を企画・実施する際に、重要な判断基準として、この「品質規準」が役立てられている。また、エデュケーターの採用や、フリーランスのスタッフの研修などでも役立てられており、博物館教育の関係者には一様に高く評価されているという。特に、エデュケーターにとっては、自身が活動をするうえでの指針を示したものとして捉えられているようで、エデュケーターの専門性や専門職としてのアイデンティティを確認する際の指標となる内容になっているとのことである。また、館長やキュレーターに教育普及活動の意義やエデュケーターの職務に対する理解を深めてもらううえでも、この「品質規準」が策定されたことの意義は大きいという。

一方で、この間のエデュケーターに期待される職務内容の変化などを受けて、「品質規準」の改訂の必要を感じている BVMP の会員も少なくないようである。例えば、近年では、エデュケーターの職務でも、マネジメントに関わる内容のものが非常に多くなってきているという。人事管理や、展示の運営や評価、スタッフの研修などを、エデュケーターが職務として担当することが一般的になってきている。「品質規準」においても、そうしたマネジメントに関する記述を増やして欲しいという要望がある。エデュケーターをめぐる環境の変化に対応する形で、また、国外での状況なども参考にしながら、今後、「品質規準」の内容に修正や加筆をしていく必要も指摘されている。

講義受講日

- ・ Ms. Beatrix Commandeur: 2014 年 10 月 3 日(金)、ドイツ連邦共和国歴史博物館にて。

4. ドイツで訪問した施設等について

ドイツプログラムにおいて視察の機会があった博物館等について、施設の概要や活動内容について個別に報告する。各レポートは派遣事業参加者7名が分担して作成した。レポートのタイトル(訪問先)と執筆者の氏名は以下のとおりである。

<訪問先>

- ① ルール博物館(エッセン)
- ② ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)
- ③ ケルン市博物館顧客サービス、ルートヴィヒ美術館
- ④ ローマ・ゲルマン博物館(ケルン)
- ⑤ ナチドキュメンテーションセンター(ケルン)
- ⑥ ホルンホルトハウス博物館(ピーティヒハイム=ビッシンゲン)
- ⑦ ミュンヘン・ユダヤ博物館
- ⑧ バイエルン博物館アカデミー(ミュンヘン)
- ⑨ ドイツ博物館(ミュンヘン)
- ⑩ バイエルン王博物館(フュッセン)
- ⑪ ノイエ・ピナコテーク(ミュンヘン)
- ⑫ ミュンヘン博物館教育センター
- ⑬ ヴィラシュトゥック美術館(ミュンヘン)
- ⑭ その他の訪問先
 - ・ノイシュヴァンシュタイン城
 - ・バイエルン州における非州立博物館のための州政府事務所

<執筆者>

岩本二郎
 加古川茉莉恵
 朴 鈴子
 加古川茉莉恵
 町田恵美
 岩本二郎
 古川順子
 寺島洋子
 岩本二郎
 寺島洋子
 朴 鈴子
 古川順子
 町田恵美

 加古川茉莉恵
 大木真徳

①ルール博物館(エッセン)

Ruhr-Museum

訪問日時: 2014 年 10 月 2 日(水) 10:00~18:00

対 応 者: Ms. Angelika Wuszow

Mr. Tom Stern

Ms. Dr. Esther Guderley



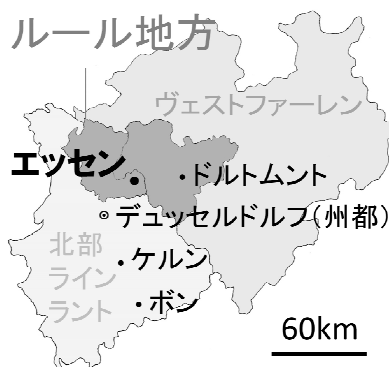
旧洗炭場を利用した常設展示室の外観

1. 館の概要

ルール博物館は、世界遺産「ツォルフェアイン炭鉱業遺産群」の中にある、ルール地方の歴史・文化および自然史を扱う総合博物館である。入館料は大人€ 10 子ども € 7 で、毎年 15 万~20 万人の来館者が訪れる。110 年の歴史を誇り、元々はエッセン市立の施設として別の場所にあったが 1993 年の炭鉱の閉鎖に

ともない 2007 年から遺産群内に移転し、2010 年に旧洗炭場を利用した現在の常設展示室が開館した。運営母体は現在では「ルール博物館財団」であり、財団の出資者は半分がエッセン市で、もう半分はノルトライン=ヴェストファーレン州と、それから LVR (Landschaftsverband Rheinland ラインラント地方連合=ラインラント地方の市町村の連合体) から構成される。

2. 地域の特色と世界遺産「ツォルフェアイン遺産群」について



州内におけるルール地方の位置

ノルトライン=ヴェストファーレン州は北部ラインラントとヴェストファーレンの二つの地域からなるが、石炭の産地として名高いルール地方は、その両方にまたがる面積約 90km × 50km ほどの工業地域である。当地は、第二次大戦後はドイツのみならず、ECにおける経済の牽引役となり、“ドイツの心”とも呼ばれてきた。

1847 年に実業家がエッセン市北部にあった 14 ヶ所の隣接する炭鉱をまとめて買収し、当地にあった自由貿易圏の名にちなんで「ツォルフェアイン」と名づけた。パウハウスの影響を受けたという第 12 採掘坑が稼働を始める

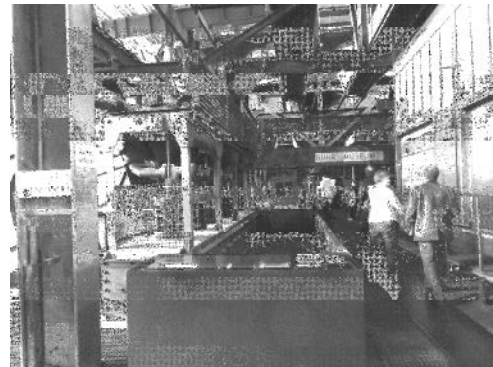
と、1 日に 12000 t というヨーロッパ最大の生産量を誇ったが、1993 年までに全施設が操業を停止し、その役目を終えることになった。当初、更地にすることを望んだオーナーと、歴史的遺産を保存することを主張した当局との相違が表面化し、最終的には州が市を支援して所有権を買取り、市場の原理の中で運営してゆくための会社を設立して、そこへ譲渡することになった。2001 年には周辺一帯の約 100ha がユネスコ世界遺産に登録されたが、それと平行して策定された総

合計画(マスタープラン)では、ただ過去を保存するだけでなく未来指向であること、すなわちデザイン、文化、教育、そして観光が融合した多目的ビジネスの中心地として、世界一の地域を目指すことがうたわれた。そして、そのための礎として、①ルール博物館の移転、②デザインと建築のための公開討論会の開催、③デザインとマネジメントのための学校の設置、そして④産業景観の公園の整備、が計画された。旧洗炭場にルール博物館が移った他、旧ボイラー棟にはノルトライン＝ヴェストファーレン・デザインセンターが置かれ、そこではデザインの優れた工業製品や建築を評価する国際的な「レッド・ドット賞」を設立し、その受賞製品を展示する美術館も置かれた。学校は、新たに建物が造られ、エッセン市にあるフォルクヴァング芸術大学のデザイン研究室が置かれるようになった。さらに、敷地内の採掘後の土砂や岩が捨てられていた場所には植生が回復しており、公園として植物等の自然観察も行われるようになった。また、遺産群を高い場所から見渡すことができるように観覧車が設置されたり、夏にはプールもオープンしたり、冬は旧コークス製造施設内の人工池がスケートリンクとして開放されたりして市民の憩いの場となっている。さらに、歴史的建築物内で食事のできるレストラン「ツォルフェアアイン CASINO」もオープンした。

3. 展示

(1) 常設展

常設展の面積は合計約 6000 m²にも及ぶが、建物内には現在でも洗炭機が残されており、機械と機械の間に資料が配置されることで、工業地帯の博物館という雰囲気がより一層伝わってきた。当館の動線は、人間も石炭と同じように工場内を動くように設計されており、最初にエスカレーターで一気に4階まで上った後、3階→2階→1階と下がってゆく。展示のコンセプトは「3つの“G”」で、3階



現在も機械が並ぶ、常設展示室内の様子

(写真提供: 寺島洋子氏)

「Gegenwart(現在)」、2階「Gedachtnis(記憶)」、1階「Geschichte(歴史)」をテーマに、採炭夫の生活という「現在」からスタートし、「記憶」ではローマ時代、ヘルヴィック、中世、大航海時代、ルネサンス、活版印刷、プロイセン、とドイツの歴史が順番に紹介され、さらに、自然史でも現生の動植物だけではなく、地域が産業化される前の、森林が広がっていた頃に生息していたと考えられる野生動物の剥製や、石炭の採掘中に出土した化石も多数展示されている。そして、最後の「歴史」では、ルール地方の産業を扱い、再び現代へ戻ってくるという展示構成になっている。

(2) 企画展

旧洗炭場跡から少し離れた旧コークス製造施設では、ゾーリングゲン産業博物館との共催による企画展「1914」も開催されていた。今からちょうど100年前にあたる1914年は第一次世界大戦が勃発した年であり、ドイツにとっては歴史の曲がり角となった年でもあった。そんな当時のルール地方を物語る資料の数々が機械の間に展示されていたが、19世紀末から20世紀の初頭にかけては飛行船や自動車といった革新的な発明が数多く誕生し、鉄道も発展して新しい駅も次々と

できた時代だった。その中では数多くのユートピア像が生まれた。たとえば高層建築はユートピアの重要な要素であったが、その一方で産業化には公害など悪い影響があることも分かっていたので、自然に帰るというユートピア像も生まれた。さらに階層・階級の無い社会というユートピア像もあり、社会主義のアイデアが誕生したのもこの頃であった。1898年にはウェルズの『宇宙戦争』も出版されており、そこでは資本主義への批判として、恐ろしい未来像をイメージした人もいた。

4. 教育普及活動について

(1) 人員配置と教育普及の位置づけ

この館の正職員は49名であり、その中には研究者も含まれているが、研究者は教育普及活動には直接関わっていない。教育普及の担当者は3名の常勤職員の他に、主にガイドに携わるフリーランスが40名いる。ルール地方は教育水準の高い地域ではなく、移民も多かったため、博物館は元々、物を見せるだけでなく教育施設として考えられてきた。ただし現在では、石炭が少なくなるにつれて人口も減少し始めているが、その中で大学もでき、地域の生活も変わってきている。



校門まで迎えにきて実物資料を運ぶ児童
(プレゼンテーションのスライドより)

(2) 学校向けの出張プログラム

ルール博物館では2007年の移転後、2010年の開館までに3年間の休館期間があったため、その間、エデュケーターたちは学校での教育活動を展開した。そこではいわば「博物館セット」のような形で実物資料を学校へ持参し、児童がそれを実際に扱いながら教室内に展示を製作するという授業が行われた。実施したところ大変好評で、休館期間が終わった後も継続することになった。現在では、年間に25のクラスで実施している。これを実施したことによって子どもたちは、学校へ来てくれるから行かなくてもよいと思うのではなく、むしろ、博物館に行きたいと思うようになったという。そして、お互いに訪ね合う対等なパートナーシップを構築することができた。

(3) 来館者向けのプログラム（バッグの貸出し・ワークショップ・お誕生日会）

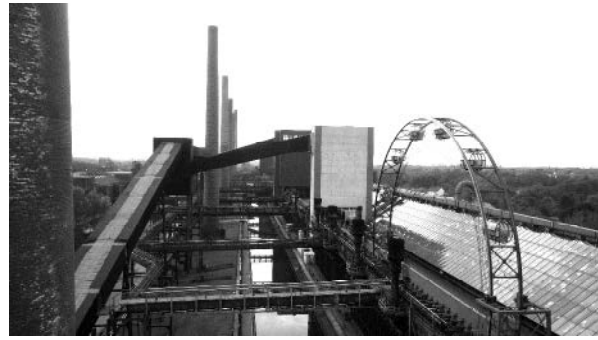
来館者に対しては、まず、「ルール博物館の謎解き旅行」と題した家族向けのプログラムを用意している。これは展示の中から18ヶ所のチェックポイントを選定し、展示室を周りながらチェックポイントにある課題をクリアしてゆくというものである。そして、「謎解き道具」が入ったバッグを1回€5で貸出し、来館者は、チェックポイントの書いてある地図、課題の書いてあるノート、展示に関連した実物資料等といった次々と出てくる道具に興味をかき立てられながら展示室を回ってゆく。

また、ワークショップも実施しているが、その中でも今回紹介して下さった草木染めのプログラムでは、遺産群内の公園を活用した野外での活動が行われている。そこでは参加者が公園内に自生している野草を採取し、室内に持ち帰ってから実際にそれを染料として使用してみる。さらに、この博物館では子ども向けのお誕生日会も行っているが、そこでも会場を提供するだけでなく、会のためのワークショップのプログラムをいくつか用意しており、1回€80~120で利用できる。

5. 所感

(1) 遺産群の保存について

旧コークス製造施設にある観覧車は、世界遺産として登録されるためには撤去を要求されたという。しかし、観覧車を新設したという事実からは、観光客誘致のための投資も積極的に行っているという印象を受けた。個人的には、収入を得な



旧コークス製造施設の企画展会場から見える観覧車

がら整備や保存を進めてゆくという経営手法は、今後の大きな流れになってゆくのではないかと思う。話は若干それるかもしれないが、かつて地球環境問題をなんとかするために、先進国の人たちが熱帯雨林を立入禁止の保護区にしようと考えたことがあった。しかし、世界で最も生物の多様性が高い熱帯雨林の隣に住むのは、世界で最も所得の低い人たちだったため、結局、彼らの生活水準を上げることができなければ、焼き畑農業を止めることはできなかった。そこで現在では、エコツーリズムや遺伝子資源からの新薬開発など、熱帯雨林そのものから現地住民が経済的利益を上げることのできる仕組みを開発することが、もっとも現実的で持続可能な自然保護であると考えられている(新環境主義)。しかし、先進国の遺産でも同様に、保管に予算がかかるだけなら、残念ながら市民の理解を得られるとは言い難いのである。

(2) 博物館の教育普及について

この遺産群のマスタープランがユニークなのは、目的の一つに教育がうたわれている中で、遺産群内に大学のキャンパスを設置し、さらに、レッド・ドット賞というデザインコンテストを設けている点である。つまり、遺産の活用によって目指すビジネスというのは単なる観光産業だけではなく、そこでは工業地域として、デザイナーをはじめとする人材を育成し、地域のブランドや競争力を高めてゆくことも視野に入れられているのである。教育は、ただ実施すること自体が目的であるかのように誤解されてしまうと形骸化を招き、本当に効果があるのか分からないようなことにもなりかねない。けれども、ツォルフェアインの場合は地域の産業につながるデザインという明確な方向性が設定されており、決して成果を意識しない投資というわけではなかった。その中で、100年以上の歴史を誇る博物館にも従来とは異なる在り方が求められているはずである。これからは博物館も、ただ保管するだけでなく、どのように人を育てるのかという発想がより重要になるのかもしれない。しかし、子どもが実際に展示を作ってみるという活動では、配置や展示手法を自分たちで考えてみることは面白い取り組みであるし、化石をはじめとする様々な時代の遺物に直接触れる体験は想像力を豊かにし、そこからまたユニークなデザインも生まれるに違いない。また、学校との互惠関係を構築し、地域に根ざした活動ができていることも、保存に対する市民の理解を得る上で不可欠である。教育の方向性として、情報のインプットだけでなく、遺産のような教育資源を活用し、そこから何か創造的な方向に進むことは必要である。それこそがまさに「未来志向」なのだと思う。その中で、エデュケーターの重要性はこの先、さらに高まるのではないだろうか。

(岩本二郎／和歌山県立自然博物館)

②ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)

Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland

訪問日時: 2014 年 10 月 3 日(金)10:00~18:00

対 応 者: Ms.Dr.Simone Mergen (教育部長、2014 来日メンバー、BVMP 支部長)

1. 館の概要

当館は、1945 年から現在までのドイツ連邦共和国の歴史「現代史」を扱った博物館である。

特に中心となるのは、東西分裂と統一の歴史である。展示空間にはそのシンボルである“壁”が印象的に組み込まれている。展示やガイドでは「4:2:1」がキーナンバーとなる。4 は敗戦後、米、英、仏、ソ連の 4 か国による分割占領、そして 2 は冷戦下での東西分裂、1 は統一を、それぞれ表す。

現代史をすべての人にわかりやすく伝えるため、オブジェクトとコミュニケーションを活用し、来館者が中心となって主体的に鑑賞できる活動を行っている。展示のテキストは 8 人の学者が編集と校正を行い、内容については学者の顧問会で決める。内容について政府の介入はないとのこと。ガイドは、これら現代史と教育普及について、ターゲットグループに合わせたやり方で行う。

2. 来館者が中心 ～オブジェクトとコミュニケーション～

(1) ガイドの基本

当館の教育部長である Simone Mergen 氏によるガイドについての説明を、実際に常設展示室をまわりながら受けた。Simone 氏からは、考える機会や見方によって変わる現代史という歴史を、すべての人にわかりやすく伝えるため、体験し、考え、ディスカッションする、これらのことが、来館者が中心となって行われるようにガイドをしているという点が強調された。

(2) オブジェクトとコミュニケーション

来館者が中心となるためのガイド、その核となるのはオブジェクトとコミュニケーションである。

コミュニケーションについては、ガイドのはじめにまずエントランスでブレインストーミングを行う。来館者にドイツの現代史について思いつくものごとをどんどん挙げてもらう。他の人の意見からまた新たに思いつくこともある。最初から決まった内容のガイドを行うのではなく、そこで挙げられた来館者の記憶にそって現代史のガイドを進める。また展示室の天井はかなり広々としたガラス張り、太陽光が降り注ぐ明るい空間となっている。オブジェクトにはよくないが、コミュニケーションを促す自然光をあえて取り入れている。(写真 1)

次にオブジェクトについてである。Simone 氏の言葉を借りれば、来館者に伝えたいことをオブジェクトに語ってもらい、来館者とコミュニケーションさせる。(オブジェクトの持つ情報、メッセージを、来館者が感じ取り、自ら考えるというコミュニケーション。)

オブジェクトの特徴としては、リアルであり、身近であるということ。またオブジェクトの持つ情報

を補う、あるいは発展させるためインタラクティブツールを活用している点が印象的であった。

3. 企画展『儀式かピクニックか』

東西ドイツ統一を祝う記念日 10 月 3 日から開始される企画展。開場式に参加し、その後展示会の見学を行った。

まず印象深いのはタイトルである。『Festakt oder Picknick?』（儀式かピクニックか）とは、つまり 10/3 という記念日を、東西ドイツ統一を祝う行事等に参加して過ごすのか、あるいは祝日として家族とピクニックをして過ごすのか、あなたはこの記念日をどう過ごすのか！？ という問いかけである。その問いを受けた来館者がこの展示会を機会に東西統一の歴史にふれて考えてみるきっかけを得ることができる。

(1) 開会式の様子

開会式は館内にある舞台ホールで行われた。司会者がユーモアを交えながら進行し、企画展の功労者を紹介する場面では、該当する女性とそのお子さんも登壇し、参加者から温かい拍手を受けていた。また式の最後には、壇上に用意されたドイツ国旗をあしらった巨大なケーキカットのパフォーマンスもあり、その後ポップなミュージックが流れる中、出席者で切り分けたケーキとコーヒーをいただくという、さながらちょっとしたパーティー会場のような雰囲気だった。切り分けた国旗(のケーキ)をシェアするという趣向は、本展示会への参加機運を高めるユニークなパフォーマンスに感じられた。

(2) 展示会の感想

まず想像と違ったのは音声や画像を素材に、インタラクティブツールをふんだんに使った、スタイリッシュな展示空間が広がっていること。企画展のスペースとしては決して広くなく、むしろ路地裏を思わせるような狭い通路を両脇の壁に様々なツールが埋め込まれている。表にはそれが何についてかという簡単な説明のみで、例えば扉がついているものなら、それを開くか開かないか、イヤホンであれば、手に取って聞か聞かないか、は来館者の判断に委ねられている。

その他、日めくりカレンダー風の持ち帰り可能な資料（表に日付が印刷されており、めくると裏にその日起こった歴史的できごとの説明が書いてある。切り取って持ち帰ることができる。）や、展示会場の最後に設けられたメッセージボード（ミュージアムからの問いかけと、来館者が回答（返答）を書いてはるための付箋が用意されている。）など来館者が主体的に展示会に入り込む工夫が様々見られた。このボードは一見すると単なる感想アンケートのようだが、付箋なので気軽にひとこと書いて貼っていけるし、ミュージアムからの問い「... und was machen Sie am 3.Oktober?」（そしてあなたは 10/3 に何をしますか?）という、具体的でしかも展示会の核心についての問いなので、その回答（返答）で展示会の主旨をどう受け止めたかという来館者の理解度を図ることもできる。（写真 2）来館者が主体的にオブジェクトとコミュニケーションを通して現代史を知る、考えるという、当館のやり方を体現した展示会であった。

3. 教員向けオンラインページ『Lemo』

当館で行われている教育普及関連のプログラムについては過去の報告書ですでに紹介されているので、①～③については確認と補足程度にふれる。①9～10才の子どもを対象とした誕生日会、オーディオガイド等。②青少年を対象としたプログラム「Teen Group」。主体的に博物館と一緒にムービーやロゴを作る活動。ボン周辺の学校の先生に呼びかけて参加者を集めている。③ワーキングノート。ガイドツアーに参加せず自分たちで展示を見て答えや考えを書き込んでつくるノート。デザインも工夫されていてジャーナリストが使うような縦開きの“かっこつけた”デザイン。

④次に過去ふれられていないものとして『Lemo』という教員向けオンラインサービスについて紹介する。Lemoは、Lebendiges museum on lineの頭文字をとったもの。(いきいきとしたミュージアムの意) オブジェクトの説明やそれがミュージアムのどこにあるか、また授業での使い方などを紹介し、教員に向けてミュージアムの活用方法を具体的に紹介、提供するサービスである。

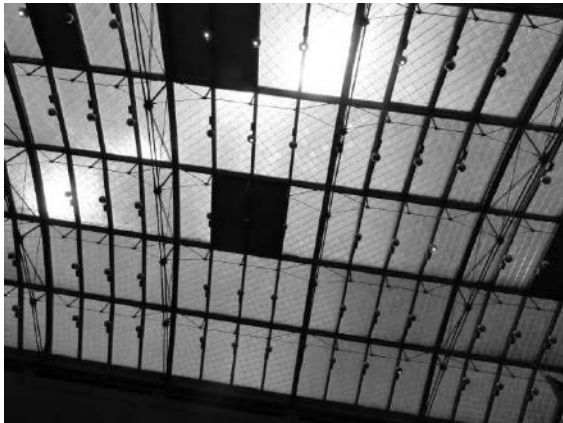


写真1 コミュニケーションを促す自然光を取り入れる天井



写真2 問いかけボード

5. 全体の感想

歴史、とりわけ現在の私たちの暮らしとまだ完全に切り離されていない現代史を伝えるというのはとても難しいと思う。Simone氏のお話しにもあったように、立場や見方が変われば歴史もまた人によって変わるからである。そのような難しい命題を抱えつつ、すべての人に現代史をわかりやすく伝えたい、来館者に主体的に感じとってもらいたい、そのためにオブジェクトのもつ情報、メッセージをコミュニケーションを通して最大限に活かしたいという情熱が伝わってきた。またオブジェクト単体でなく、それらの配置や置かれる空間全体から、ドイツの現代史の持つ空気を体感する博物館であると感じた。本事業で唯一3年間通して訪問した館であったが、具体的な教育普及活動の紹介はもちろんのこと、この博物館が一番中心としている来館者中心にという考え方にふれることができ大変有意義であった。それは今後私たちが教育普及活動に取り組んでいくときに振り返るべき重要な考え方のひとつであると思う。

(加古川茉莉恵／(一財)北方文化博物館)

③ケルン市博物館顧客サービス、ルートヴィヒ美術館(ケルン)

Museumsdienst Köln, Museum Ludwig

訪問日時: 2014 年 10 月 4 日(金)9:00~13:00

対 応 者: Dr. Matthias Hamann (ケルン市博物館顧客サービス/ディレクター、2014 年度来日)

■ケルン市博物館顧客サービスの概要

ケルン市には約 30 館のミュージアムがあり、そのうちケルン市立のミュージアムが 10 館、プライベートのミュージアムが 20 館ある。博物館顧客サービスはケルン市の行政機関の一部であり、市立 10 館の教育普及事業と、一部のミュージアムの広報も担っている(10 館中 6 館は自館に広報担当者がいるので、それ以外の 4 館に該当する)。美術と応用芸術が 4 館、歴史と文化史が 4 館、ヨーロッパ以外の文化を紹介する 2 館のミュージアムがあり、約 100 万人の市民と、市外から訪れる多様な層に向けて、教育普及プログラムやイベントを企画、実施している。約 10 年前までは、プログラムの利用者は来館者全体の 7%に値する 8 万人だったが、現在に至っては 15%の 16 万人にまで成長し、彼らの活動の成果がこれらの数字で手に取るようにわかる。ドイツ語で「Wir machen Programm」、日本語に直訳すると「私たちはプログラムを作ります」というスローガンを掲げて活動を行っており、その意味は次の通りである。まず「私たち」にはチームで活動する一体感を、「プログラム」には一つの目標、目的のために考え作り出すということ、「作る」には積極的に行動するという活動への姿勢を表している。このスローガンの下、ディレクターのマティアス・ハーマン氏と 23 名のスタッフ、さらにプログラムに応じて派遣される約 130 名のフリーランスのエデュケーターたちが活動している。

博物館顧客サービスに勤務する 23 名のうち、10 名はエデュケーターとして各ミュージアムに出向し、ミュージアムに常駐しながら教育普及事業に携わっている。主に、ミュージアムの特性に合わせたプログラム開発に従事している。マティアス・ハーマン氏は、市内 10 館に出向しているエデュケーター 10 名と一週間に一度は必ず面談をし、各ミュージアムにおける教育普及活動の品質の維持、改善にも精力的に取り組んでいる。さらに月に一度は、10 名のエデュケーター全員が集まって議論するミーティングの機会も設け、お互いに問題点を探り合ったり、評価し合うようにしている。その他、事務所には秘書が 2 名、財政管理に 2 名、広報担当が 4 名、プログラムの参加予約などを管理する担当者が 5 名いる。

■プログラムの参加予約の管理業務

ケルン市立の各ミュージアムで提供しているプログラムへの参加は、博物館顧客サービスで予約を承っている。その予約受付の担当者が 5 名いるが、彼らの役割が当機関の中で重要な位置にあるように見受けられた。彼らは、各館が提供するプログラムの内容を熟知し、利用者の要望に応じて、最適なプログラムの提案と、人材を用意する必要がある。日本のミュージアムでは

通常、プログラムへの参加を希望する際、ミュージアムの担当者へ直接連絡する場合がほとんどだが、ケルン市ではこの5名のスタッフが10館のプログラムの予約や利用に関する相談を行う。どのプログラムへいつ、何人参加するかなどが決まれば、担当者が訪問団体の詳細について各館に連絡し、対応できるフリーランスのエducatorをそのミュージアムに派遣する。このような体制は、各担当者が様々な業務を横断するのではなく、一つの業務に集中して取り組むことができるとても効率的なシステムと言える。一方で、各館の教育普及活動に対する考えや方針がどのようなものか把握することが難しいようにも捉えられ、当機関と各館との間に、教育普及事業の執り行いにおいて齟齬がないかどうか懸念される。

■プログラムについて

ケルン市博物館顧客サービスでは、日本のミュージアムでも共通して行われているような、ガイドツアーや創作系のワークショップ、その他様々なイベントを企画、実施している。それに加え、「プロジェクト」というあるテーマに基づいて長期的に取り組むプログラムも行っている。プロジェクトは、ほとんどの場合、学校や社団法人、教会など特定の団体とパートナーシップを結んで実践することが多い。新聞やSNSなどを活用して個人をプロジェクトの参加に呼びかけたこともあったそうだ。テーマや期間は様々で、長いものだと半年ぐらいかけて行うこともある。

■その他の活動

上記の他、フリーランスのエducatorの育成セミナーを実施したり、フィードバックを積極的に行うなど、エducatorの品質向上にも努めている。また、ウェブサイトやニュースレター、ターゲット層に合わせた情報紙など、ミュージアムの基本情報のみならず、展覧会やそこで受けられるプログラムやイベントの広報活動も盛んに行っている。対象はミュージアムに来る人に限定せず、まだミュージアムに来ていない人、興味を持っていない人など、ミュージアム人口ではない人たちに向けても情報をどんどん発信している。

■ルートヴィヒ美術館の概要



ルートヴィヒ美術館は、20世紀美術と現代美術を所蔵する、ケルン大聖堂のすぐ隣に位置するケルン市の近代美術館である。芸術と音楽を結び付け、建物自体は音楽のコンサートも行える施設も構えた複合施設として機能している。1976年、ルートヴィヒ夫妻が独立した美術館を建設することを条件に、夫妻が所有していたアメリカン・ポップアートのコレクションをケルン市に寄贈した。（現在においては、アメリカ国外最大のアメリカン・ポップアートのコレクションとして評価を得ている。）1986年、既に存在した市立美術館ヴァルラフ・リヒャルト美術館とルートヴィヒ美術館、二つの美術館を含む建物がオーブ

ンしたが、1994年に今の建物にルートヴィヒ美術館が独立し、それを機にルートヴィヒ夫妻はピカソ作品90点をケルン市に寄贈した。夫の死後、2001年の美術館再オープンの際には、婦人がさらに774点のピカソの作品を寄贈し、ルートヴィヒ美術館は世界でもピカソ作品の膨大な所蔵数を誇るようになった。それ以外に、ロシア前衛美術、シュールレアリスム、ドイツ表現主義の作品などをコレクションに持つ、ヨーロッパの代表的な近代美術館として活動している。

当美術館は、ケルン市博物館顧客サービスがエドゥケーターを派遣している施設のひとつであり、ここで催されるガイドツアーやワークショップ、イベントは全てそのエドゥケーターにより考案され、プログラムの参加者はセンターで受け付ける。今回の訪問では、センター長であるマティアス・ハーマン氏の指導により、ルートヴィヒ美術館で行われているワークショップをいくつか体験する機会を得た。そのうちの数点を紹介する。

■ ルートヴィヒ美術館でワークショップ体験



1) 3~4名のグループになったあと、担当者が各グループに感情や事象などを表すことばを伝え、そのことばのイメージに合う作品を探した。与えられたことばが何かは言わずに、選んだ作品の前でそのことばを表現するパントマイムを行った。他の参加者は、パントマイムと作品の両方をしっかり見て、グループに与えられたことばが何かを考え当てた。



2) 鉄道が鉄橋をくぐって力づくよく走る様子が描かれた作品を全員で鑑賞した。作品の中の様々な要素（人、橋、列車、植物...）を出し合い、各々その要素から聞こえてきそうな音（シュツシュ、ポー、口笛...など）を声で表現した。最初は1人から始まり、徐々に人数が増え、最後は全員で大合唱となった。音が加わることで、作品により臨場感が増したようだった。このワークは抽象絵画では難しいとの指摘もあった。



3) 写真コレクションの部屋に移動し、植物・人物・動物の3つのカテゴリー、それぞれ約15点ずつ縦横ランダムに配置された展示を見た。各カテゴリーに分かれて、15点に共通することば(例えば、悲しみ、とげ、平和、老衰など)を考えた。数分後、理由を添えて選んだことばを発表したが、作品一点一点を個別に鑑賞するのではなく、展示全体を包括的に鑑賞する工夫のある活動だった。

ルートヴィヒ美術館のホームページによると、他にも多種多様なプログラムを提供している。様々な来館者層に応じたギャラリーツアーや、創作系ワークショップ、未就学児用に Family Suitcase (ファミリー・スーツケース) という色、形、素材を感じとるためのキットが入ったスーツケースの貸出も行っている。その中でも、Kunst:dialoge というプログラムは一般来館者向けに毎週末行われており、美術史専攻の学生たちのナビゲーションによって、作品について様々な角度から会話を広げる。ほとんどのプログラムがお昼以降に予定されているので、実際の様子を伺うことはできなかったが、週末のみならず平日にもたくさんのプログラムが用意されており、教育普及活動への熱意が感じとられた。

(朴鈴子／京都国立近代美術館)

④ローマ・ゲルマン博物館(ケルン)

Römisch -Germanisches Museum

訪問日時：2014 年 10 月 4 日(土)14:00～17:00

対 応 者：Ms. Dr. Susanne Wischermann（フリーランサー、研究者）

1. 館の概要

当館はケルンの象徴である大聖堂のすぐそばに立地する考古学博物館である。ケルンの街はローマ時代の街の上に成り立っている。戦時中、防空壕をつくるための工事中に発見されたモザイク画を修復し、それを展示の核として戦後に開館された博物館である。

同日、午前中にルートヴィヒ美術館で体験したワークショップはアートミュージアムでの創作活動であった。午後の当館でのワークショップは、考古学博物館での想像活動である。ここで使われるものはローマ人の服であるが、レプリカではなく再現された本物である。遺された資料をもとに観察、研究、実験を行い服を再現する。「再現物」とその「再現過程」からわかることが、いわばひとつのオブジェクトとなって来館者へ届けられている。

2. 「服の再現」というオブジェクト

このたび体験したのは、再現されたローマ時代の服を着て当日の習慣や文化について、想像しながら考察するというもの。日本団より代表で2名が着用した。1名はカイザー（帝王）の服である「トーガ」とその下に「チュニック」を着用。もう1名は比較的裕福な家庭の女性（妻）の服である「パラ」とその下に「チュニック」また「靴」も着用した。

当時の服を着る、という体験ワークショップは日独問わず他の博物館でも例が見られるが、ただイメージするだけならレプリカでもできる。一方当館では「再現された服」そのものの重要性はさることながら、「再現する過程」からわかったことを参加者に伝えることでより深い理解に導くことが重要である。

再現する過程には、遺されたものの観察、研究、そして再現のための実験がある。例えば、レリーフに彫られた像を観察することから、どんな人物がどんな時に着たのかがわかる。（写真1）また科学的な研究からはどんな素材を使っていたのか、また実験からは、いわゆる「やってみないとわからない」ことがわかる。例えば、カイザーの



写真1 パラを着た女性の描かれたレリーフとの比較

腰ひもはどうやっても自分ひとりでは結ぶことができない後ろにある。これは、カイザーという人物は身分が高く、身支度は人にさせるから自分でする必要がない、という発見につながる。「服の再現」という一連の作業がひとつのオブジェクトになるのである。(写真2)

今回着せていただいた服は、男性用が 30 着くらい、女性用は 15 着くらい、着る人の平均身長は 140 cmくらいとのこと。30 人クラスで参加する場合は、そのうち4~5 人が代表して着ることになる。

このたび女性用の服を着せていただいたが、人間の基本的な生活環境である「衣・食・住」のひとつからローマ人の暮らしに想いを寄せることはとても楽しい時間だった。きっかけがあれば誰にでも想像することができる。そのきっかけとして「再現」というオブジェクトの活用が有効的に広まっていくことを期待したい。



写真2 カイザーがトーガの下に着るチュニック
(自分では縛れない)

(加古川茉莉恵／(一財)北方文化博物館)

⑤ナチドキュメンテーションセンター(ケルン)

NS Documentation Centre

訪問日時: 2014 年 10 月 6 日(月)10:00~11:30

対 応 者: Ms. Barbara Kirschbaum(エデュケーター)

この日は休館日だったが、Dr.Matthiasの配慮で急遽見学することが可能となった。

1. 館の概要

元々は時計の卸売をしていた商人のプライベートハウスだった建物を1935年から10年間、ケルンのゲシュタポ(秘密警察)として使用。地上階の住居部分を事務所、地下を10部屋の刑務所としていた。米軍の侵攻により周りのほとんどの建物が破壊されたが、この建物は現存する歴史的資料としてその姿を留めている。

現在、ケルン市の施設として運営。常設展示室、特別展示室、ライブラリー施設を完備し、体験者のオーラルヒストリーを映像で紹介するなどメディアを活用し、展示方法にも様々な工夫がされている。インターネットでも100人以上の聞き取りも公開しているという。

地下室には無数の落書きがあり、1房に1人以上収容されていたことが伺える。強制収容された外国人が大半を占め、フランス語、ロシア語、ポーランド語、英語などが見られ、日記や恋人へのメッセージが記されている。

18人いるスタッフは主に歴史学者で、証言者の発言を記録、研究している。今回案内してくれたMs. Barbaraは教育普及担当として、20人程度のフリーランサーと共に活動しており、フリーランサーの研修なども行う。



展示風景、Ms. Barbara Kirschbaum(左)



地下の様子

2. 教育普及活動

オーディオガイドの貸出しの他にガイドツアーも行われている。ドキュメント性の強い展示のため、学校に向けたツアーでは、フリーエントランスから出発する際、展示室に入りたくない生徒は入らなくてもよいとしている。案内された教育普及の一室は、天井にいくつものオブジェが吊り下げられ、壁一面に収納棚が敷き詰められていた。入った瞬間の驚きから好奇心を起こすための仕掛けとして機能している。コンピューターを使用せず実物を展示することで、身近な物を通して、

ナチ時代にも生活があったことを知らせる意図を持つ。どういう時代であったかを話し合うことで、歴史を過去に置き去らず、インタラクティブな思考を促す場となっている。

ドイツには「悲しいことは繰り返さない」という言葉があると聞いた。悲惨な経験を踏まえ、現在、そして未来につなげる作業を学びのなかから見出したい。

(町田恵美／沖縄県立博物館・美術館
[指定管理会社文化の杜共同企業体])



ワークルーム

⑥ホルンモルドハウス博物館(ビーティツヒハイム=ビッシンゲン)

Stadmuseums Hornmoldhaus

訪問日時: 2014 年 10 月 7 日(木) 9:00~18:00

対 応 者: Ms. Regina Ille-Kopp(館長、2013 年度来日)

Ms. Maren Lippitz(学術担当職員)

1. 館の概要

ビーティツヒハイム=ビッシンゲン市立ホルンモルドハウス博物館(以下、ホルンモルドハウス博物館と記す)は、同市の歴史的景観保存地区にある、同市の歴史と文化について紹介する博物館である。ルネサンス期の 16 世紀に建てられた、町の有力者セバ스티アン・ホルンモルド氏の邸宅



ルネサンス期の建築物を修復した博物館の建物

が修復され、1989 年に博物館として開館した。同市の歴史と文化以外の唯一の分野として、明治期のお雇い外国人医師、ベルツにちなんだ日本に関する展示も行っている。運営費は 100%市が負担しており、入館は無料。

2. 市の概要

ビーティツヒハイム=ビッシンゲン市は、南西部のバーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュツットガルト市から北へ 23km に位置する人口 4 万 2 千人の都市である。市の起源は 1364 年に遡り、中世期のたたずまいを残す景観保存地区がある。当地区は決して規模の大きな都市ではないが、その分、歩ける範囲内



ビーティツヒハイム=ビッシンゲン市の位置

にコンパクトにまとまっており、博物館と併せて見学することができて大変便利である。その一方で、当地は工業が盛んな地域でもあり、シュツットガルトにはメルセデスとポルシェの本社があって、周辺にはその関連工場が多数あり、雇用や財政の面でも国内で最も豊かな地域の一つであるといわれる。さらに、東京大学医学部の教師や宮内省侍医(明治天皇の医師)を勤めたエルヴィン・フォン・ベルツの出身地でもあり、彼にゆかりのある群馬県草津市の姉妹都市でもある。

3. 博物館教育の手法

(1) 学校での来館への対応

この博物館は小学校の来館が多く、学校を対象にしたプログラムが数多く実施されている。ここでは元は教員であった館長が15年前からエデュケーターの指導に当たっている。学年は1年から12年生までがここを利用しているが、3年生だけは同じクラスが毎週1回来館するような連続したプログラムを実施しており、5～6週間かけて、毎週火曜日の午後2時から3時半の間に実施されている。学校への情報発信は、教員向けの説明会を開催している他、教員が個人で問い合わせることもある。そこでは、州の学校と幼稚園のカリキュラムに応じたモジュール型のプログラムを用意しており、教員が自分の裁量でそれらを組み合わせながら授業を組み立てることができるになっている。たとえば、ローマ時代の展示室で解説を聞いた後でローマ人が行っていたゲームも作るワークショップも行い、遊んでみたりもするが、子どもは実際に使ったり試したりしてみることが好きであるため、ガイドツアーだけでなくワークショップなどの創作活動を伴うことが多い。また、この他に、当時の服を着てみるという体験も好評で、ローマ時代やルネサンス時代の他、和服もあった。日本に関する展示ではこの他にも、箸を使って食べてみることや、日本の伝統音楽を聞いてみる体験が行われるということだった。このように、子ども向けのプログラムでは、展示に興味を持つためのきっかけを重視しており、そのためには、実際に自分で体験してみる機会を提供することに力を入れていた。さすがは教員出身の館長とあって、児童の気持ちをととてもよく理解されていた。さらに、収蔵庫の見学も行われていた。地下には、かつてワイン蔵だった地下室が広がっており、現在ではそこが市のアーカイブとして利用されている。学校での来館者を案内するコースの中にはこのアーカイブへ入るものもあり、そこではルネサンス期以前から残る市内で最古の本を子どもたちにも実際に見せてくれる。これは町の宝物であるが、貴重な物になると見せてくれないところも多い。しかし、公開の度合いが高いという点で、市民と行政との距離が近いと感じた。大都市だとこのようなことは難しいのかもしれない。

(2) 学校以外への対応（幼稚園・観光客など）

また、幼稚園児が対象のワークショップも見学させて頂いたが、そこでは建物や自然景観のミニチュアを置いていきながら、町ができる様子を再現する遊びを行っていた。扱っている内容は小学校の社会科そのものであったが、幼稚園児であっても静かに先生の話聞いて、飽きずに取り組んでいた。それは、教え方や教材の作り方が上手だからではないかと感じた。さらに、この博物館では学校や観光客を対象に、周囲の保存地区内を歩いて、中世の町並みについて紹介するガイドツアーも行っている。そこでは2～3人の担当者が昔の服を着て、だいたい1回1時間半くらいの解説を行う。町並みについても、一つの大きなオリジナルのオブジェ（資料）と捉えることができるのかもしれないが、そこには多くの人の生活が絡むので、保存は難しくなる。でも、それがちゃんと残っていて、しかも展示と併せて活用できるということは、あ



園児が参加していた、都市の成立を再現するプログラム

る意味とても贅沢な博物館ともいえるのかもしれない。その他に、お誕生日会も行われている。

4. 所感

(1)「手作り」のサービスについて

この博物館では、地方ならではの良さが随所に感じられた。たとえば、わざわざ日本から来てくれたということで、フリーランスのエデュケーターの方がお孫さんを連れて参加して下さい、その女の子がそれぞれの展示室で、ローマ風、ルネサンス風、和風といった服に着替えて出迎えて下さった。また、夜には館長が派遣団をご自宅に招待して下さい、この地方の家庭料理もご馳走して下さい。地方の小さな館には、職員数は少ないものの、一人一人の来館者に対応した、いわば「手作り」のサービスがあった。地方の小規模館のほうが逆に、来館者とのふれあいの中から生まれる創意工夫を仕事に活かしやすく、それが職員のやりがいにつながることもあるのかもしれない。



着物を着る体験も行われている

(写真提供: 寺島洋子氏)

(2)歴史的景観とその活用について

少し話はそれるが、明治期の物理学者、寺田寅彦は地方と大都市の違いについて書き残しており、地方では、人はとても親切ではあるが、反面、人間関係に拘束されて個人の時間が少なくなるという。それに対し、東京の人はどこかよそよそしくはあるものの、個人主義のようなところがあり、自由な時間を与えてくれ、地方から出て来た身にとっては逆に、居心地がよいという。けれども地方にも、決して距離感を縮め過ぎるのではなく、自分に必要な時だけ話しかけてくれるような、優しいものがあるという。それが、自然や風景、そして祭りのような文化や風習であるというのである。この町の景観保存地区は、初めて行った場所ではあるのだが、どこか懐かしさに似たような印象が心に残った。ドイツでも戦争があったため、地方のほうが、古いものがオリジナルの状態によく残っているのかもしれない。そこでもう一つ大切なことは、単に残っているというだけではなく、それが自分達のものだという意識である。地元に対する愛着というものも、子ども達が興味をもって学習するための動機として、非常に重要なものである。また、情操教育の面でも、ふるさとというのはとても大切な要素である。それは、修学旅行で京都や奈良へ行くこととは、また違うのである。地方にはそのための資源がある。そしてこの館では、景観を保存するだけでなく、それと連動した教育が機能していた。しかし、そこではやはり、地方ならではの、手作りの創意工夫が鍵を握るのだと思う。そこからは地方ならではの教育力の高さというものが伝わってきた。中央集権制の国では大都市ばかりに目が向いてしまいがちだが、教育という観点から、むしろ地方のすばらしさを実感できたのは、今回の派遣の大きな収穫だった。訪問実現のために多くの準備を下された館長に、改めて御礼申し上げたい。

(岩本二郎／和歌山県立自然博物館)

⑦ミュンヘン・ユダヤ博物館

Jewish Museum Munich

訪問日時：2014 年 10 月 8 日(水)

対 応 者：Ms. Elisabeth Schulte(教育普及担当)

1. 館の概要



市の中心部にあるマリエン広場から歩いて5分ほどの聖ヤコブ広場(St. Jakobs Platz)に、ミュンヘン・ユダヤ博物館は建っている。博物館設置への動きは 1928 年に始まっており、当初、その展示の主軸はユダヤ人の手による芸術作品となる予定であった。しかしナチスの台頭により計画が現実のものとなることはなく、1980 年代に入ってようやく、あるドイツ人によって、ごく小さな私設の博物館が開館し、それが現在の博物館

の母体となる。館の場所と運営母体の変遷を経て、2007 年、ミュンヘン市立の博物館としてユダヤ博物館は再出発した。

聖ヤコブ広場一帯には、まだ新しいシナゴークとともに、ユダヤコミュニティセンターやフィルム博物館が立ち並ぶ。そうした中であって博物館は、ミュンヘンにおけるユダヤ文化についての先端的複合施設の一つとして位置づけられるという。

昨年(2013)の年間来館者数は 32,000 人。

2. 展示について

博物館を訪れる人の多くが来館時に期待するのは、ホロコーストについての展示である。ドイツ国内では、特にかつての強制収容所でその種の展示をしているとともに、ヨーロッパ全土におけるユダヤ博物館のほとんどがホロコーストを扱っているという。しかしながらミュンヘンの館の理念は、来館者にユダヤ人の文化や日常生活に対する理解を深めてもらうことにあり、展示にホロコーストの紹介は一切ない。来館者からホロコーストについての質問が出されたり、ガイドツアーや普及活動にもそうした要請があったりするが、普及プログラムとして提供されることはない。

一方で収蔵資料は 17 世紀以降のものと、比較的新しい。文献によって 13 世紀のドイツにユダヤ人が居住していたことが明らかになってはいるものの、15 世紀ごろには彼らは市には住めなくなったために、古い資料は全くないという。こうした事情から展示資料が少ないことで、時に困難もあるとのことだった。

展示室は常設展示室と企画展示室とがあり、常設展示室は第一室で歴史を、第二室で宗教

を紹介している。第一室の入り口付近には、漫画家 Jordan B Gorfinkel による「Everything's Relative」という漫画作品が導入として展示されており、館のあり方を特徴付けている。宗教の部屋には、現在も使われる祭具に触れることのできるコーナーがある。企画展示室ではテーマ展示を行っており、訪問時には「第一次世界大戦とユダヤ人」がテーマとなっていた。

2. 教育普及活動について

ミュンヘン市の文化政策によって、すべての市立博物館には普及担当者が各1名在籍している。他館でよく見られるフリーランスによるガイドツアーは、ここでは13名在籍している監視スタッフによって1回90分で実施される。教育プログラムは、常設展・企画展で各3つずつ提供しており、学校等で特別にプログラムを組みたい場合に相談とするのは、日本の場合と同様である。幼稚園児から大人まで、それぞれの年代層に応じて普及活動を行うが、特に学校単位で来館する場合には、宗教や歴史を学ぶことが主な目的となる。館には普及活動のための部屋がないことから、多くの場合、常設展示室や図書館などで活動を実施する。

ここでは学校向けのプログラムについていくつか記録したい。

【例1】展示室での解説



常設展示室にはミュンヘン市街の地図と、ミュンヘンにおけるユダヤ文化や歴史事項の解説の記されたコーン状のものが設置されている。地図上の正しい場所へコーンを設置すると、壁面に往時の写真が現われ、その場所にまつわるエピソードを知ることが出来る仕掛け。普及活動では、個人についてのエピソードを語ることで、学校の授業とは違う角度から歴史に対してアプローチをしていくという。

【例2】普及キットを使ったプログラム



小さい子どもたちに説明する際には普及のキットを使うこともある。例えば食文化について説明する場合。ユダヤの人々は豚肉を食べないことや、乳製品と肉類を一緒に食べないことなどを、おもちゃを使って説明する。「ユダヤ人の友だちが遊びに来たらどんなごはんを食べるかな？」と問いかけながら、家に冷蔵庫が2種類あることや、それはな

ぜか？という解説を行う。また、「お祭り」をテーマにしてユダヤ人のコスチュームを着てみたり、写真を見ながらコスチュームについて一緒に考えてみたりすることもある。

【例3】ワークショップ



かつて行った企画展示「ソ連から来たユダヤ人」では、ユダヤ人がふるさとから持ってきたものを紹介した。展示を見て「もし自分が他の国にいくとしたら何を持って行きたいか？」ということを考え、絵を描いた上で、子どもたちがそれぞれプレゼンテーションを行った。このワークショップに参加した子どもは40人。後に子どもたちの描いた絵を展示室に展示したそうである。（写真は企画展示「第一次世界大戦とユダヤ人」）

【例4】対話プログラム

15～20歳くらいの若者を対象に、宗教をテーマとして対話をするプログラムもある。企画展「生存者の生活と人生」では、参加した若者たちの将来について対話をした。中にはイスラムの者もあり、差別の経験を話してくれたという。こうした対話プログラムを通して、異文化と他者への理解を深められた実感があったようだ。

4. 雑感

ドイツ人の中には、ホロコーストへの強い拒絶反応を示す人が今なお多くおり、長らくホロコーストについての話題はタブー視されてきたという。子どもたちもまた、学校で学ぶ歴史の授業を通してユダヤ博物館へのイメージを固定化させてしまい、強い拒絶の姿勢とともに来館する者も少なからずいるらしい。しかしながら、館が普及活動を通して発するメッセージは、ユダヤの人々個々人の生活や生活実感、ドイツ人となんら変わることはない芸術への思いと、その表出についてであり、一貫して彼らの理解を目ざしている姿が印象的である。

ナチスの歴史をたどるとき、ミュンヘン一揆が大きな転換点であったことを思えば、その都市にホロコーストの事実を伝えるためではなく、ユダヤ人を同胞とし、彼らの文化理解に努めながら、共に生きる道を探る博物館が建つ意義は大きい。

参考URL

ミュンヘン・ユダヤ博物館 HP→<http://www.juedisches-museum-muenchen.de/home.html?L=1>

ヨーロッパユダヤ博物館協会(AEJM)→<http://www.aejm.org/>

Jordan B Gorfinkel による「Everything's Relative」について→<http://www.jewishcartoon.com/>

(古川順子／山梨県立文学館)

⑧バイエルン博物館アカデミー(ミュンヘン)

Bayerische Museumsakademie

訪問日時:2014年10月9日(木) 9:00~10:30

* アカデミーが主催する秋季の講座に参加

1. 概要

バイエルン博物館アカデミーは、博物館の専門教育の支援・促進を目的とする任意団体であり、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学歴史学部の教授、ミュンヘン博物館教育センター(以下、MPZ)のセンター長、およびバイエルンにおける州立博物館以外の博物館のための州政府事務所(以下、LFDNMB)の所長の3名によって設立された。活動予算はバイエルン州から得ており、活動内容はこれら3組織の代表によって開かれる定期的な企画会議で決まるが、実際の仕事は専務理事の Dr. Rainer Wenrich 氏が所属する MPZ が行っている。

2. 活動内容

活動の内容は、1)教員研修:これは主に MPZ で実施していた活動を引き継いだもので、学校の教員を対象とした博物館教育に関するレクチャーである。10回のレクチャーに参加すると修了証明書がもらえる。2)学芸員研修:博物館の職員を対象とした研修である。これら二つの研修には、大学生も参加することができる。2014年10月からは、1年にわたる博物館学(生物学、工学、美術史など館種ごとの専門講義も含まれる)の講座を新たに開始した。これはまだ試行段階であるが、将来的には州の認可を受けた正式な教育課程にすることを目指している。

アカデミーがこのような活動を実施するのには幾つかの理由がある。まず、博物館の業務が多様化、専門化したことで、職員のフォローアップ研修が求められていること。さらに、大学教育も州政府の所轄となるドイツにあって、バイエルン州の大学では博物館学が立ち遅れた状態にあることなどである。北部では、ベルリン大学をはじめとする複数の大学に博物館学の講座があり、大学院レベルでの研究も始まっているが、バイエルン州にはそれらが無いのである。こうした大学教育の格差是正は、ドイツ国内に留まらず、欧州全体において強く求められている。その背景には、1999年のボローニャ宣言に端を発した、欧州の高等教育システムの改革がある。この改革が目指す、欧州の大学間における単位互換制度を広く実現するために、大学教育の質向上が求められており、これがアカデミーの活動にも少なからず影響を及ぼしていると思われた。

3名の有志によって設立されたアカデミーは、当初のメンバーが運営から退き、活動だけでなく、組織そのものの在り方についても、新たな方向性を探る時期に来ているとのことであった。

3. 2014年秋季講座

今回のミュンヘン訪問は、ちょうどアカデミーが主催する秋季講座と日程が合い、我々は2日目の午前のプログラムに招待されると同時に、プレゼンテーションを依頼されたので、筆者が代表

して日本の美術館における教育活動の歴史と特徴を簡単に紹介した。講座は、「博物館と文化的教育」をテーマに、州内外の博物館教育の事例や研究報告、ドイツ連邦教育研究省の助成プログラム紹介などが行われ、博物館・美術館、学校、大学などから約 60 名が参加していた。アメリカの来館者研究の第一人者である John. H. Falk 氏を基調講演者として招いていたことや、今回実見した多くの事例から、ドイツにおいても利用者を主体とする学習理念とそれに基づく教育活動への関心が高いことを実感した。

以下に、2 日間にわたる講座のスケジュール表(翻訳)を参考資料として添付する。

(寺島洋子／国立西洋美術館)

バイエルン博物館アカデミー 2014 年秋季講座 テーマ：博物館と文化的教育 主 催： バイエルン博物館アカデミー／バイエルン州教育・文化および科学・芸術省／ バイエルン州文化教育連盟 日 程： 2014 年 10 月 8 日(水)・9 日(木) 場 所： バイエルン州教育・文化および科学・芸術省／ミュンヘン市立博物館	
10 月 8 日(水) バイエルン州教育・文化および科学・芸術省	
9:00	受付、モーニング・コーヒー
9:30	挨拶 Dr. Ludwig Spaenle (バイエルン州教育・文化および科学・芸術省大臣)
10:00	講演 I 司会： Dr. Rainer Wenrich 「文化的教育－概念の明確化」 Dr. Leopold Klepacki (フリードリッヒ・アレクサンダー大学、エアランゲン＝ニュルンベルク) Dr. Andreas Grünewald Steiger (ドイツ文化教育アカデミー、ヴォルフエンビュッテル) Heike Kropff (ベルリン国立美術館群) 「博物館と来館者の体験、アイデンティティ、動機」 Dr. John H. Falk (STEM 生涯学習研究センター所長、オレゴン州立大学教授)
12:30	昼食
13:30	博物館と文化的教育 アーバンルーム I での調査とプロジェクト展示 「偉人フランツ・フォン・シュトゥック、芸術家とその屋敷」 Johanna Berüter／Michael Bauereiß MA (ヴァイラ・シュトゥック) 「ピナコテーク・デア・モデルネのワークショップ：アートー世界を映しだす鏡」 Miriam Motzer M.A. 「アート・ゲーム－美術館における遊びを取り入れた鑑賞手法」 Dr. Alfred Czech

16:00	講演 II 司会: Dr. Astrid Pellengahr 「地方教育の現状－拡大した美術館の枠組みと、最新の文化的教育における美術館の介在」 Prof. Dr. Wolfgang Zacharias (バイエルン州文化教育連盟) 「オストヴァル美術館における芸術鑑賞プロジェクト－美術館と他の文化施設の架け橋として」 Regina Selter M.A. (オストヴァル美術館副館長) 「教育とは何か？－そして、それは美術館とどのような関わりがあるのか？」 Prof. Dr. Günter Dippold (オーバーフランケン地域文化財保護員)
10月9日(水) バイエルン市立博物館	
9:00	講演 III 司会: Dr. Rainer Wenrich ショート・プレゼンテーション 「典型的なミュンヘン？－移民と難民のためのミュンヘン市の歴史講座@ミュンヘン市立博物館」 Ute Dietz M.A. 「アウグスブルグ州立繊維産業博物館」 Barbara Kolb 「全国助成プログラム『文化は強さをもたらす』への助言－ミュンヘンとバイエルン州文化教育連盟(LKB バイエルン)による講座」 Lila Schulz 「ピナコテークの美術作品解説－回顧と展望」 Jochen Meister M.A. 「日本における美術館教育」 寺島洋子
10:30	博物館と文化的教育 アーバンルーム II での調査とプロジェクト展示 「ドイツ博物館:細胞－人間であることの要素」 Dr. Gabriele Kisser-Priesack 「ミュンヘン市立博物館のワークショップ:写真および人形劇－多様なコレクションに興味を持つための年齢別のヒント」 Ute Dietz M.A. 「子どもと青少年博物館のワークショップ」 Haimo Liebich 「レンバツハウスのワークショップ:美術館は語る!美術館における解説者の役割」 Martina Oberprantacher
12:00	昼食
13:00	講演 IV 司会: Dr. Astrid Pellengahr 「博物館訪問－条件と効果」 Prof. Dr. Doris Lewalter (ミュンヘン工科大学教授) 「ノルトライン・ヴェストファーレン州美術館・博物館のデジタル・メディアによる美術鑑賞の展望」 Dr. Christian Esch (ノルトライン・ヴェストファーレン州文化局)
15:30	閉会の挨拶

⑨ドイツ博物館(ミュンヘン)

Deutsches-Museum

訪問日時: 2014 年 10 月 9 日(木)12:00~18:00

対 応 者: Mr. Ulrich Kernbach(収集および展示部長)

Ms. Gabriele Kramer(教育普及部 青少年および児童担当課長)

Ms. Julia Gotschlich(フリーランサー)

1. 館の概要

ミュンヘン市にあるドイツ博物館は、1903 年に建築家で電気技術者でもあったオスカー・フォン・ミュラー(1855-1934)が創立した、科学技術と自然科学を扱う博物館である。創立以来、教育普及を館の目的に掲げており、多彩な教育普及プログラムを実施してきた。入館料は、大人€8.5、子ども€3で、2013 年は一年間に約 108 万人が



市内中心付近を流れるイーザル川の島に立地する

訪れた。空港に近い郊外のシュライスハイムに航空部門の分館、そしてミュンヘン中央駅に近いテレージエンハーエには交通部門の分館、さらにボン市にも分館があり、全てを合わせると年間約144万人が訪れ、国内最多の入館者数を誇る。来館者の内訳は、ミュンヘン市内からが約30%、ドイツの他の都市からが約30%、そして外国からが約40%である。出資者は、現在では70%がバイエルン州、15%がドイツ連邦共和国政府、もう15%がドイツ連邦全16州の連合体である。

2. 創立者と館の特徴について

この館の最大の特徴は、一人の人物が考えたコンセプトに沿って、建築から展示、イベント、そして資料収集に至るまで、全てに一貫して教育のための設計が行われていることである。オスカー・フォン・ミュラーは、科学技術や自然科学をできるだけ多くの人に紹介したいと考えたが、資金集めの天才でもあった彼は、様々な企業から寄付を集めて、1903 年に独自に博物館を創立した。その後、ミュンヘン市からも土地を譲り受けて、1925 年に現在の場所での展示が開館した。ここでは科学技術や自然科学を紹介するだけでなく、教育のための施設であることを目指していたが、さらにもう一步踏み込んで、楽しみながら学ぶことが彼の理想であった。「オクトーバーフェスタのように、子どもにもお年寄りにも多くの楽しみを提供するものであってほしい」という言葉は、館の伝統として、今日まで受け継がれている。この館ではリピーターが来館者の52%を占めるというが、口コミであったり、子ども達が自分も大人になったときに、また子や孫を連れてきてくれたりするので、実際に、宣伝にかけている予算はゼロに近いという。

3. 展示について

(1) 展示内容

この博物館は最初、「ドイツの自然科学と技術のマスターピースの博物館」という正式名であったが、約 5 万㎡と桁違いに広い館内には、人類の科学技術の足跡を物語る貴重な実物資料が展示されている。オットー・フォン・ゲーリケが真空の実験に用いた半球(1663 年)や、ライト兄弟が世界で最初に販売した飛行機「タイプA」(1908 年)の他、さらに分館にはダイムラーとベンツが製作した世界初の三輪自動車(1886 年)も保存されている。それはさながら「科学の殿堂」といった雰囲気をつたえている。しかし、この博物館の展示には他にも、ハンズオンの実験装置が多いという大きな特徴がある。ハンズオンに対しては、壊れたらどうするのかという人もいたそうだが、オスカー・フォン・ミュラーは、また直せばいいと答えたという。そして実際に、この博物館では全部で 500 人ほど職員がいるうちの、100 人ほどは工房で働く職人なのである。これもやはり、この館がただ収集・保管・展示を行うだけでなく、さらに一歩踏み込んで、体験型の学びを提供するための施設を意識していたことを示すものといえる。すぐに「ドイツ博物館」という別の館名が定着したという事実は大変興味深い。

(2) 展示のコンセプト

また、この博物館は収集活動でも、ただ記念碑的な資料を手に入れるだけでなく、一連の系譜の上に並べることで発明品のからくりとそれが発展する過程を示し、さらにその技術の効果を具体的に実演してみること、その根底にある本質を見せようとしている。オスカー・フォン・ミュラーは発明品の中でも楽器



楽器のコレクションの展示

を重視していたというが、古くはピタゴラスの音階に示されているように、音楽は他のどの芸術分野よりも物理学の法則に支配されており、また、楽器はたとえば電子楽器のような複雑なものに至るまで、いずれもその時代の技術の到達度に依存している。展示では、断面なども見せて楽器の内部の仕組みを解説する他、一つの楽器に対し、原型に近いものから現在の形のもののまでを集め、年代順にならべることで、楽器が辿ってきた技術の歴史的な変遷を見せている。さらに、実際に聴いてみることで、技術の効果を実感することができる。これがたとえばSLだったら、館内で走らせたりすることは困難であるが、楽器の場合は手軽に実演することができ、なおかつコンサートを楽しむこともできる。コンサートでは有名な演奏家を招いて演奏を行うが、古い楽器から普段はあまり聴いたことのなかった音色を聴くと、来館者はその根底に通じる本質について洞察することができるという。このように、単に目や耳を楽しませるだけでなく、その根底にあるものを理解するための洞察力を、わかりやすい形で養うことを意図している。しかし、原型から現在までを揃えて展示するとすれば、確かに、面積はかなり広く確保しなければならないはずである。

4. 教育普及プログラムについて

教育普及活動では、多様なターゲットグループに応じた実に多彩なプログラムを用意している。この館の特徴として、エドゥケーター等の館職員以外にも教育普及活動を支えるための体制があることが挙げられる。そこでは、博物館後援会の組織がある他、定年退職後のエンジニアなどもボランティアで解説に当たっている。ちなみに、ドイツ出身のノーベル賞受賞者の中には、子どもの頃にこの館に来たことが進路選択に影響を与えたと語った科学者が、2名いたという。

(1) 子どもから青少年向けのプログラム

子ども向けのプログラムは、4～8歳には後述する「子どもの王国」があり、9～12歳には夏休み等の休暇期間を利用したものを提供している。青少年は13歳以上になると、数回に分かれて連続して実施される長編ワークショップにも参加できるようになるが、そこでは毎年予算を与えられる中で、毎回異なるテーマに取り組んでいる。ドイツではこの館が扱うような分野はMINT教育(Mathematics 数学 Information 情報科学 Natural science 自然科学 Technics 技術)と呼ばれ、毎年、教育研究省から出されるテーマがその年の中心になるというやり方で進んでいる。たとえば数学、エネルギー、健康などといったテーマが設定されるが、数学がテーマになった年にはモノコートという楽器の製作に取り組み、青少年は音を作るには数学がどのような役割を果たしているかを考えることができた。また、「風力」のテーマでは、参加者はメディア教育の知識があるプロの映像制作者の指導の下、自分たちのアイデアで3日間かけて映像を作った。そして、できた映像はインターネットで博物館のHP上で公開された。13歳以上を対象にしたワークショップは、映像や音楽といったnew mediaが中心となっているものが多い。

(2) 一般向けのプログラム

まず、30を超える展示ツアーや演示実験が展示ブロックごとに毎日行われており、その多くは無料である。事前予約制のツアーもあるが、それは主に学校での来館や、6～12歳を対象としたお誕生日会のために行われる。「博物館のおとぎ話」というプログラムでは、毎年12月の週末に俳優や談師を展示室に呼び、各展示物について、このプログラムのために特別に書き下ろされた物語を語ってもらう。また、宿泊型の行事も行われている。その他のターゲットグループとしては、Girl's Day(女性の日)には女性向けのツアーが行われているが、そこでは



走査型電子顕微鏡を紹介する展示室内での実演



学校や幼稚園が対象の、電気についてのガイドツアー

実際の現場で働く女性科学者が案内役となり、自然科学の現象について学ぶと共に、そこから発生する科学技術の諸問題が政治や社会に及ぼす影響について議論する。

5. 子どもの王国

(1) 展示の概要

2003年には創立100周年を記念して「子どもの王国」が開設された。これは4～8歳を対象にした展示室であるが、開設以来、ドイツの博物館教育関係者の間では、これが大きな反響を呼んでいるという。この展



子どもの王国にある、水を使った体験型のオブジェ

示室では、面積約1300㎡という広々とした空間の中に、子どもが乗ることのできる消防自動車や、手で水を汲み上げることのできるらせん、重いものを持ち上げられる滑車、アニメーションの原理が再現できるスリット、大きなサイズで作られた木琴やギター、人間をミニチュアサイズで立体的に投影できる鏡、などといった大きめのオブジェが、ゆとりをもって配置されている。解説文のようなものはあまり書いていなかったが、オブジェを使って親子で一緒に遊びながら、親が子どもに遊び方を語りかけるために作られているように思われた。子ども限定という入場制限が設けられており、大人は子連れの親なら入場可能だが、大人のみでは入場できない。

(2) 実際に体験してみて

今回は特別に、視察のために大人だけで入らせてもらったのだが、ただ、大人目で見ると、正直、ここにあまり長くないとは思わなかった。そう書く誤解を招くようなのだが、展示の解説が少なく、科学の原理を伝えるという意図はあえて封印してあるので、逆にそこからは大人目線ではなく、しっかりと子どもの目線に徹して作ってあると感じた。それは、大人からすればつまらなく感じる人もいるかもしれないが、確かに、子どもの立場に立つということも重要である。もしかしたら、これこそがオクトーバーフェスタという理念を体現するものなのかもしれない。しかし、もし自分が子どもを連れて来たのであれば、状況はまた変わったと思う。逆に、子どもはこの部屋に長くないというかもしれないし、親自身も、もしここで子どもを遊ばせることができれば、子どもがもう帰りたいとは言わなくなるかもしれないので、そうなれば大いに助かるに違いない。でも、自分の子どもが大きくなってから初めてこの博物館へ来たとしても、果たして科学技術に興味を示すかどうかは分からない。それに対し、このような部屋があれば、たとえば小さい頃から子どもに科学を吹き込みたいともくろむ親には好都合である。小さな子どもをもつ年代のファンを作る上ではとても上手な方法であり、このアイデアを採り入れる博物館はきっと、他にも出てくるのではないと思う。ただし、もちろん、子どもを遊ばせるだけで終わっているわけではない。そこには「子どもの王国」と常設展示室とを“つなぐ”ためのワークショップがちゃんと用意されており、たとえば水を扱ったものや自動車など、他の展示室を利用する家族向けのツアーも用意されている。そして、次第に常設展示室へと移行できるように計算されている。

6. ケルシェンシュタイナー高等専門学校

(1) 施設の概要

この博物館で特に印象に残ったのは、一般向けの教育普及だけでなく、教師や教育方面の専門家のための研修にも力を入れていた点である。敷地内にはそのための別棟まで増築されており、派遣団も、最後に教育普及についてのお話を伺った際にはそこへ案内された。1976 年に完成し、「Kerschensteiner Kolleg: ケルシェンシュ



ケルシェンシュタイナー高等専門学校の中の講義室

写真提供: 寺島洋子氏

タイナー高等専門学校」と名付けられたその棟は、講義室と実験室の他に 30 室のゲストルームがあり、宿泊設備があることで数日間続くイベントを開催することができるようになっている。そこでは科学に関する会議や教員への研修で毎年 1800 人ほどが利用している。指導者に研修を行う最大の意義は、裾野を広げることにある。日本でも「上を引き上げる」ための教育はよく行われているが、たとえばピラミッドのような建築物でも高さを増すためには、ただ最上部を積み上げるだけではなく、底辺の石積みを増やして「裾野を広げる」ことが必要になる。現在日本でいわれている「理科離れ」はまさにその点に関連しているが、そこで取り組む人の総数を増やすには何が必要なのかといえば、それは興味を持つ人を増やすことと、それから、興味を持った人がさらに自分の力で理解を広げてゆけるようになることである。このうち後者は見落とされがちなのだが、実はこれが非常に重要で、ドイツ博物館ではこの点を押さえていると考えられた。前者だけであれば、日本でもよくイベントを開催したりはするのだが、宣伝するだけでも興味がさらに先へ続かなければ、やがては忘れられてしまう。では、続くためにはどうすればよいかといえば、そこで指導が鍵を握るのである。ドイツ博物館では指導者の養成に対し、別棟を建てて宿泊型の研修を行うほどの力の入れようであった。この、トップランナーや初心者だけでなく、むしろその中間に位置する指導者を重視する視点は、日本の博物館にも必要で、大いに参考にすべきであると感じた。

(2) ケルシェンシュタイナーについて

ちなみに、ケルシェンシュタイナーというのは、この館の設立にも関わったミュンヘン市の学務官、ゲオルグ・ケルシェンシュタイナー(1854-1932)のことで、彼は新たな教育学の原理を定義する教育改革運動を行ったが、そこでは書物を中心とした学校教育を批判し、生徒中心の教育を目指した。彼の思想は労作学校から生まれた労作教育思想と訳され、日本の私立学校の中にもその影響を受けたものがある。なお、同時代の他の教育運動家には、マリア・モンテッソーリ(1870-1952)、ジョン・デューイ(1859-1952)、アルフレッド・リヒトヴァルク(1852-1914)の名が挙げられるが、特にリヒトヴァルクについては、同時代のドイツでハンブルグ芸術会館の館長として、同様に博物館教育の新たな道を切り拓いた。ドイツ博物館の教育活動は 100 年以上に及ぶが、その創設期にはヴァイマル期の教育改革という時代背景も関係していたのである。

(岩本二郎／和歌山県立自然博物館)

⑩ バイエルン王博物館(フュッセン)

Museum der bayerischen Könige

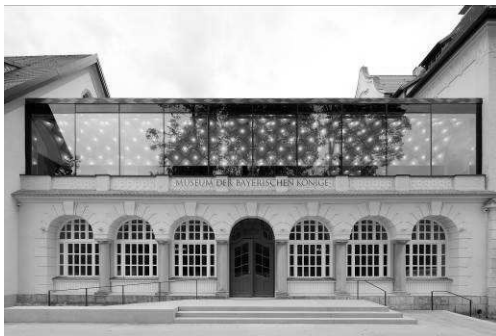
訪問日時: 2014 年 10 月 10 日(金) 11:00~13:30

対 応 者: PD Dr.Luitgard Sofie Löw (館長)

1. 概要

バイエルン州南西部に位置するフュッセン市の郊外にある、ルートヴィヒ 2 世をはじめとするヴィッテルスバッハ家出身のバイエルン王の歴史を紹介する博物館である。かつてのホテル「アルペンローズ」を改装して、2011 年 9 月に博物館として開館した。同地には、マクシミリアン 2 世が再建したホーエンシュヴァンガウ城と、彼の息子であるルートヴィヒ 2 世が建設したノイシュヴァンシュタイン城があり、当館はそうした観光名所を訪れた人々が、バイエルン王家に対して抱く興味や関心に応えることを目的としている。

設立・運営母体は、ヴィッテルスバッハ財団である。開館初年度は 5 万 4 千人の来館があり、3 年目となる 2014 年 10 月現在は 8 万人と、順調にその数を伸ばしている。



博物館正面入口 ©Ebener-8892-1



レストラン部分(撮影:岩本二郎)

2. コレクションと展示

絵画、彫刻、工芸品、文書などの王家の遺品を、10 セクションに分けて展示している。1)「ヴィッテルスバッハ家の家系図」で始まる展示は、回廊を活かして歴代当主の絵画や写真とともに年表が連なっている。2)「諸王の間」は、王族の胸像や個人の品々が展示されており、そのハイライトは中央に置かれたドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を象った食器台である(写真参照)。3)「国王の世紀」は、112 年間(1806~1918)続いたバイエルン王国に焦点をあて、立憲君主制を敷いた初代マクシミリアン 1 世をはじめとする王族の絵画や写真が飾られている。続いて、芸術・文化を国の統一と君主制の確立に積極的に利用した 4)「芸術と建築の政策」、工業化時代の新しい技術を駆使して、バイエルンを学術と経済の中心地へと発展させることに取り組んだ 5)「技術革新時代の王たち」の 2 つのセクションでは、建物や乗り物などの建造物やその計画などを模型や巨大スクリーンなどで紹介している。さらに、6)「君主と社会」では、こうした社会の

変化に適応する王族の姿がとりあげられている。そして、7)「伝説に名高いルートヴィヒ 2 世」では、ヴィッテルスバッハ王家で最も有名なルートヴィヒ 2 世が愛用した外套などの遺品、8)「金婚式」では、最後の国王夫妻ルートヴィヒ 3 世とマリー・テレーズの金婚式の記念となる「バイエルン王家の食器セット」300 点(写真参照)が飾られ、9)「君主制の終焉」では、王国が終焉を迎えた第一次大戦後の一族を絵画と写真でたどる。展示の最後は、10)「バイエルンと今日のヴィッテルスバッハ家」として、第二次大戦以降から現在までの一族の活動や情報を写真で紹介している。

統一感のあるデザインと一部インタラクティブな工夫はあるものの、基本的にはオーソドックスな展示であった。



「諸王の間」 ©Ebener-9202-1



「金婚式」 ©バイエルン王博物館

3. 教育プログラム

開館間もない当館では、専任の教育担当がおらず、教育プログラムは 10 名のフリーランスが担当しているとのことだった。一見の利用者が多い観光地の施設ならではの工夫として、チケット購入に際して、当日券以外に日にち指定の事前予約ができる混雑対策のためサービスがある。また、ホーエンシュヴァンガウ城、ノイシュヴァンシュタイン城と当館の 3 施設のチケットを、単独ではなく 2 施設、あるいは 3 施設セットで購入すれば割引となっていた。

主たるプログラムは、オーディオガイドによるセルフガイドツアーである。オーディオガイドのレンタル料金は、チケットに含まれている。ガイドは、日本語、独語、英語、仏語、伊語、西語、露語、中国語の 8 言語に対応しており、日本語の解説はわかりやすく、聞き取りやすい言葉に翻訳されていた。また、英語、独語、仏語、伊語、露語、ポーランド語については、フリーランスによるガイドツアーを予約することもできる。

今回の視察では、オーディオガイドのツアーのみで、家族や学校を対象とするプログラムは実見できなかったが、現在実施している 5 つのプログラム(添付の表参照)については、Sofie Löw 館長の説明といただいた資料を参考にすると以下のような特徴がある。

＜対象＞

家族と学校団体。特に小学生(1～4年生＝6～10才)が多く、2014年度は10月現在で1,000人以上が来館している。ただし、学校と特別な連携は行っていない。

＜プログラムのテーマ＞

添付の表からもわかるとおり、テーマは大きく2つに分かれる。ひとつはバイエルン王国の王や貴族の生活である。特定の時代を取り上げるものではないが、中世まで遡ることはない。王や貴族の生活というと、一般的には贅沢で優雅なものを想像しがちだが、実際はノブレス・オブリージュ(高貴さは[義務を]強制する)で決して楽なものではなかった、という事実を伝えることを目的としている。もうひとつは、ルートヴィヒ2世の芸術と建築である。

高校生(ギムナジウム)になれば、学校のテーマ研究の授業に合わせることもあるという。例えば、「バイエルン王国のイメージ政策」、「バイエルン王国の建築計画」、「女性の仕事と役割」などである。

＜プログラム手法＞

基本的には、対話型のツアーであるが、年少者や家族対象のプログラムではロールプレイ、創作などの活動も合わせて行なっている。ただし、建物が展示重視でできているため、創作などの活動には不便であるとのことだった。

最後に、今後の活動で重視する点を尋ねると、「専門のエducーターの採用」と「多様な対象グループに向けたプログラムの企画・実施」との答えが返ってきた。また、観光客が多い施設ならではの必要性からであろう、日本などアジア諸国からのインターンを歓迎するとのことだった。10年後にどのような展開をみせるかが楽しみな、発展途上の博物館であった。

＜実施している5つのプログラム＞

* 当館で入手した資料から主要部分を筆者が表に編集・翻訳

プログラム名称	対象	所要時間	ねらい	内容
二人の王様の子どもたち	幼稚園児／基礎学校の1・2年生	60分	王家の子どもたちの生活を知る。	自分で作った王冠とマントを身に着け、王子や王女になったつもりで4カ所の展示を鑑賞し、彼らの生活は思いうほど楽なものではなかったことを知る。
メルヘン王の幼年時代とその生活	基礎学校と特別支援学校の2～4年生／上級学校の5・6年生	90分	ルートヴィヒ2世の幼少期や、彼が王となってやったこと、どのようにして、また、なぜメルヘン王となったのかを	展示を鑑賞し、ルートヴィヒ2世の幼年時代や王となってからの統治・活動についてディスカッションする。最後に、現在のルートヴィヒ／ポツ

			知る。	プ・スターとしてのルートヴィヒ、をテーマにコラージュを制作する。
築かれた夢ールートヴィヒ 2 世の建築芸術	上級学校 5～7 年生 (美術を選択している生徒)	90 分	ルートヴィヒ 2 世は、どこから建築の着想を得たのか、彼に影響を与えたものは何か、またどのような技術を駆使して城を建てたかを知る。	ガイドと一緒に展示を体験する。
みんな、びっくり！ ールートヴィヒ 2 世の足跡	家族(最大 15 名)	75 分	ルートヴィヒ 2 世の幼少期や、彼が王となってやったこと、どのようにして、また、なぜメルヘン王となったのかを知る。	展示を通して、ルートヴィヒ 2 世の幼少期の生活、王となっていた仕事、彼の夢について知る。その後、2013 年の「ルートヴィヒ 2 世と彼の城」カレンダーからお城の写真を 1 枚お土産にもらう。
王子や王女の暮らし	家族(最大 15 名)	75 分	大昔の王子や王女の暮らしと、現代の王子や王女の生活を知る	自分で作った王冠とマントを身に付け、王子や王女になったつもりで、4 カ所の展示をまわって、貴族の子どもたちの洋服、食事、お城での暮らしがどのようなものだったかを見る。

(寺島洋子／国立西洋美術館)

⑪ノイエ・ピナコテーク(ミュンヘン)

Neue Pinakothek

訪問日時：2014 年 10 月 11 日(土)10:00～12:00

対 応 者：Dr. Alfred Czech (ミュンヘン博物館教育センターのフリーランスエディター)

■ノイエ・ピナコテークの概要



ノイエ・ピナコテークはミュンヘン市の中心地に位置し、「ピナコテーク(Pinakothek)」ということばが「絵画の収蔵庫」を意味することによって、絵画を中心とした美術作品を紹介する美術館である。アルテ・ピナコテーク(14 世紀から 18 世紀のヨーロッパ美術)とピナコテーク・デア・モデルネ(20 世紀以降の近現代美術)の二つの美術館と隣接し、三つの時代区分でドイツ国立バイエルンコレクションの美術作品を紹介している。

ノイエ・ピナコテークは、19 世紀のヨーロッパ絵画や彫刻を、古典主義からアール・ヌーヴォーまで、特にドイツ表現主義やフランス印象派の著名な作品を所蔵している。1853 年に設立された建物は第二次世界大戦時に破壊されたが、1981 年、同じ場所に展示スペースとドイツ国立バイエルンコレクションのオフィスを兼ね揃えた現在の建物が再オープンした。

■教育普及活動について

ノイエ・ピナコテークでは、ピナコテーク 3 館の教育普及担当とバイエルン州博物館教育センターの、二つの団体がそれぞれ別で教育普及活動を行っている。主に、ピナコテークでは家族や子どもたち、マイノリティなど学校グループ以外の一般来館者をターゲットにしており、博物館教育センターは学校グループによる授業での活用をサポートしている。

まず、ピナコテーク 3 館の教育普及活動について説明すると、2003 年のピナコテーク・デア・モデルネの開館と共に開始した。スザンヌ・クードルファー氏は当時の来館者サービス及び教育普及課のトップであり、たばこメーカーのフィリップ・モリスの出資を得て「PINK Project」を立ち上げ大きな業績をあげた。

※PINK Project は、身体的・社会的に困難な立場にいる個人やグループを対象に、美術と向き合う機会を提供する企画として 2012 年頃まで精力的に行われていた。

ノイエ・ピナコテークは、美術館の規模のわりに、教育普及活動を行うための部屋が建設当時から設置されていなかった。2006 年になると、「パレス・ピナコテーク」というピナコテーク 3 館の教育普及活動のため施設を、美術館近辺の古い歴史的建造物に場所を借りて正式にオープンした。それ以降、3 館の教育普及活動は勢いが増したものの、昨年その建物は所有者に返還しなければなくなり、エディターたちは再び活動場所を失うこととなった。現在ノイエ・ピナコテーク

では、地下 1 階の展示室に使われていたスペースで、一般参加者向けのワークショップなどを度々行っている。一方、博物館教育センターは美術館を活用した学校の授業をサポートしている。

■バイエルン州博物館教育センターについて

ミュンヘン市にあるバイエルン州立博物館と、ミュンヘン市の市立博物館を中心に、多様な来館者層に向けてプログラムを提供している機関である。基本的にバイエルン州の他の市は管轄外であるが、要望があればサポートする体制を整えている。博物館教育センターは、1 年間に 6 ～8 万人の子どもたちを受け入れている。ノイエ・ピナコテークにおける個別の数字を伺うことはできなかったが、訪問する学校グループ全般を支援し、要望に応じて適切なフリーランスのエducator を派遣している。博物館教育センターが提供する、約 2 時間の館内鑑賞ツアーが 35 ユーロ(その一部がフリーランスの収入)と有料である。

■ワークショップの体験



バイエルン州博物館教育センターより派遣され、ノイエ・ピナコテークを活動拠点とするフリーランスのエducator、アルフレッド・チェヒ氏より、普段子どもたちと一緒にしている活動を紹介していただいた。チェヒ氏は、自ら考えだした様々なアイデアや手法をを一冊の本にまとめるほど、実践経験が豊富なフリーランスのエducator である。彼の手法を活用、応用して実践する他のフリーランスが多数存在するほど、指導的立場の方と言っても良いかもしれない。なお、写真は鑑賞レッスンのためのアートゲーム例を掲載した書籍である(チェヒ氏著)。



1) まずポータブルの折りたたみ椅子、いわゆる軽いパイプ椅子のようなものを一人一脚ずつ配られた。ある部屋に到着すると、チェヒ氏は約 5 センチ角の正方形のカードを床にばらまいた。それぞれのカードには、作品から抜きとったであろう人の顔が描かれており、同じ作品から異なる 2 人の人物の顔が描かれたカードが二枚ずつ床にばらまかれた。チェヒ氏はカードを裏返しにし、同じ作品の中に描かれているもの同士をペアにする、「神経衰弱」を全員で行った。

2) 「神経衰弱」でペアを作ったあと、さらにそれらを時系列に並べた。カードに描かれた絵は、私たちが居た部屋に展示さ

れているものばかりであったが、それに気づく人、そうでない人がいたことが大変興味深かった。ゲームへの熱中具合が伺えた。

3) 次の部屋では、画面のどこかに「水」が描かれている作品が数点展示されており、チェヒ氏は持参した iPad で水が流れる音、水同士がぶつかりあう音など、数種類の水の音を再生した。聞こえた音が水のどのような様子を表しているか、各々の記憶を辿って「この作品に描かれた小川から流れてきそうだ」など印象の違いを楽しんだ。



4) 次に、カール・ブレヒエンの《Building of the Devil's Bridge》という作品を、2～3 人のグループになって鑑賞した。チェヒ氏から、A4 サイズのラミネート加工された一見同じイメージの複製を手渡された。よく見ると細部に足りない要素が発見でき、原画にあって複製にないものを探す「間違い探し」のようなゲームを行った。数分後、それぞれのグループが見つけた間違いを発表し合った。



5) 最後に、カール・テオドール・フォン・ピロティの《Thusnelda Led in Germanicus' Triumph》という 5x7m の巨大な絵画の前で、様々な感情を表す言葉が書かれたカードが配られ、その書かれた言葉に当てはまる人物を、絵の中から探し出す活動を行った。二人一組で行い、言葉の理解に相違がないかどうかを確認し合ったり、絵の史実に触れるかどうか話しあったり、単純にヴィジュアルから想像ふくらませたり、同じ活動の中でもペア毎に着目点が様々であった。発表の際にもチェヒ氏が提示した課題以上に回答するメンバーの様子を見て、「対応するグループ毎にいつも臨機応変に活動内容を調整する必要がある、決まった方法はないんだ」と言及していたことが印象深い。

チェヒ氏の実践例を体験しながら約 1 時間半過ごしたあと、質疑応答に時間を取った。様々な手法を用いて美術館での授業を進めるチェヒ氏のやり方は、子どもたちにとって美術館での体験が楽しい思い出となることが大前提となるよう心がけられていた。ゲームなどの手法を用いた授業の運び方は、作品を細部まで楽しみながらしっかり見る力をつけると同時に、誰もが参加しやすい環境を作り上げることに繋がっていた。

(朴 鈴子／京都国立近代美術館)

⑫ミュンヘン博物館教育センター

Museums-Pädagogisches Zentrum München

訪問日時：2014 年 10 月 11 日

対 応 者：Dr. Alfred Czech（ミュンヘン博物館教育普及センター）

1. 組織の概要

ミュンヘン博物館教育センターはバイエルン州とミュンヘン市が共同で運営する機関として、1973 年に発足した。個々の博物館とは組織を異にする独立した機関で、州立、市立の博物館のために、学校向けの教育プログラムを提供するべくスタートしている。現在 17 名の専任のエducator と 80～100 名のフリーランサーを抱えており、専任のエducator はそれぞれ、州や市の博物館やバイエルン博物館アカデミーに勤務している。一方でミュンヘン市は、2008 年より独自の文化政策として、市立博物館の各館に 1 名ずつ専任エducator を置いており、センターのエducator と市のエducator とは並行してプログラムの作成と提供を行っている。

センターは、学校向け（60 分€35～）や保育園向けのプログラム（60 分€30～）のほか、教員向けの研修（無料）、個人や家族向けイベント（誕生日会 150 分€120、成人向けガイドツアー 60 分€50）（※1）など、約 50 館に対し 350 種のプログラムを提供している。特に対象を学校と教員に絞ってサービスを提供する組織はドイツ全土でも珍しく、ミュンヘン特有のものと言える。

年間の学生利用者数は6～8万人。

プログラム内容の具体例についてはドイツ博物館、ノイエ・ピナコテークのレポートを参照されたい。

2. 専任エducator とフリーランスのエducator について

ドイツの博物館における普及活動の場にしばしば登場するのが、ガイドツアーやワークショップなどの普及プログラムを実施する、プロのフリーランサーたちである。日本の博物館では、こうした仕事の一部をボランティアが担っている館もあるが、ドイツの場合、展示領域における専門的な知識や教授法を身につけたプロフェッショナルとして、フリーランサーたちは働いている。どの館においても普及プログラムが有料なのは、こうしたプロの仕事への対価ということである。ミュンヘン博物館教育センターの提供する学校向けプログラムには、1 回あたりの人数制限がないが、グループ分けをするとそれだけガイド料がかかるため、多い時には 1 クラス 34 名に対してプログラムを実施することもあるという。

フリーランスの仕事をする人々は、産休中や育休中、あるいはリタイアした教員であったり、フリーランスの経験を経た後に、どこかの館へ就職するという人であったり、複数の館を掛け持っていたりと、さまざまな背景や働き方を持っている。「フリーランスなくして普及事業は成り立たない」と、どの館の専任エducator も口を揃える一方で、人件費の問題から彼らが専任となること

が非常に難しかったり、一定額以上を稼ぐと自身で社会保障費を支払わなければならなかったりと、労働条件上の課題は多い。

また、多くのフリーランサーを抱えることで、彼らの専門領域を把握し、依頼者からの要請に応じた適切な人員配置を行い、時にフリーランサーの実施するプログラムの質を維持するための指導やチェックをしたりと、専任エデュケーターには教育普及事業の企画・運営にとどまらない、マネジメントの能力も求められるようになってきている。

3. 雑感

今回の研修期間中、通訳をしてくださったハイケさんによれば、ドイツの学校では、教科書や学習進度、学習の方法などがある程度、先生の裁量で決められるという。あるクラスは歴史の授業の一環で博物館のプログラムを受け、別のクラスは行かない、ということもありえるのである。そのため、博物館や博物館教育センターは、学校の先生たちへの働きかけに熱心である。青少年向けに教育活動を行う施設は、劇場など他にもあり、そうした他施設との競合の中で来館者・プログラム利用者を獲得していかなければならない側面があるからだろうか。

ケルン市博物館顧客サービスやミュンヘン博物館教育センターなどのように、博物館の外に独立した組織を持ちながら、博物館における教育普及活動を提供する仕組みは、仕事内容や目的が明確化され、そのために、合理的かつ効率的に仕事が進められている印象を持った。一方で、普及を担当する職員が博物館の外にすることで、少なからぬデメリットも生じるように思う。そうした意味では、ミュンヘン市立の博物館における、各館に一人のエデュケーターを置きながら博物館教育センターからも支援が受けられるというあり方は、ひとつの理想的な形態のようにも見える。

ミュンヘン市の文化政策は、「芸術や文化はケーキを飾る生クリームではなく、日常生活のイーストである」という考え方に拠って立つ。博物館施設を訪れることは、非日常的なちょっとおしゃれな行為、嗜好的、特権的行為ではなく、ふだんのわれわれの生活を形作る最も重要な要素と位置づけられているのであろう。

制度的な側面から博物館に対してどのような支援が行われているか、ということが、今回の研修における個人的な関心事の一つであったため、ミュンヘンの事例はとても印象深いものであった。

※1 MPZ ホームページ (<http://www.mpz.bayern.de/>) より 2014 年のガイドツアーの料金を参照。

(古川順子／山梨県立文学館)

⑬ ヴィラシュトゥック美術館(ミュンヘン)

Museum Villa Stuck

訪問日時: 2014 年 10 月 11 日(金)13:00~16:30

対 応 者: Mr. Michael Buhrs(ヴィラシュトゥック美術館館長)

Ms. Anne Marr(エデュケーター)

1. 館の概要

ヴィラシュトゥック美術館は、芸術家フランツ・フォン・シュトゥック(Franz von Stuck)が 1897 年に建てた私邸を改築した美術館である。1900 年辺りに繁栄、財を成したシュトゥックだったが、彼の死後、家族で家を保つのは困難で手放すこととなる。1944 年の戦争で一部破壊されるなどしたが、1968 年に建築家が購入し、館活動を再開。同年、私立社団法人となり 80 年代まで運営。その後、1992 年ミュンヘン市立として、文化支部に置かれる。

象徴主義の作家として自分をテーマとしたシュトゥックの作品群が常設され、また芸術家が住んでいた家という館の理念のもと現代作家の企画展も手掛けている。

また、これら展示部門と同様に教育普及も重要な活動と考え、2008 年から専門の担当を置いて様々なプログラムを展開している。



外観: Michael Buhrs 館長(左)、
Ms. Anne Marr(右)

2. 教育普及活動

オーケストラのコンサートの背景画の作成、子ども向けオーディオガイド、難民の子たちと映像のワークショップなど実に幅広い内容の活動を行っているのが、なかでも参加させてもらった「青少年によるツアー: TEAM STUCK」は単純な作品解説ではなく演劇の要素を盛り込んだ楽しめるものだった。(ヴィラシュトゥックの HP に映像で紹介されているので、そちらを参照されたい。

www.villastuck.de/)



TEAM STUCK の様子

このツアーは毎月最初の日曜日に開催され、2 ユーロ支払えば誰でも参加できる。ツアーを行う子どもたちははじめ 14 歳以上を対象に計画していたが、実際は 11 歳の子も含む全員で 13 人。活動はふたつのグループに分かれており、私たちが参加した回は 8 人の男女混合チームだった。

飽きさせることのない見事なまでのツアーは、話す内容から一緒に考え、芸術教育の専門家などによるレクチャーや他館訪問を行うなどしっかりとした育成プログラムが背景にあった。

また、ツアーの経緯はそもそも青少年を対象にした訳ではなく、館に興味のない層をいかに取り込むかということからきている。経済的な事情でなかなか館に足を運ぶ機会のない人々、彼らの子どもを対象に、州から出ている青少年を活用とした取組みに対して支給される補助金がこのプロジェクトの予算として充てられている。前述したプログラムを経て、ガイドとして活動する際に対価として1人あたりに支払われる15ユーロは裕福ではない層の子たちにとって、決して安くはないだろう。ただ、ツアーを終えた後に出されたケーキを頬張る生き生きとした表情から参加している彼らを繋ぎとめているのが決して金銭面だけでないことが分かる。

ヴィラシュトゥック専任エデュケーターの Ms. Marr は「今後、彼らが指導者となり後世を育てていけたら…」と話す。彼らにとってこの場所がプラットホームとしての機能を併せ持つことになるとのではないかと期待する。当初は子どもたちの活動を見に来る親を呼び込むことが目論みだったかもしれないが、この活動にはそれ以上の効果を得ているだろう。

Anne は様々な職種(写真家や映画に携わる、主にアーティスト)である10人のフリーランサーとプログラムを立てる際のコンセプトをつくっていく。芸術家とはどういうことをしていたか、を考える手立てとして工作活動を行う。そのために2012年に開設した工房は椅子ひとつにしても随所に工夫が凝らされ、快適に過ごす環境が整っている。また、フライヤーなどの印刷物にもデザイン性の高さが伺え、彼女のセンスが反映されている。



制作物一式

3. さいごに

従来ヴィラシュトゥックに来る来館者層は窺い知れないが、モダンな外観から年配の方が多くのではないかと推測する。新たな層の開拓に伴い、もちろん配慮されていると思うがこれまで親しんできた方へのケアも重要であろう。幅広い層に受け入れられる館づくりを自館に置き換え、示唆を受けた訪問となった。



工房の様子

(町田恵美／沖縄県立博物館・美術館
[指定管理者文化の杜共同企業体])

⑭その他の訪問先

●ノイシュヴァンシュタイン城(バイエルン州)

Schloss Neuschwanstein

訪問日：2014年10月10日(金)

ノイシュヴァンシュタイン城は、ミュンヘンから車で2時間ほど、オーストリアとの国境近くにあります。バイエルン王ルートヴィヒ2世が19世紀に建てた城である。現在は国際的な観光スポットとして知られ、内部を見学することができる(ただし城内の写真撮影は禁止)。近くにはルートヴィヒ2世が幼少時代を過ごしたホーエンシュヴァンガウ城があり、その敷地内には、ホテルを改修し2011年に開館したばかりのバイエルン王博物館がある。ルートヴィヒ2世をはじめとするバイエルン国王の歴史が美しい展示室で紹介されており、併せて見学することで、城と周辺地域の歴史についてより深い理解が得られる。

若くしてバイエルン国王となったルートヴィヒ2世は、フランス国王ルイ14世と、その中世騎士道、絶対君主への憧れが強かった。その憧れを具現化するべく作られたのがノイシュヴァンシュタイン城である。ルートヴィヒ2世は建築病と呼ばれるほど数々の城の建設、または建設計画を行った。そのほか音楽の世界ではワーグナーに心酔し、彼の有力なパトロンでもあった。バイロイト音楽祭が開かれるバイロイト祝祭劇場の建築には多額の資金提供もした。

城の内部は、宮廷劇場の舞台装置・舞台美術を担当していた画家のクリスチャン・ヤンクによってデザインされ、住居と書斎の間にはまるで物語の一場面のような洞窟の一室が作られていたり、芸術と建築に深い情熱を注いだことがうかがえる。

見学コースでは観光シーズンのピークを過ぎているとはいえ、様々な地域からの観光客でにぎわっていた。特に建物の中は、種々多様の来場者をいかに効率よく、平等に、事故なく、見学させるかということに細心の注意が向けられていると感じた。日本語のオーディオガイドを利用したが、ルートヴィヒ2世の人柄や王家と地域の歴史などを、動線にそったタイミングでわかりやすい言葉を使って説明していた。興味がない人でも物語として気軽に聞くことができ、興味がある人にはもっと詳しく知りたいという新たな関心づくりのきっかけとなるような内容であった。なお入場については、事前に事務局が予約しておいて下さり、あらかじめ指定された時刻に来ると入場できるというシステムで、時間にも無駄なくスムーズに入場できた。(写真1)



写真1 入場整理システム



写真 2
マリエン橋からの眺め

城の内外の美しさだけでなく、周辺の散策を含めたマリエン橋からの眺めや、バイエルン王博物館の見学などと併せて多面的に楽しめる観光地として人気の理由に納得がいった。(写真 2)すでに世界的に人気の観光地ではあるが、ドイツの人たちには、今後さらに自信を持って世界にむけて発信する観光資源、歴史遺産として大切にしていってほしい。

(加古川茉莉恵／(一財)北方文化博物館)

●バイエルンにおける非州立博物館のための州政府事務所

Landesstelle für die nichtstaatlichen Museen in Bayern

訪問日時：2014 年 10 月 12 日(日)9:45～12:30

対 応 者：Ms. Dr. Hannelore Kunz-Ott (2012 年度来日)

バイエルンにおける非州立博物館のための州政府事務所 (Landesstelle für die nichtstaatlichen Museen in Bayern. 以下、州政府事務所)は、バイエルン州によって運営される博物館の支援機関である。その名称が示している通り、バイエルン州内の州立博物



州政府事務所のロゴマーク

館以外の博物館を活動の対象としており、郡や市といった下級自治体で設置運営される公立博物館、私立博物館、社団法人や非営利団体によって設置運営される博物館などに対してコンサルタント・サービスを提供している。バイエルン州には、およそ 1,350 館の博物館があり、そのうち、

州政府事務所の活動対象となる館は、1,250 館以上におよぶ。

州政府事務所には、さまざまな専門家が所属しており、美術史や歴史学、考古学といった専門分野の研究者に加え、保存修復やコンピューター関連の専門家、さらには、研修の企画・運営担当や広報担当の職員などが配置されている。こうした陣容により、博物館からの多様なコンサルティングの依頼に対応することが可能となっている。依頼は、博物館関連の団体やスタッフから広く寄せられており、館長、エデュケーター、コンサベーターといった人々から博物館の運営や業務に関する問い合わせがある。

専門的なコンサルタントに加え、財政的な支援も州政府事務所を通して実施されており、年間に 300 万ユーロの助成金を支出することが可能となっている。

また、博物館スタッフのための研修も実施しており、さまざまなテーマの研修を提供している。たとえば、コレクションのドキュメンテーションやガイドツアーの企画・運営といったような、博物館の運営や業務に関わる具体的なテーマが各研修で設定されている。研修の対象は博物館職員のみでなく、インターンのための研修も提供している。

博物館関係者だけでなく、博物館の利用者にもサービスを提供しており、代表的なものに、“インフォポイント(Infopoint)”という博物館に関する情報提供サービスがある。利用者の問い合わせに応じて、様々な博物館に関する情報を州政府事務所が提供している。ミュンヘン市内中心部にある州政府事務所のオフィスにはインフォポイントのコーナーが設けられている他、電話や電子メールでも問い合わせに応じている。

出版事業も州政府事務所の重要な活動となっている。複数のタイプの出版物を発行しており、主要なものにはバイエルン州にあるすべての博物館を掲載したガイドブック *Museen in Bayern* (『バイエルンの博物館』) がある。そこには、およそ 1,350 館の博物館の情報が掲載され、5 年ごとに改訂・発行されている。このガイドブックは、インターネット上でもデータベースとして公開している。また、*MuseumsBausteine* (『博物館のビルディング・ブロック』) というシリーズの出版物もある。このシリーズでは、各巻で、収蔵庫の管理運用や、考古学博物館の運営、博物館と学校の連携などの具体的なテーマが設定され、多様なトピックが取り上げられている。さらに、年に 3 回、機関誌 *Museum heute* (『博物館の現在』) も発行している。



州政府事務所のオフィス前にて

州政府事務所は、バイエルン州の博物館アカデミーに参加するなど、国内外を問わず外部の博物館に関連する組織・団体とも積極的な連携をはかっているものの、同様の活動を同規模で実施している機関はドイツ国内の他の州にはないという。他州では、個人が博物館に対するコン

サルタント業務をおこなっている場合があるが、このような大規模な機関はバイエルン州に独特なものだという。バイエルン州には、州政府事務所の他にも、ミュンヘン市との共同機関であるミュンヘン博物館教育センター(Museumspädagogisches Zentrum München)があり、博物館の教育普及活動や博物館と学校との連携を支援・振興している。こうした体制は、バイエルン州の政策方針により可能になっており、他州に比べ、バイエルン州が文化政策に熱心であることを反映している。バイエルン州は伝統的に、文化遺産の保護を含めた、芸術・文化振興への取り組みが盛んな州で、州憲法には「文化国家」としての理念が謳われている。それゆえ、博物館に対する行政の支援も充実したものとなっているが、これはドイツでも特異であるという。連邦制をとるドイツでは、州ごとに政策が大きく異なり、教育政策や文化政策においても州によって方針が大きく異なる。博物館の振興や支援についても同様であり、バイエルン州による取り組みはドイツでも先進的なものと考えられる。

【参考 URL】

- ・ バイエルンにおける非州立博物館のための州政府事務所(Landesstelle für die nichtstaatlichen Museen in Bayern)のウェブサイト: <http://www.museen-in-bayern.de/home.html>

(大木真徳／日本博物館協会特別研究員)

第 5 章 資料編

『博物館教育普及活動に関する品質規準』日本語訳の公開にあたって

平成 24 (2012) 年に始まった「博物館における青少年教育」をテーマとするドイツとの交流事業は、当初は2ヶ年の予定であったが、ドイツ側カウンターパートを務めたドイツ連邦博物館教育連盟（以下、BVMP）の要望が両国政府を動かし、1年の延長が認められた。昭和 47 年から実施されてきた文部科学省日独青少年指導者セミナーとしては異例の決定だったことと思う。日本博物館協会は結果的に、平成 26 (2014) 年まで3ヶ年にわたって日本側のカウンターパートを務めたわけであるが、博物館教育の専門家7人をドイツに2週間派遣し、また、ドイツの専門家7人を日本で2週間受け入れるという人的な交流を3回行うなかで、一つ形に残るものとしてこの「博物館教育普及活動に関する品質規準」の日本語訳を世に出すことができ、事務局を務めた者として大変嬉しく思っている。

以下、日本語訳作成の経緯を簡単に記しておく。この規準が初めて日本で紹介されたのは、平成 24 年 11 月のことだった。日本での受入事業の一環として企画実施した全国美術館会議教育普及研究部会（ERG）との交流会において、ドイツ団メンバーのハンネローレ・クンツ＝オット博士 Dr. Hannelore Kunz-Ott がこの規準についてプレゼンテーションを行った。会場は東京都美術館のアートスタディールームで、約 50 名の ERG 会員等が彼女の話聞いたことになる。

日本語への翻訳は、このプレゼンテーションを契機として始められた。プレゼンテーションの逐次通訳の準備のために受け取ったドイツ語のそれを、できれば日本語にして交流会で配布したいと考え、通訳の竹之内悦子さんに仮訳作成を依頼した。残念ながら交流会での配布に間に合わず、ブラッシュアップは次年度以降の課題となった。まずは BVMP の提案で、日本団のための通訳を務められたハイケ・パチケ博士 Dr. Heike Patzschke が修正作業を引き受けてくださった。さらには、平成 25 年度・26 年度の受け入れ事業の通訳、岡本美枝さんに最終的なチェックをお願いした。日本で2週間、あるいはドイツで2週間、ずっとドイツ団や日本団と行動を共にされた方々の手による邦訳であるため、普通の翻訳物より格段に読みやすく仕上がっている。改めて感謝申し上げる。

ドイツでこの「規準」が作成された経緯については、本報告書第4章の大木真徳氏によるレポート「ドイツ連邦博物館教育連盟の『博物館教育普及活動に関する品質規準』について」に詳しく書かれているので、併せてご一読いただきたい。原著を確認されたい場合は BVMP のウェブサイトからダウンロードできる。

平成 24 年の日本でのプレゼンテーションにあたって、ドイツ側から伝えられた英語の表題は「Quality criteria of museums: Education and mediation」であった。“standard”ではなく“criteria”であることを何度も確認した。両者の違いは何かと尋ねたところ、議論好きのドイツ人たちが様々に熱く語ってくれたが、その時は何かの都合で急いでおり、議論が途中になってしまったことが今となっては大いに悔やまれる。たとえば、バナナはかくあるべしというのが standard、ただしそのようなバナナは実在しないとか、criteria は強制的なものではないので使ってもよいし使わなくてもよい、といった話だったと記憶している。このたびの日本語訳で「基準」ではなく「規準」の語を敢えて用いているのは、そうした経緯にもよる。ドイツで作られた一つの尺度でしかないと言ってしまうまでもないが、関係者の総意を形にして世に問うた BVMP の努力に敬意を表するとともに、日本の博物館界にわずかでも刺激を与えることができれば幸いである。

(守井典子／公益財団法人日本博物館協会主任研究員)

ドイツ博物館協会
ドイツ連邦博物館教育連盟

博物館教育普及活動に関する品質規準



翻訳・編集：公益財団法人日本博物館協会
(協力：岡本美枝、ハイケ・パチケ)

博物館教育普及活動に関する品質規準

発行：登記社団ドイツ博物館協会、登記社団ドイツ連邦博物館教育連盟
協力：オーストリア博物館教育文化普及者連盟、メディアムス・スイス博物館教育普及専門職連盟

編集：Dr. Hannelore Kunz-Ott（ハンネローレ・クンツ=オット博士）
編集協力：Stefan Bresky（シュテファン・ブレスキー）、Antje Kaysers（アンティエ・カザース）、Karin Maaß（カーリン・マース）、Peter Schüller（ペーター・シュラー）、Ralph Stephan（ラルフ・シュテファン）、Prof. Dr. Gisela Weiß（ギーゼラ・ヴァイス教授）
原稿審査：Klaus Bzdziach（クラウス・ベジヤハ）
デザイン：blum Design & Kommunikation, Hamburg（ブルーム・デザイン&コミュニケーション社、ハンブルク）
表紙：Hamburger Kunsthalle（ハンブルガー・クンストハレ美術館）、写真：Verena Müller, Hannover（ヴェレーナ・ミュラー、ハノーヴァー）
印刷：Holzer Druck und Medien, Weiler i. Allgäu（ホルツァー印刷&メディア社、アルゴイ地方のヴァイラー）
資金提供：ドイツ連邦州文化財団

©登記社団ドイツ博物館協会、ベルリン、2008年11月
ISBN 978-3-9811983-2-4

目次

4	はじめに
6	序章
8	I 基本方針
10	II 博物館教育の内容
12	III 博物館教育の対象者
15	IV 博物館教育の方法
19	V 教育普及担当職員に求められるスキル
21	VI パートナー
23	博物館教育普及活動に必要な諸条件
25	著者一覧
27	註

はじめに

来館者を中心とした博物館づくりがますます重視されるようになり、ドイツ博物館協会が『博物館に関する規範』（訳注：原語は **Standards für Museen**）を規定したことに代表されるように、博物館としての標準についてより活発に議論されるようになった昨今の社会状況を受け、登記社団ドイツ連邦博物館教育連盟（訳注：以下、**BVMP : Bundesverband Museumspädagogik e.V.**）はこの度、博物館において質の高い教育普及活動を確保・提供するための基礎を文書としてまとめることにした。

BVMP が作成し、ドイツ博物館協会との協同で発表する本書の目的は、博物館教育普及活動という重要な課題において教育サービス提供者の専門性を促進し、品質を向上させることにある。本品質規準は、BVMP に所属するさまざまな分野の博物館・美術館、職業教育・職員教育の実施機関の同僚諸氏の提言により策定された。特に、本品質規準がドイツ、オーストリア、スイスの 3 カ国の博物館協会の協力により策定できたことは喜ばしい限りである。

『博物館教育普及活動に関する品質規準』（訳注：原語は **Qualitätskriterien für Museen: Bildungs- und Vermittlungsarbeit**）の作成に携わり、厳しい意見やアイデアにより本品質規準の完成に寄与されたすべての関係者各位に、この場を借りて心からの謝意を表したい。諸氏の積極的な協力なくして本書は生まれなかったであろう。特に、BVMP の州連合会・地域連合会の代表者ならびに協力機関の同僚諸氏が、2007 年初頭の非公開会議において「品質規準」の原案作りに貢献されたことをここに明記しておきたい。

また、シュテファン・ブレスキー氏、アンティエ・カイザース氏、カーリン・マース氏、ペーター・シュラー氏、ラルフ・シュテファン氏、ギーゼラ・ヴァイス教授におかれては、その強靱な忍耐力と精確さをもって最終的な編集作業に当たり、本書を完成させられたことに心からの謝辞を贈る。

なお、「博物館教育 (Museumspädagogik)」および「教育普及活動 (Vermittlungsarbeit)」という概念については、ドイツ語圏諸国で統一的な定義が確立されていないため、本品質規準ではこれらの概念を同義語として扱うことにした。

本品質規準により、今後、博物館における質の高い教育普及活動に関する議論がより活発に行われることを望む。

Dr. Hannelore Kunz-Ott (ハンネローレ・クンツ=オット博士)、BVMP 会長

Dr. Claudia Peschel-Wacha (クラウディア・ペシエル=ヴァハ博士)、オーストリア博物館教育文化普及者連盟会長

Dr. Simone Thalmann (ズィモーネ・タールマン博士)、メディアムス・スイス博物館教育普及専門職連盟会長

Dr. Michael Eissenhauer (ミヒャエル・アイセンハウアー博士)、ドイツ博物館協会会長

序章

「博物館とは社会とその発展に奉仕する一般に公開された非営利の恒久的な施設で、人々とその環境の有形および無形の証拠を研究、教育および娯楽のために収集、研究、伝達および展示をおこなうものである。」

ICOM による「博物館」概念の定義
ICOM 職業倫理規定（2003 年）より

国際博物館会議 ICOM は、博物館という概念の定義の中で、博物館の根本的機能を挙げている。その定義によれば、博物館は「研究・教育」ならびに来館者の喜び、楽しみ、観賞に貢献する存在である¹。したがって、博物館は、人々が展示物との間に多様なつながりを築くためのコミュニケーションの場とも言える。つまり、博物館教育、教育普及活動とは、人間と展示物をつなぐかけ橋なのである。

近年の政治、経済、文化、社会の変化を背景に、社会も博物館もあらたな課題に直面している。現在の教育をめぐる議論は博物館への圧力を強め、社会の中で博物館が担うべき役割の重要性を強調している。収集、保存、研究、伝達という博物館が持つ独自の使命の中でも、博物館における教育普及活動は、ますますその重要性を増しているのである。また、今日では、来館者を中心とした博物館づくりこそ、博物館の活動における明確な主要課題となっている²。

こうしたパラダイムシフトは 1970 年代に始まった。当時、「ミューズの神殿から学びの場へ」³ や「あらゆる人々のための文化」⁴ といったスローガンと結びつけられていたこのパラダイムシフトは今日、博物館の基本理念に教育普及活動が加えられたことでますます加速している。2006 年にライプツィヒで、2007 年にフランクフルト・アム・マインで開催されたドイツ博物館協会の総会では、博物館教育こそ、博物館が担うべき将来性のある重要な責務であると定義された。ここで重視されたのは、観衆を動員することを目的としたその場限りの短期的なイベントを開催したり、来館者数の増加のみを目指したりするのではなく、質の高い持続的な体験や、変化に富んだ個人的な習熟プロセスを、いかに来館者に提供するか、という点である⁵。博物館とは、社会のあらゆる層が文化遺産に親しみ、その価値を共有できるように貢献すべき存在なのである。

本品質規準は、政治的責任を担う人々や博物館の運営機関、運営者に向けて作成されたものであり、こうした立場にある個人や団体に教育普及活動の多様性を説明するものである。同時に、博物館における教育普及分野において正規雇用の専門職員あるいはフリーランスの専門スタッフが自己評価・査定を行う際に、参考資料として活用できる構成になっている。

本品質規準の冒頭には、博物館教育普及活動における基本方針、すなわち活動領域ならびに課題と目標が挙げられている。それに続き、博物館教育の内容、対象者、教育普及の方法、担当職員の適正・能力、パートナー、必要条件といった、教育普及活動の6つのテーマを扱う。

I 基本方針

博物館教育普及活動とは、博物館・展覧会の展示物・コンテンツと来館者との間に対話を形成するものである。教育普及活動は、博物館のコンテンツを具体的に説明し、観賞者に対して疑問を提起し、挑発し、刺激し、新しい視野を開かせる。教育普及活動はすべての来館者を対象としており、来館者は教育普及活動を通じて、さまざまな方法で博物館とそのコンテンツから利益を得ることができ、博物館を知識の宝庫かつ体験の場として自主的に活用し、熟考することができる。教育普及活動は博物館という機関において不可欠な要素であり、指導的かつ持続的に博物館教育という使命を遂行するものである。

博物館における教育普及活動とは

博物館教育は、来館者を中心とした博物館づくりや、各博物館のジャンルに特化した教育普及活動に関するあらゆる問題を取り扱う。そのため、博物館で展示やイベントを企画・実施する際は必ず、企画当初より博物館教育を考慮に入れるべきである。それによって、展示物との出会いから始まる教育プロセスを、すべての来館者が最も良い形で享受することが可能になるのである。博物館教育とは、すべての来館者のための教育プロセスを企画・準備し、これを見守る活動である。

教育普及活動の役割

博物館における教育普及活動の役割は、以下の通りである。

- ・ それぞれの博物館・美術館の基本理念に合致した教育コンテンツを定義する
- ・ 博物館教育の対象者が主役となれる適切なプログラムを展開するために、来館者の構成と要望を分析する
- ・ 多様多様なプログラムにより、可能な限り多くの来館者層に文化教育を享受できる場を提供する
- ・ 職員や媒体による教育普及構想を開発し、実現する
- ・ 来館者の視点に立った、来館者に親しみやすい博物館づくりに貢献し、来館者が理解・観賞できるように努める
- ・ 博物館と他の教育・文化施設との間にインターフェースを構築し、長期的な協力体制を確立する
- ・ 教育普及プログラムを定期的に評価・査定し、その効果を検討し、品質を確保する

課題と将来への展望

・ どの年齢層にも学びの場を提供する

学習に対する考え方が常に変化するの、博物館においても例外ではない。そのため、個別のニーズに合ったインフォーマルラーニングとしての学びの場を、あらゆる人々が生涯を通じて得られる環境を整備する必要がある。

・ 多極化の進む社会

博物館教育普及活動は、文化の統合プロセスに必要な条件を創出し、異文化間の相互理解を深める能力を育む。

・ アイデンティティの確立に寄与する博物館の機能

博物館教育普及担当の専門職員（訳注：以下、ミュージアム・エデュケーター）は、博物館が情報交換や議論の場としての役割を果たす際にサポートを行う存在である。ミュージアム・エデュケーターは、来館者が文化遺産と触れ合い、過去・現在・未来をテーマとした社会的議論に参加することを促す。

・ 館蔵品の拡張、意義の多様性、新しいものに対する受容能力

博物館の収集は終わりのない作業であり、展示物の意義は多種多様であり、展示方法をひとつに固定することはできない。博物館教育普及においては常に、斬新かつ創造的な手法が必要とされるのはそのためである。これを実現するためには、実験を行い、あらたな手法やこれまでにない教育普及の形態を開発するための受容能力が求められる。

Ⅱ 博物館教育の内容

博物館教育とは、それぞれの収蔵品や展示を基に、情報や体験を提供する活動である。同時に、展示物にふさわしい、全人的かつ専門領域を超えた活動であり、今の時代との関係と行動を促すための指針を示すことから、来館者は博物館教育によりさまざまな関連性を知ることができる。教育活動は博物館という機関を理解しやすいものにし、来館者が展示物との個人的なつながりを築くための手助けとなる。

収蔵品に特化した博物館教育

博物館教育普及活動の起点かつ中心となるのは収蔵品である。収蔵品の内容は、考古学博物館、民族学博物館、野外民俗博物館、記念館、歴史博物館、文化史博物館、美術館、自然博物館、技術・産業博物館、民俗学博物館によって大幅に異なる。したがって、博物館教育を実施する際は、博物館のジャンルに応じて、収蔵品の特性に沿った内容と形態を考慮すべきである。例としては、手工芸技術のデモンストレーション、歴史的機器・機械の実演、美術の歴史的発展の説明、鑑識眼・審美眼の開発、歴史的関連性の説明、民主主義への意識強化、異文化に対する理解の啓発、環境意識の向上などが挙げられ、博物館の種類と同様、博物館教育普及活動には多種多様なアプローチがある。

展示物にふさわしい手法で行われる博物館教育

博物館は、展示物を歴史の証として提示し、その複雑な内容と多様な解釈の可能性を伝える場である。展示物をさまざまな関連性や背景とともに供覧することで、観賞者は展示物の多面性を理解することができる。博物館において質の高い教育普及活動を提供するには、展示物の内容だけではなく、展示物の保存にもふさわしい手法を考慮しなければならない。

現在との関連性

博物館は、未来のために保存し、現在においては方向性を示すという目的で、過去の証を収集する。特に、博物館における教育普及活動には、展示物と今の時代との関連性を来館者により理解しやすいものにする使命がある。現在と関連づけたプログラム構成により、観賞者はより容易に認識を深めることができる。

行動を促すための指針

自ら調査、発見、あるいは創作するといった、来館者の活動を促すような展示構成や教育普及プログラムは、来館者のモチベーションを特に上げるものである。こうした展示やプログラムは、学習プロセスを支え、展示物など、博物館が提供するコンテンツや、学術調査・研究の手法を理解しやすくするための助けとなる。

機関としての博物館と、各博物館が扱う専門分野への理解

「博物館」という機関を紹介する際には、その学術研究の方法と目的も同時に伝えられなければならない。また、来館者が考古学、生物学、民族学、美術史、民俗学といった、各博物館が扱う専門分野の研究方法について手ほどきを受けられるような機会も提供すべきである。

「博物館教育の内容」のチェックリスト

- ・ 収蔵品の特性に沿っているか
- ・ 展示物にふさわしいか
- ・ 現在との関連づけがなされているか
- ・ 行動を促すための指針となっているか
- ・ 全人的な教育内容になっているか
- ・ 専門領域を超えた活動になっているか
- ・ 専門分野の研究方法の紹介がなされているか
- ・ 博物館の果たすべき役割、機能、活動の仕方に沿っているか
- ・ その他

Ⅲ 博物館教育の対象者

博物館教育普及活動に携わるエデュケーターは、すべての来館者のために、またすべての来館者とともに活動する。来館者の要望はそれぞれに異なることから、ミュージアム・エデュケーターは、博物館が提供する文化教育にできるだけ多くの人々が参加できるよう、すべての来館者層だけではなく、今後、来館者となる可能性のある人々のためにも、プログラムを開発すべきである。

来館者層に応じて細分化されたプログラムづくり

博物館には、あらゆる年齢層、社会層の人々が来館する。そのため、具体的なプログラムづくりの段階でも広報活動を行う際にも、**博物館教育の対象者に応じた細分化**が必要である。博物館教育の対象者の文化的背景や関心のある分野、博物館に求める内容、来館の理由、心理的・身体的欲求、予備知識など、対象者について知ることが質の高い博物館教育を提供する際には必ず必要となる基本である。こうした条件が、博物館への来館、また、来館者が展示物や展示内容と対峙する姿勢を左右する。

博物館における教育普及活動は、すでに来館者であり、今後もリピーターとして来館が予想される人々を対象とする一方で、「**非来館者**」、つまり博物館教育に何らかの理由で参加していない、あるいは参加できない人々にも向けられている。

「博物館教育の対象者」のチェックリスト

個人および団体での来館者

- ・ 独身者
- ・ カップル
- ・ 家族
- ・ 友人同士
- ・ リピーター
- ・ 観光客
- ・ 初めての来館者
- ・ インターネット利用者
- ・ 企業の職員

年齢層

- ・ 幼児、幼稚園児
- ・ 児童・生徒
- ・ 職業訓練生
- ・ 学生
- ・ 就業年齢の成人
- ・ 高齢者

出身地

- ・ 地元市町村
- ・ 近隣地域
- ・ 遠方地域
- ・ 外国

特別な事情のある博物館教育の対象者

- ・ 障害者
- ・ 移民の背景を持つ人々
- ・ 未来館者、非来館者

来館の動機

- ・ 教養のため
- ・ 楽しみのため
- ・ 観賞のため
- ・ 余暇活用のため
- ・ 専門的な関心がある
- ・ コミュニケーション
- ・ 社会とのつながりをもちたい

来館者の所属先

- ・ 幼稚園、保育園
- ・ 小学校から高校までの教育機関
- ・ 青少年教育施設
- ・ 成人教育を行う機関
- ・ 総合大学および単科大学
- ・ 団体、クラブ

広報とサポート

- ・ 博物館教育に携わる青少年指導者
- ・ 寄付者、スポンサー
- ・ 後援会や友の会の会員

バリアフリーであること

多様なプログラムを提供することで、すべての人々に対して**知的、社会的、知覚的、身体的なバリアのない状態**で博物館とその展示物へのアクセスを可能にすることは、教育普及活動における使命のひとつである。

「バリアフリー」のチェックリスト

- ・ 博物館の建物の構造と展示構成がバリアフリーになっているか
- ・ プログラムやイベントがバリアフリーな構成になっているか
- ・ バリアフリーなサービスが提供できているか
- ・ 障害者が来館した際にいつでも対応できる職員が常駐しているか
- ・ 障害者自助団体との連携があるか
- ・ 教育普及活動の参加者と協力し、次の人々が来館しやすい環境を整備する
 - ドイツ語を母語としない人々
 - 運動機能が制限されている人
 - 聴覚障害者
 - 弱視および視覚障害者
 - 学習障害を持つ人々
 - 精神障害あるいは知的障害のある人々

IV 博物館教育の方法

実物の展示物（オリジナル）や展示内容、また、博物館そのものとの出会いを円滑に実現するため、質の高い教育普及活動を目指す際には多種多様な方法が用いられる。質の高い教育普及活動はこうして来館者の認識と知覚を活性化させ、来館者が五感すべてを使って自発的に学べるよう、多種多様な手法を用いて手助けを行う。

来館者を中心に据えた展覧会の企画・デザイン

展示は博物館教育普及活動の根本である。展覧会を企画・デザインする際には、来館者を主役とする考え方を重視し、教授法の経験や知識を考慮に入れるべきである。

「展覧会の企画・デザイン」のチェックリスト

- ・ 順路と順路図
- ・ 展示物の配置
- ・ 展示物の説明書き、解説パネル
- ・ パソコン等、適切なメディアに関しての情報
- ・ 照明
- ・ 展示エリアの間仕切り
- ・ 椅子等の設置
- ・ その他

エデュケーターによる教育普及活動の多様性

来館者と直接コミュニケーションを取ることで、ミュージアム・エデュケーターは来館者の質問や関心事項に直接耳を傾け、適切な対応をとることができる。エデュケーターはこの時、対象者にふさわしい方法を選択し、教育普及活動への参加者のニーズに応えなければならない。エデュケーターは自身の裁量により、多種多様な方法で教育プログラムを構成することができる。

「エデュケーターによる教育普及活動」のチェックリスト

口頭によるプログラム

- ・ ガイドツアー、対話型ガイドツアー
- ・ 生徒による生徒のためのガイド、高齢者による高齢者のためのガイド、等

- ・ 座談会
- ・ グループディスカッションおよびディスカッションイベント
- ・ パネルディスカッション
- ・ アーティストや専門家を招いたトークイベント
- ・ 講演会

行動を促すプログラム

- ・ 参加型プログラム
- ・ 造形プログラム
- ・ 模写・模造
- ・ 手工芸的な創作プログラム
- ・ 機械の操作デモンストレーション

専門領域を限定しないプログラム

- ・ 昔の遊び／昔の生活の再現／歴史的事件の再現
- ・ 実験考古学の手法を駆使したプログラム
- ・ 演劇や舞踏による表現
- ・ 文学的アプローチによるプログラム
- ・ 比較音楽学的アプローチによるプログラム

ゲーム／連想

- ・ 連想ゲーム
- ・ 「中国の籠」
- ・ クリエイティブ・ライティング
- ・ その他

媒体による教育普及活動の多様性

来館者に行動を促し、展示物についての認識をさらに深めることのできる充実した情報を発信するためには、展示要素を的確に使用すべきである。展示要素とは、観賞者に展示内容を伝え、展示物および展示テーマと対峙するためのあらたな動機と機会を繰り返し提供する、さまざまな媒体を意味する（訳注：展示要素は媒体であり、展示物ではない）。

「媒体による教育普及活動」のチェックリスト

教授法上、必要となる媒体

- ・ 実験
- ・ 双方向型体験ステーション
- ・ 探し物ゲーム、学習ゲーム
- ・ ガイド用かご、ガイド用カート
- ・ 触ったり、試したりできる要素（ハンズ・オン＝直接手で触れて体験すること）
- ・ ミュージウム・スーツケース（訳注：博物館外での教育普及活動に使用）

テキスト

- ・ 文章や図のパネル
- ・ 展示室の内容・テーマを解説するカード
- ・ 読書・閲覧エリア
- ・ 子ども用カタログ
- ・ 学校教員用のガイドや評価シート
- ・ ワークシート
- ・ ショートガイド
- ・ ブライユ点字で書かれた文章／音声ガイドステーション

メディア

- ・ 音声ガイドおよびマルチメディア・ガイド
- ・ 映画・ビデオ
- ・ パソコン・ステーション
- ・ その他

同時開催のイベントプログラム

来館者層に応じて細分化されたイベントを用意することで、展示物や展示テーマと対峙する動機を来館者に繰り返し提供することができる。その結果、複雑な内容が徐々に理解可能なものとなり、人々の関心を引き覚ますことができ、教育普及活動の新規対象者へのアプローチとさらなる来館者の獲得が可能になる。

「同時開催イベントプログラム」のチェックリスト

- ・ ガイドツアー
- ・ トークイベント（パネルディスカッション、等）

- ・ ワークショップ
- ・ シリーズ講演会
- ・ 講習会およびセミナー
- ・ 教員および博物館教育に携わる青少年指導者を対象とした研修
- ・ 夏休み／冬休みプログラム
- ・ 子どもの誕生日会の開催
- ・ 夜間イベント
- ・ ミュージアム・フェスティバル
- ・ 異文化に触れるイベントや活動
- ・ 国際博物館の日
- ・ 特別夜間開館日、夜間延長開館日
- ・ 特別プログラムの開催日
- ・ その他

記録、検証、評価

教育普及活動の遂行にあたっては、品質を繰り返し検証することが求められる。教育普及活動の内容は、言葉や写真で記録するだけでなく、さらなる発展の可能性を評価・査定によって常に確認し、プログラムの改善を繰り返すことで、さらに充実したものになるよう、務める必要がある。

「評価」のチェックリスト

- ・ ゲストブック
- ・ 投書箱
- ・ 個人の来館者や特定のグループへのインタビュー
- ・ アンケート
- ・ 事前評価（訳注：展覧会開催前に実施）
- ・ 同時評価（訳注：展覧会の開催と同時に実施）
- ・ 総括的評価（訳注：展覧会開催後に実施される総合評価）
- ・ その他

V 教育普及担当職員に求められるスキル

博物館教育普及活動においては、多種多様な課題に対応しなければならない。そのため、ミュージアム・エデュケーターには、館藏品に関する専門知識や、教育学の見地から問題を提起するための専門知識など、高いスキルが求められる。このほか、博物館学の基礎知識、コミュニケーション能力、人と関わることに喜びを見いだす能力、積極性などが、適正として不可欠である。

ミュージアム・エデュケーターになるために必要な教育

博物館で専任のミュージアム・エデュケーターとして活動するには、大学で人文・社会・自然科学のいずれかを専攻するか、コミュニケーション科学、博物館学、教育学を修めて卒業した者でなければならない。

求められる**専門知識**は博物館の種類によって異なるが、自然史や技術史、精神科学あるいは人文科学を専修する学科で修得できるレベルや内容を指す。**博物館学の知識**とは、機関としての博物館とその多様な任務、博物館のジャンル、組織構成、運営機関に関する知識を意味する。さらに、**一般教育学**の基礎知識やさまざまな学習理論の知識を持ち、各専門分野の教授法に精通していることが、来館者と直接、触れ合う職務を遂行する上での基礎となる。

博物館教育において独自に求められるスキル

来館者研究に関する知識は、博物館教育の対象者にふさわしく、また、来館者が主役とされる教育プログラムを提供するための基本である。

博物館教育において、言語は重要な媒体である。したがって、非言語コミュニケーションと同じように、言語を使って効果的に表現する能力も、必要とされる**コミュニケーション能力**である。**メディアリテラシー**も、博物館において時宜にかなった展示を行い、教育普及活動を遂行するためには欠かせない能力である。

博物館教育普及活動という職業においては、正規雇用の専門職員だけではなく、フリーランスやボランティアのスタッフも従事している。そのため、管理職のポジションにあるミュージアム・エデュケーターには**人事管理**の知識も必要である。ここでは、職員への指導のほか、職員の職業訓練や職員研修も職務範囲とされる。

プロジェクトマネジメントの基礎知識は、広範な教育普及プログラムの企画、準備、調整、実現で成果を上げるのに不可欠である。

専門知識以外では、来館者や同僚、連携機関とやり取りする上での自覚や社会的スキルが、**職業人としての必須条件**である。自己批判能力や向上心も、必要とされる特性に数えられる。また、職務上、複雑な課題と向き合わなければならないことから、**夢中になれる能力と積極性**が十分に備わっている必要がある。さらに、教育普及活動に従事する者は、夜間や週末などの勤務時間に対しても柔軟に対応できなければならない。

必要とされる能力や知識の多くは、ミュージアム・エデュケーターとして活動しながらでも修得できるものである。そのためには、継続教育や研修を受ける心構えが常にできていることが必要である。

「教育普及担当職員に求められるスキル」のチェックリスト

- ・ 大学卒業資格
- ・ 館藏品に関する専門知識
- ・ 博物館学の知識
- ・ 教育学的なスキル
- ・ 異文化に対する理解力
- ・ 各専門分野の教授法に関する知識
- ・ 言語によるコミュニケーション能力
- ・ 非言語コミュニケーション能力
- ・ メディアリテラシー
- ・ 事務能力
- ・ プロジェクトマネジメントの知識
- ・ 人事管理の知識
- ・ 部署を統括し、フリーランス・スタッフを調整するマネジメント能力
- ・ チームワークにおける協調性
- ・ 夢中になれる能力と積極性
- ・ 継続教育や研修に対する心構え
- ・ その他

VI パートナー

ミュージアム・エデュケーターは数多くのパートナーと連携してプログラムを遂行する。他の教育・文化施設、団体・クラブ、連盟との連携は、相互の情報交換や勤務する博物館からのサポートと同様、ミュージアム・エデュケーターの活動にとって重要である。

博物館内のパートナー

ミュージアム・エデュケーターは、すべての展覧会および博物館の企画時に早期の段階から携るべきである。ミュージアム・エデュケーターは来館者サービスと協力し、友の会やスポンサー、市民ボランティアへの対応をサポートし、広報担当職員とも連携しながらプログラムの企画・計画を行う。

外部のパートナー

博物館教育普及活動は、博物館教育プロジェクトの推進に重要となり得る公共施設、財団、企業や個人とのネットワークによって具体化される。そのため、政治・文化・教育関連施設や社会福祉施設、また、観光・レジャー産業、報道・メディア、団体・クラブ、企業、連盟といったパートナーとの連携が、専門的なサポートを獲得し、さまざまな層の来館者に直接アプローチするために必要である。また、市町村・地域レベル、また地域を超えたレベルで、さまざまな分野のパートナーと協力したプロジェクトを実現するための努力が求められる。さらに、教育普及活動を博物館外部のより幅広いネットワークに連結できるよう、こうした協力体制は強化されなければならない。同時に、博物館外部のパートナーが持つ経験や期待が博物館内部へと伝えられるコミュニケーション経路も確立すべきである。

「パートナー」のチェックリスト

- ・ 文化政策関連の行政窓口
- ・ 他の博物館
- ・ 報道、メディア
- ・ 幼稚園
- ・ 学校
- ・ 青少年センター
- ・ 少年文化館
- ・ 大学
- ・ 民間の社会教育施設
- ・ 観光施設
- ・ 団体・クラブ
- ・ 連盟、企業
- ・ 財団
- ・ スポンサー
- ・ 専門家
- ・ その他

博物館教育普及活動に必要な諸条件

ミュージアム・エデュケーターは、高い品質と専門性をもって任務を遂行するため、相応に整備されたインフラ、物的・人的・資金的資源、基本理念に基づいたサポートを必要とする。

展示エリア

博物館内で一般の立ち入りが可能なエリアでは、**可能な限り来館者に配慮した設備**が求められる⁶。こうした公開エリアは、案内表示を使って見つけやすく、バリアフリーにアクセスでき、機能的で親しみやすく、美しいデザインで設計されるべきである。また、公開エリア内では情報とコミュニケーションをいつでも確保できるよう、配慮されていなければならない。展示物はすべての来館者が見やすいように設置され、専門的な情報はわかりやすく表現し、休憩や談話を楽しむためのスペースや椅子を用意する必要がある。

博物館教育普及活動のためのエリア

来館者との活動は、一般の立ち入りが可能な展示エリアだけで行われるのではない。そのため、工房やアトリエ、資材保管庫を備えた来館者のためのラボ、セミナー・レクチャー・プレゼンテーション用のスペースなど、**専用エリア**を設けるべきである。「舞台裏」で継続的に行われる企画・事務作業には、最新の技術を備えたオフィスやフリーランス・スタッフのための控室、打ち合わせスペースが必要である。

サービスエリア

来館者のためのインフォメーションセンター、レジ、団体用クローク、トイレ、喫茶室、ミュージアムショップ、休憩スペース、待ち合わせエリアなど、博物館内で一般の立ち入りが可能なサービスエリアは、施設の中央に設置すべきである。こうしたサービスエリアは、手入れが行き届き、明るく親しみを感じさせ、子どもの居場所としてふさわしく、バリアフリーに設計されている必要がある。

人材の確保

実り多く、継続性のある教育普及活動のバックボーンを支えるのは、**正規雇用のミュージアム・エデュケーター**である。ミュージアム・エデュケーターを正規雇用することは博物館職員の採用計画で定められており、給与は受けた教育と任務内容に応じて査定される。

任務範囲の規模によっては、同様のスキルを備えたフリーランス・スタッフのサポートを受ける。フリーランス・スタッフには、博物館で長期的に勤務できるように適正な報酬が支払われなければならない。人材育成や研修による職員のスキル向上に必要な財源は、州の年間予算で確保されている。

財源

人事予算のほか、教育普及活動のための資材調達、記録・公表、情報・広報資材の収集、企画・事務作業、プロジェクト、教育普及のための企画展示を遂行するため、博物館教育普及活動専用の予算が必要である。教育普及部門は、必要があれば外部資金を調達し、教育普及活動に用いる。

基本理念に基づいたサポート

博物館教育普及活動は、博物館が果たすべき使命として博物館の基本理念に定義されている。博物館の運営機関と理事には、博物館が教育普及活動という使命を遂行するために必要な諸条件を整備する任務がある。博物館の運営機関と理事は、教育普及の理念が博物館全体に浸透するよう、努めなければならない。

「博物館教育普及活動に必要な諸条件」のチェックリスト

- ・ 来館者に親しみやすい展示エリアとなっているか
- ・ 博物館教育普及活動のための専用エリアが確保されているか
- ・ サービスエリアが整備されているか
- ・ スキルを備えたスタッフが十分に確保されているか
- ・ 人事と設備のための財源が確保されているか
- ・ 基本理念に基づいたサポートが提供されているか
- ・ 博物館が果たすべき使命として基盤が確保されているか
- ・ その他

著者一覧

- Ulrich Brand-Schwarz, Museum Herxheim (ウルリヒ・ブランド＝シュヴァルツ、ヘルクスハイム博物館)
- Stefan Bresky, Deutsches Historisches Museum, Berlin (シュテファン・ブレスキー、ドイツ歴史博物館、ベルリン)
- Renate Dittscheidt-Bartolosch, Sprengel-Museum Hannover (レナーテ・ディットシヤイト＝バルトロシュ、シュプレングエル博物館、ハノーヴァー)
- Hans-Georg Ehlers-Drecol, Museumsspeicher Stade (ハンス＝ゲオルク・エーラーズ＝ドレコル、シュターデ博物館)
- Dr. Andreas Grünewald-Steiger, Bundesakademie für kulturelle Bildung, Wolfenbüttel (アンドレアス・グリュネヴァルト＝シュタイガー博士、ドイツ連邦文化教育アカデミー、ヴォルフエンビュッテル)
- Thomas Hafen, Schwarzwälder Freilichtmuseum Vogtsbauernhof, Gutach (トーマス・ハーフェン、シュヴァルツヴァルト地方野外民家園フォークツ・パウアーンホーフ、グータッハ)
- Antje Kayzers, Badisches Landesmuseum Karlsruhe (アンティエ・カイザース、バーデン州立博物館、カールスルーエ)
- Prof. Dr. Stephan A. Kolfhaus, Fachhochschule Solingen (シュテファン・A・コルフハウス教授、ゾーリンゲン単科大学)
- Elke Kollar, Bamberg (エルケ・コラー、バンベルク)
- Dr. Hannelore Kunz-Ott, Landesstelle für die nichtstaatlichen Museen in Bayern, München (ハンネローレ・クンツ＝オット博士、バイエルン州内の非州立博物館のための州事務所)
- Ute Lefarth, Kunstmuseum Wolfsburg (ウーテ・レファルト、ヴォルフスブルク美術館)
- Karin Maaß, Saarbrücken (カーリン・マース、ザールブリュッケン)
- Dr. Ulrich Paatsch, Arbeitsgruppe für empirische Bildungsforschung e.V., Heidelberg (ウルリヒ・パーチュ、登記社団「実験教育研究会」、ハイデルベルク)
- Elke Schaar, Stadtgeschichtliches Museum Leipzig (エルケ・シャール、ライプツィヒ市史博物館)
- Karin Schad, Rheinisches Landesmuseum Bonn (カーリン・シャード、ライン州立美術館、ボン)
- Peter Schüller, K20 K21, Kunstsammlung Nordrhein-Westfalen, Düsseldorf (ペーター・シュラー、K20K21 ノルトライン＝ヴェストファーレン州美術館、デュッセルド

ルフ

- Ralph Stephan, Archäologisches Hegau-Museum, Singen (ラルフ・シュテファン、ヘーガウ考古学博物館、ズィンゲン)
- Prof. Dr. Gisela Weiß, Studiengang Museologie, Hochschule für Technik, Wirtschaft und Kultur, Leipzig (ギーゼラ・ヴァイス教授、ライプツィヒ技術・経済・文化大学、博物館学)
- Dr. Claudia Peschel-Wacha, Österreichisches Museum für Volkskunde, Wien / Österreich und Vorsitzende des Österreichischen Verbands der KulturvermittlerInnen im Museums- und Ausstellungswesen (クラウディア・ペシエル＝ヴァッハ博士、オーストリア民俗学博物館、オーストリア／ウィーン、オーストリア博物館教育文化普及者連盟会長)
- Dr. Simone Thalmann, Präsidentin von Mediamus – Schweizerischer Verband der Fachleute für Bildung und Vermittlung im Museum, Heimberg / Schweiz (ズィモーネ・タールマン博士、メディアムス・スイス博物館教育普及専門職連盟会長、スイス／ハイムベルク)

諸氏の厳格な校閲に対し謝辞を贈る：

- Franziska Dürr, Aargauer Kunsthhaus, Aarau / Schweiz, und Lehrgang Kuverum / Schweiz (フランツィスカ・デュル、アールガウ美術館、スイス／アーラウ、ミュージアム・エデュケーターのための継続教育機関クヴェルム所属)
- Dr. Carola Marx, Sächsisches Staatsministerium für Kultus, Dresden (カローラ・マルクス博士、ザクセン州教育省、ドレスデン)
- Dr. Rolf Voss, Vorstandsmitglied des Deutschen Museumsbundes, Regionalmuseum Neubrandenburg (ロルフ・フォス博士、ドイツ博物館協会理事、ノイブランデンブルク市地方博物館)
- Nicole Zellweger, freiberufliche Kulturvermittlerin und Vorstandsmitglied von Mediamus, Bernex / Schweiz (ニコル・ツェルヴェーガー、フリーランス・エデュケーター、メディアムス理事、ベルネックス／スイス)

-
- ¹ ICOM のドイツ、オーストリアおよびスイスの各委員会の公式ドイツ語翻訳とは違い、本書では英語版の「for purposes of study, education and enjoyment」は「研究、教育、娯楽のために」と訳されていない。ドイツ博物館協会は既に、「enjoyment」のよりの確な訳語は「喜び、楽しみ、享受」である、と指摘してきた：Standards für Museen, hg. vom Deutschen Museumsbund e.V., gemeinsam mit ICOM-Deutschland, Kassel/Berlin（登記社団ドイツ博物館協会と ICOM ドイツ委員会の共同編集「博物館のための標準」、カッセル/ベルリン）2006 年 P.22、註 1
- ² Bernhard Graf: Besucherorientierung als Leitziel der Museumsarbeit in der Bundesrepublik Deutschland. In: Geöffnet! Das Museum für den Besucher. Tagungsbericht des 10. Bayerischen Museumstags. München（ベルンハルト・グラーフ著『ドイツ連邦共和国の博物館活動における主要目標としての来館者指向』、「開かれた！来館者のための博物館 第 10 回バイエルン州博物館の日の大会報告書」所収、ミュンヘン）2000 年、P.21～29
- ³ Ellen Spickernagel und Brigitte Walbe（Hg.）: Das Museum. Lernort contra Musentempel. Gießen（エレン・シュピカーナーゲル&ブリギッテ・ヴァルベ編集：『博物館、学びの場 VS ミューズの神殿』、ギーセン）1979 年
- ⁴ 1970～1993 年までフランクフルト・アム・マイン市の文化部門責任者を務めたヒルマー・ホフマンの本のタイトルである。Hilmar Hofmann: Kultur für alle. Perspektiven und Modelle. Frankfurt am Main.（ヒルマー・ホフマン著「全ての人のための文化、展望とモデル」フランクフルト・アム・マイン、1979 年
- ⁵ このことは、とりわけ「イベントは引きつけ、内容はつなぐ」という大会名で行われたボンの BVMP 2000 年大会によって明確にされた。これに関しては、Beatrix Commandeur、Dorothee Dennert（Hg.）: Event zieht - Inhalt bindet. Besucherorientierung auf neuen Wegen. Bielefeld（ベアトリクス・コマンデュア及びドロテー・デナート編集『イベントは引きつけ、内容はつなぐ。新たな道を歩む来館者指向』ビーレフェルト、2004 年参照。
- ⁶ Judy Rand: The 227-Mile Museum, or, Why We Need a Visitors' Bill of Rights. In: Curator - The Museum Journal（ジョディ・ロンド著『227 マイル博物館、あるいはなぜわれわれには来館者の「民権条例」が必要なのか』「博物館ジャーナル 44」2011 年 1 月 1 号 P.7 以下所収、Hermann Schäfer: Anlocken - fesseln - vermitteln. Was Besucherforschung uns lehrt (e): ein Plädoyer für die Grundrechte der Besucher. In: Annette Noschka-Roos（1Hg.）: Besucherforschung in Museen. Instrumentarien zur Verbesserung der Ausstellungskommunikation. Deutsches Museum（ヘルマン・シェーファー著『引きつけ、魅了し、伝える。来館者研究がわれわれに教えたこと、教えること。来館者の基本的権利に賛成する弁論』（アネッテ・ノシュカ＝ロース編集「博物館来館者研究、展示コミュニケーション改善のための手段」、ドイツ博物館）2003 年 P.83～109 所収

付 録

平成26年度「青少年国際交流推進事業」実施に関する公募要領

1. 事業名

平成26年度「青少年国際交流推進事業」

2. 事業の趣旨

国内外の青少年指導者及び次代を担う青年リーダー、高校生の海外派遣・日本招へいを行い、内外の青少年の現状・課題点等についての意見交換や、青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流事業を実施する。

3. 委託事業の実施

下記「4. 委託事業の内容」の相手国側実施団体と連絡・調整し、青少年国際交流推進事業を実施する。

(1) 派遣

日本国内において、相手国に派遣する人員の募集・選考を行い、日本団の派遣を行う。

(2) 受入

相手国からの派遣団の受入れ、下記「4. 委託事業の内容」の趣旨・テーマ等に沿った適切なプログラムを作成し、実施する。

4. 委託事業の内容

(1) 日独青少年指導者セミナー

① A1・A2

I. 趣旨

相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築する。

II. テーマ

共通テーマ「困難を抱える青少年などの支援」

A1 テーマ「学校から社会への移行」

※不就労(ニート)、引きこもり等学校や社会への参画、職業への移行支援を学ぶ

A2 テーマ「社会全体で青少年を育む」

※青少年の自立への支援として、不登校やネット依存等家庭・学校・地域での取り組みを学ぶ

III. 募集対象

A1・A2ともに上記テーマに携わる青少年教育指導者

IV. ドイツ国側実施団体

A1：ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関

A2：ベルリン日独センター

V. 実施期間及び人数

派遣：各9名（A1・A2）

平成26年10月5日（日）日本発～10月19日（日）日本着
（平成26年10月18日（土）ドイツ発）

受入：各9名（A1・A2）

平成26年5月11日（日）日本着～5月24日（土）日本発
（平成26年5月10日（土）ドイツ発）

Ⅵ. その他

事業受託団体は、文部科学省とドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省との公式協議にオブザーバーとして参加するとともに、公式協議に係る事務もあわせて実施すること。

②B 1 (スポーツ分野)

I. 趣旨

相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築する。

II. テーマ

スポーツによる社会貢献

III. 募集対象

上記テーマに携わる青少年教育指導者

IV. ドイツ国側実施団体

ドイツスポーツユーゲント

V. 実施期間及び人数

派遣：7名 15日間（発着日含む）10月（予定）

受入：7名 15日間（発着日含む）11月（予定）

③B 3 (芸術分野)

I. 趣旨

相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築する。

II. テーマ

博物館における青少年教育

III. 募集対象

上記テーマに関係する青少年指導者

IV. ドイツ国側実施団体

連邦青少年文化教育連合会

V. 実施期間及び人数

派遣：7名 15日間（発着日含む）11月（予定）

受入：7名 15日間（発着日含む）9月（予定）

(2) 日独勤労青年交流事業

【略】

(3) 日独学生青年リーダー交流事業(ドイツ側は、「日独青年ボランティア交流事業」としている)

【略】

(4) 日韓高校生交流事業

【略】

(5) 全事業共通

- ① 派遣事業においては、参加者事前研修を実施すること。
- ② 派遣事業においては、事業終了後に参加者へのアンケート調査を行い、そのまとめを報告書に記載すること。
- ③ 日本国内で発生する経費について計上することとし、ドイツ国内で発生する滞在費は計上しないこと。
例えば、派遣事業における経費は、ドイツに到着するまで及び日本国に到着してからの滞在費、保険料等を計上すること。また、受入事業における経費は、相手国訪問団が日本国に到着後から出発するまでに発生する通訳に要する経費、交通費、宿泊費、食費、研修経費等を計上すること。
- ④ 不測の事態により、参加者数の増減や日程が変更される可能性がある。
- ⑤ 上記(1)～(3)の派遣・受入事業においては、相手国実施団体と緊密な連携体制を構築すること。
- ⑥ 上記(1)～(3)の受入事業においては、2都市(大都市・地方都市)を訪問すること。また、ホームステイの実施に努めること。
- ⑦ 事業実施に当たっては、スポーツ・青少年局委託事業事務処理要領、青少年国際交流推進事業委託要項及び青少年国際交流推進事業委託要領の定めに従って適切に処理すること。

5. 企画公募に参加する者に必要な資格に関する事項

- (1) 予算決算及び会計令第70条の規定に該当しない者であること。なお、未成年者、被保佐人又は被補助人であって、契約の締結のために必要な同意を得ている者は、同条中、特別の理由がある場合に該当する。
- (2) 支出負担行為担当官文部科学省スポーツ・青少年局長から取引停止の措置を受けている期間中の者でないこと。
- (3) 委託要項(別添)に掲げる委託先の要件を満たす者であること。

6. 企画提案書の提出方法等

(1) 企画提案書の提出方法

- ① 用紙サイズをA4縦判、横書きとする。
- ② 提出方法は、E-mail、郵送、又は持参とする。
 - E-mail
 - ・提案1事業につき下記(3)のアドレス宛に送信する。
 - ・ファイルサイズが10MBを超える場合は、メールを分割し、件名に通し番号を付して送信すること。
 - ・送信メールの題名は、「青少年国際交流推進事業応募」とすること。
 - ・添付ファイル名は提案事業名と提案者名とすること。
 - ・提案書類は下記③で示すファイル形式で提出すること。
 - 郵送
 - ・簡易書留、宅配便等で送付すること。
 - ・封筒に「青少年国際交流推進事業」と朱書きのこと。
 - ・提案書類は紙媒体片面印刷で1部及び下記③で示す電子データで提出すること。
 - 持参
 - ・受付時間は平日9時30分～17時(12時～13時を除く)とする。
 - ・提案書類は紙媒体片面印刷で1部及び下記③で示す電子データで提出すること。
- ③ その他
 - ・企画提案書を提出する際には、組織の代表者名で提出すること。
 - ・企画提案書に関する事務連絡先(照会先)を明記すること。
 - ・企画提案書は、日本語及び日本国通貨で記入すること。

- ・ファイルの形式は、一太郎、マイクロソフトワード、マイクロソフトエクセル、マイクロソフトパワーポイント、PDF及びテキスト形式とする。
- ・郵送（又は持参）による電子データは、CD、又はMOにて提出すること。

(2) 提出書類

- ① 企画提案書（別紙 申請様式）
- ② その他必要と思われる資料

(3) 企画提案書の提出場所及び問い合わせ先

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
文部科学省スポーツ・青少年局参事官（青少年健全育成担当）付国際交流係
TEL 03-5253-4111（代）（内線3487）
FAX 03-6734-3795
E-mail sposeisy@mext.go.jp

(4) 企画提案書の提出期限

平成26年2月26日（水曜日）17時必着

(5) その他

企画提案書等の作成費用については、選定結果にかかわらず企画提案者の負担とする。
また、提出された企画提案書等については返却しない。

7. 事業規模（予算）及び採択数

事業規模：総額49,000千円程度を予定。

採 択 数：6件を採択予定。

※本企画公募は、平成26年度予算の成立を前提に行うものであり、予算の成立状況によっては、実施方法や経費、スケジュール等を変更する場合もある。

8. 選定方法等

(1) 選定方法

技術審査委員会において、提出された提案書類にて書類選考を実施する。

(2) 審査要領

別途定めた審査要領（別添）のとおり。

(3) 選定結果の通知

選定終了後、速やかにすべての提案者に選定結果を通知する。

9. 契約締結

選定の結果、契約予定者と企画提案書を基に契約条件を調整するものとする。なお、契約金額については事業計画書の内容を勘案して決定するものとするので、企画提案者の提示する金額と必ずしも一致するものではない。また、契約条件等が合致しない場合には契約締結を行わない場合がある。

10. スケジュール（予定）

- ①公募締切：平成26年2月26日（水曜日）17時
- ②書類審査：平成26年3月上旬～中旬
- ③選定：平成26年3月中旬
- ④事業計画書の提出及び契約締結：平成26年4月以降
- ⑤契約期間：契約締結日から平成27年3月10日まで

11. 誓約書の提出等

- (1) 本企画競争に参加を希望する者は、企画提案書の提出時に、支出負担行為担当官が別に指定する暴力団等に該当しない旨の誓約書を提出しなければならない。
- (2) 前項の誓約書を提出せず、又は虚偽の誓約をし、若しくは誓約書に反することとなったときは、当該者の企画提案書を無効とするものとする。
- (3) 前2項は、支出負担行為担当官が誓約書の提出を要しないと認める場合は適用しない。

平成26年度日独青少年指導者セミナー 派遣事業

「博物館における青少年教育」に係るドイツ派遣事業参加者 募 集 要 項

公益財団法人日本博物館協会
(文部科学省スポーツ・青少年局委託事業)

1. 趣旨

博物館の青少年指導者の相互交流や研究協議、意見交換等を通じて、青少年指導者の資質の向上と青少年育成の発展を図るとともに、両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築します。あわせて、共同体験を伴う異文化交流や意見交換等を通じて、広い視野とともに、異文化に対する理解や国際性を養います。

2. 派遣事業実施概要

- (1) 研修テーマ ドイツの博物館における青少年教育
- (2) 内 容 ラインラント地方（ケルン、エッセン、ボン）、及び、バイエルン州（ミュンヘン他）の博物館等を見学し、教育担当者との交流や意見交換を行います。
- (3) 日 程
 - 事前研修会 平成26年9月8日（月）午後～9日（火）午前 2日間
会場は東京（霞が関周辺）を予定
 - 派遣期間 平成26年10月1日（水）～10月14日（火） 14日間
（行程）10／1 成田発、ケルン着
10／2～10／5 ケルン滞在
（エッセン、ボンへの訪問を含む）
10／6～10／7
ビューティッヒハイム＝ビッシンゲン市
10／8～10／12 ミュンヘン滞在
10／13 ミュンヘン発
10／14 成田着
詳細についてはドイツ連邦博物館教育連盟(BVMP)にて調整中。
- (4) 募集人数 6名
- (5) その他 派遣期間終了後、研修レポートを提出していただきます。

3. 応募資格

- (1) 博物館に勤務し、青少年教育に携わる方
- (2) 派遣事業（事前研修会を含む）に全期間参加できる方
- (3) 心身の健康状態が良好で協調性に富み、研修計画に従って規律ある団体行動ができる方（宿泊先は基本的に個室ですが、相部屋になる可能性もあります。行程には1泊のホームステイが含まれる予定です。）

4. 諸経費（参加者の自己負担をお願いするもの）

- 参加金 約15万円（ドイツへの渡航費の半額相当分を予定）
- パスポート取得経費（有効なパスポートをお持ちでない方のみ）
- 事前研修会出席に係る交通費や宿泊費等
- 成田空港までの往復交通費、ドイツの機関・団体等への資料・お土産代、ドイツ国内でのプログラム中に提供される食事以外の飲食費、自主研修における交通費・見学費等は、別途自己負担となります。

※ドイツ国内でのプログラムにおける交通費、宿泊費、食費（飲み物を除く）、見学費等はドイツ連邦政府が負担します。

5. 応募方法

参加申込書（別紙1）及び館長による推薦書（別紙2）を、7月18日（金）までに公益財団法人日本博物館協会にご提出ください。

6. 参加決定について

提出された書類を基に、事業検討委員会において選考を行います。結果については、7月29日（火）までにご本人に連絡いたします。

7. その他

・ 派遣者について

日独青少年指導者セミナーは文部科学省スポーツ・青少年局が公益財団法人日本博物館協会に委託して行う国の事業です。派遣への参加が決まった方には、公益財団法人日本博物館協会より文書にて依頼をさせていただきますが、国からの派遣依頼と同等の扱いになります。

・ 参加金のお支払いについて

ドイツへの渡航費が決定した段階で、参加者にご連絡いたしますので、平成26年9月19日（金）までに、公益財団法人日本博物館協会が指定する銀行口座にお振り込みいただきます。

・ 参加決定後の取り消しについて

本人の都合により事業への参加を取り消す場合には、辞退理由書を提出いただくとともに、所定の取消料をお支払いいただきます。また、ドイツ研修の途中で帰国する必要が生じた場合は、自費にて帰国していただきます。なお、参加金は返金いたしません。

問い合わせ・書類提出先

公益財団法人日本博物館協会 日独青少年指導者セミナー担当

〒100-8925 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館

電話 03-3591-7190 / FAX 03-3591-7170

Eメール webmaster@j-muse.or.jp

平成 26 年度 文部科学省スポーツ・青少年局委託事業
日独青少年指導者セミナー（芸術分野）
博物館における青少年教育に関する日独交流事業報告書 2014

発行 平成 27 年 3 月
編集 公益財団法人 日本博物館協会
〒100-8925
東京都千代田区霞が関 3-3-1 尚友会館
TEL 03-3591-7190
印刷 タナカ印刷株式会社